
Seed ? そんなものより純粋種だ !

アズナブル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Seed? そんなものより純粹種だ！

【Nコード】

N 2 4 5 9 P

【作者名】

アズナブル

【あらすじ】

車に撥ねられ気がついたら、ティエリアにイオリア計画の全貌を聞かされる、ティエリアの説明を無視し、状況を把握すると、俺、刹那に憑依してる！？自棄とノリでダブルオーに乗りリボンを倒す。原作崩壊させるため太陽炉を破壊されず倒せたと安堵したら、目の前にミネルバが見えます？

ガンダム00の刹那に憑依したオリ主がSeed Destinyの世界で大暴れ・・・

原作知識で運命を変える！

1話 俺がガンダムに乗る？

青信号で横断歩道を歩いていたら、いきなり信号無視をした車が迫ってきた。

（あ、このスピード俺死んだな）

そんな事を考えてる内に体に衝撃と激痛が走る。

（化けて出てく為に跳ねたやつの顔を見ないと）

目の前が暗くなる、そして意識が戻り始めた

（体に痛みが無い？）

「今こそ話そう、イオリア計画の全貌を」

（は？イオリア計画？）

意識をハッキリさせ目の前を見るとティエリアの死体がある、そして回りはテレビやブルーレイでみたヴェーダーがある部屋。

（俺、刹那に憑依してる！！！！）

ティエリアの説明を無視して考える。

（落ち着け！）

俺はティエリアに気づかれないように指を動かす。

（痛覚はある、知識は……ガンダムの操縦も解かる、しかも現実にしたときより周りがよく感じられる、これがイノベーター）

ティエリアの説明が終わった、俺はもうやけくそでダブルオーに向かう。

（リボنزが出てくるはずだ、早く行かないとセラフィムが破壊されるな、こうなったら自棄だ、原作を破壊してやる、太陽炉を全て残してやるぞ）

「ティエリア！」

『どうした、刹那？』

「セラフィムを物陰に隠せるか？」

俺は通信でセラフィムを守るようにティエリアに伝える

『出来るが何故だ？』

「リボنز・アルマークが出てくるぞ！」

奴は必ず自分の専用機を用意してるはずだ！」

『わかった』

あっさりと（刹那）俺のこいう事を聞いてくれた

（おお。ダブルオーライザーだ、かっこいい！
じゃねえ、これから戦闘なんだ）

俺はダブルオーに乗り込み、コックピットに座る。

（どうやれば動くが解かる、刹那の知識か？これなら何とかなる）

ダブルオーを起動させ発進させる、コロニー型外宇宙航行母艦ソレスタルビーイングを出る、するとビームが迫ってきた。

セラフィムは移動した為、リボنزはダブルオーにビームを撃つて来たみたいだ。

（よし、とりあえずセラフィムは守られた）

俺はビームを避け、撃つてきた方向に機体を向ける。

「そこか、リボنز・アルマーク」

「感謝して欲しいな、君がその力を手に入れたのは僕の御蔭なんだよ？」

「俺の前で神を気取るつもりか？」

「いや、神そのものだよ」

「それほどまでに人類を支配したいのか？」

こんな台詞だったかな？

「そうしなければ人類は戦いを辞められず滅びてしまう、救世主なんだよ、僕は」

(この後の台詞忘れたー！！)

「支配を求めるなら貴様を倒す！」

ダブルオーのGNソード？をリボンスに向ける。

「いい覚悟だ！」

なんとかアニメ道理になったか？

「ダブルオーライザー！」

「リボンス・キャノン！」

「刹那・F・セイエイ」

「リボンス・アルマーク」

「出る！」 「いく！」

ダブルオーライザーのチャージまでリボンスの砲撃を避ける。

『ちょこまかとー！！』

業を煮やしたのか、ワイヤーが飛んできたが、それも避ける。

原作ではこのまま接近戦で決めようとして、一撃を貰ったはずだ。

リボンスガンダムに距離を取りながらビームを連射。

「チッ！」

俺が接近すると思ったのか舌打ちが聞こえた。

こっちのビームが当たり左腕を破壊する。

「逝け、ファング！」

ファングを発射されるが、落ち着いていると動きが見える。

「見える、見えるぞ、俺にも！」

ファングを避けながら破壊する。

（なんか、テンション上がったきた！）

「純粹種の力か！？」

11時の方向に殺氣らしきものを感じた。

（この感じ！ヒリング達か？）

11時の方向からビームが飛んできたがそれも余裕で避ける

「援護しますよ、リボンス」

「余計な事を」

「ヴェーダのバックアップがなくなつたて、人間なんかに！」

砲撃してくるリボンスとリヴァイブの動きを予測し回避行動に移す。

そして、接近して来たヒリングをGNソード？で叩き斬った。

「そ、そんな！？」

ヒリングの機体が爆発した。

「ヒリング！」

「チッ！」

リヴァイブがこっちに向かつてる途中にピンク色のビームがリヴァイブに向かう。

「来たか、ロックオン、アレルヤ！」

「おいおい、三対一で一機破壊って」

「ハッハハハハ、超兵復活といこうぜ！」

「新型は俺がやる、もう一機を頼む！」

「オーライ！」

「打ち殺すぜ、なあアレルヤ？」

ロックオンとマゼルヤ？がリヴァイブに向かった

「これで一対一だ！」

リボンスガンダムに変形し、ファングを放つ。

「ファング！」

刹那の能力なのかやはり先程と同じように動きが見える。

「無駄だ」

全てのファングを破壊する。

「トランザム！」

リボンス・ガンダムが赤く光り、接近してきた。

「チャージは？」

俺は画面をみると、100%を越えていた

「トランザム！」

リボンスの攻撃を避けることに専念した、
原作と違いリボンスは全てのファングが破壊されてる上、左腕も無い。

俺はビームを喰らい、当たる前に量子化する

「量子化したと！？」

「うおおおお！」

俺は後ろからコックピットにGNソード？をコックピットに突き刺す。

「僕が、僕が負ける・・・」

リボنزガンダムは爆発した、煙で回りが見えない。

「ハア、ハア、とりあ・・・えず・・・太陽炉を破壊されず倒したぞ」

周りの煙も消え始め、俺の興奮してい気分も落ち着き始めた。

「ロックオン達は？」

煙が消え、ロックオン達のいる場所に移動しようとしたが。

「レーダに移ってない？それにソレスタルビーイングが無い！？」

さっきまで存在していたものが消えてる

「戦闘に夢中になり大分離れたのか？」

ピピピ

「熱源？」

レーダに移ってる熱源の方向に移動する

本来ならトレミーのはずなのに、そこに移っていたのは

「ミ、ミネルバ!？」

2話 議長に接触

交通事故で死んだと思ったら、機動戦士ガンダム00の刹那に憑依していた、

しかも最終回？自棄とノリでリボンを倒したと思ったら、今度は

「ミネルバ~~~~~!？」

おいおい、なんだこれ、こっちの世界かよ!? しかもダブルオーに乗ったままだ？

「どうするかな?・・・よし、ガンダムに乗りたい夢も叶ったし、折角だからこのまま原作破壊するか!」

俺はミネルバを追いかけた、ミネルバが追いかけてる戦艦は確か連合のがーテイルーだっけ？

ボギー1のほうが簡単なのでボギー1でいいか。

「ボギー1は?あれか、推進タンクが無い、てことはデコイの時か!」

俺は通信で咄だと言うことをミネルバに伝えた

ミネルバ ブリッジ

「シンとルナマリアでけん制します、議長!？」

「いいかな、艦長? 私はオーブの方々にもブリッジに入ってた
だきたいと思うのだが」

「え・・あ、それは」

「君も知つてのとうり、代表はさきの対戦で指揮をとっていた、そ
の視点でこの艦の戦いを見ていただこうと思ってね」

「わかりました」

「ん! ? 艦長、所属不明のMSから通信です」

「え! ? なんて? 」

「連合艦はデコイを仕掛けていると、敵艦の作戦行動がデータで送
られてきました」

「開いて」

「はい」

そこには隕石にワイヤーを放ち、そのまま隕石を一周しミネルバの
後ろに着く映像データが映し出された

「これは! ? 」

「このデータを送ったMSの映像です」

そこにはガンダムタイプのMSは映っていた

「「ガンダム!?!」」

「このMSは?そのあの緑の粒子は?」

「艦長、どうする、私はこのパイロットが送ってきた敵艦の作戦は本当だと思うが?」

「しかし」

「このデータにある作戦は敵にとって最良の手だ、こっちのMSにけん制させ、戦力を分断できる、このデータを送らず、この作戦で実行したほうが我々を落とせていた」

「わかりました、シンとルナマリアは艦の後ろに着かせて、私達はそのままボギー1を追い、シン達にボギー1の撃墜をさせます」

刹那 Side

「どうやら、シン達をミネルバの後ろ回し、ミネルバの後ろをとったボギー1を迎撃出させるか」

ミネルバはそのままボギー1を追いかける、ボギー1はワイヤーを撃ち、ミネルバの後ろに回ろうとしたが、そこにはインパルスとザクウォーリアが待ち構えていた。

ボギー1

「なに！？こつちの作戦が読まれた、ステイング達を戻させる、残りのMSも出せ、俺もMAででる」

ミネルバ

「本当にこの作戦を取った！」

「シン達にボギー1の迎撃に向かわせ、残りのMSはミネルバの援護をさせて」

刹那 Side

「さうて、おっさんはどう出る？このまま撃墜されるか、それだとイキナリ原作崩壊だな、ん？」

強奪された三機か！」

俺はボギー１の援護に向かう三機のMSに向かった。

ミネルバ

「艦長、強奪された三機が接近してきます」

「レイ達に迎撃に向かわせて」

「はい、あの所属不明機が強奪された機体に向かっていきます！」

「なんですて！？」

所属不明機は三機を相手に押していた、三機のビームの雨をよける、そしてライフルでガイアの腕を破壊した、そして剣を構えガイアに襲い掛かった。

「あれは実体剣！？無理だVPSに実態剣はきかない」

アーサーが叫ぶが。

ガイアは咄嗟に避けたがコックピットを避けるのがやっとだった。

「なっ！？VPSが効かない！？」

「なんなんですかあのMSは！？」

ボギー1からでたMAの援護で、ボギー1は迎撃できなかった、ボギー1はそのまま帰還信号を発射し、この場を離れた、強奪されたMSはスモークを発射させ戦場を離脱した。

「もう少しだったのに、あのMAは厄介ね」

「そうだな、しかし今回はあのMSに助けられた、艦長、あのMSとコンタクトは取れないか？」

「危険です」

「相手は所属不明機ですよ、いくら今回あのMSの御蔭で助かったといっても軽率すぎます！」

「艦長、そのMSから通信です！？」

「そうか、このまま繋げてくれ」

「議長！？」

「ただの通信だ、怪しい動きをするならこっちのMSで攻撃すればいい、違うかな？」

「わかりました、通信をつなげて」

「はい！」

モニターに移ったのは見たこと無いパイロットスーツだった

「通信に応じてくれて礼を言う、自己紹介は必要かな？」

「いや、かまわんよ、それと先程の情報をありがとう、君のおかげでこっちの被害は少なくすんだ、それより、君の用件を聞きたい？」

「こちらが手に入れた情報では、パトリック・ザラ派のザフト兵がユニウスセブンを地球に落とそうとしている」

「何だつて！？」

「それは本当かね？」

「ユニウスセブンの軌道を再計算すればわかることだ、ナチュラルにユニウスセブンを落とすメリットはない、それは今のザフトも同じでしよう？それと本国に連絡を入れるなら戦闘の可能性もあると伝えたほうがいい」

「そうだね、我々がそんな事をしてメリットは全く無い」

議長が話してる間。艦長は急いで本国に連絡をいれユニウスセブンの軌道を再計算させるよう頼んだ。

「これは！？たしかにユニウスセブンは地球落下コースに入ってます！」

「そ、そんな！？」

「艦長、至急本国に連絡をして、ユニウスセブン落下をとめるよう部隊を出させる」

「はい！」

「我々はこのまま、ユニウスセブンに向かう、姫そういうことで、艦を降りるのはしばらく後になりますが、よろしいでしょうか？」

「それは、構わない、ユニウスセブンの落下を防ぐのが最優先だ」

「ありがとうございます」

（ザラ派のザフト兵がユニウスセブンを）

アレックスと名乗ったアスランは動揺していた

「君はどうする？」

「俺もこのまあユニウスセブンに向かう」

「だったら、この艦に乗ったらどうだ？」

「」「議長！？」「」

「俺は所属不明機の機体に乗ってるんだぞ？」

「君の情報のおかげで先の戦闘とユニウスセブンの件後手に回らずにすんだ、それぐらいはさせてもらおう」

「差し出がましいが、この機体を調べるのは遠慮していただきたいが？」

「かまわんよ、艦長。彼にこの艦の搭乗の許可を議長権限でだす」

「わかりました」

「すまないね、艦長」

「搭乗許可をだしますが、アナタがおかしな動きをすればわかりますね？」

「その時は後ろから撃つても構わん」

所属不明機のMSをミネルバに搭乗させた。

刹那 Side

（さてと、ミネルバに乗ることが出来た。後はどう演技をするかだ。カガリもいたな、嫌いなんだよね俺、Seedの砂漠編のときからなんかむかつくし、よしシンが両親をなくしたときにその場にいあわせたことにするか）

MSデッキ

デッキには議長やアス八代表がきていた、所属不明機から一人のパイロットが降りてきた。

「見たことなパイロットスーツだな？」

「それに強奪された三機相手に、余裕だったらしいぞ？」

「マジで？」

クルー達はひそひそと話す。

降りてきたパイロットはヘルメットをとった、そこには18歳ぐらいの青年だった。

「刹那・F・セイエイです、搭乗許可を出していただいております、ありがとうございます、デュランダル議長」

「いや、君のおかげで多くの人間が救われるかもしれないんだ、気にする必要はない」

二人は握手をした。

「お前は!？」

刹那と名乗った青年はシンの顔をみて驚いた

「知り合いなのかい？」

「いえ、俺は、いや私はあったことはありません」

「そうだろうな、君はあの時周りを気にする余裕が無かっただろう？」

「え!？」

「君が家族を無くした時、俺もその場にいた、フリーダムの流れ弾で君の家族が死んだのを見てしまったんだ」

「!?!」

「そ、そうなんですか？」

「あ、すまない、嫌な事を思い出させて（アスラン達は気まずい雰囲気になったな）」

「いえ、気にしないでください（フリーダムが俺の家族を!）」

「つと、すみません議長、勝手に話をして」

「構わんよ、それよりユニウスセブンの詳しい話を聞かせてもらいたい、部屋に案内しよう」

刹那と議長とオーブ代表は部屋に向かった

「それにしても、見たこと無い機体だな？」

「議長は触れるなと命令したからな、絶対触れるなよ」

「はい」

メカニックは刹那の機体を観察していた。

刹那 Side

議長に連れられ部屋に入り椅子に座った。

その後、見たこと無いジンをみて、パイロットスーツで追いかけていたら、ユニウスセブンに何かをしていたと報告した、映像は無いが。

「そうか、しかし困ったものだ、アーモリーワンの事件で厄介なのにユニウスセブンまでもか」

「心中お察します、それに連合に彼らの映像を撮られたら、それを世界に発表するでしょうね」

「それは、一番困るな、それだとまた二年前の大戦の繰り返しになる」

「それだけは、なんとしても避けないと」

「だが連合もそろそろユニウスセブンの軌道に気づき、向かってるでしょね」

「そうだろうな、なんとしてもユニウスセブンの落下だけでも止めないと」

「それが優先ですね」

「それと、君の機体は見たこと無いが？」

「あれは曾祖父が設計した機体です、木星で作ったエンジンGNDドライブを搭載した機体です」

「木星!？」

「はい、木星の高重力で20年近くかけて作ったと祖父に聞きました」

「GNDドライブは他のエンジンとどう違うんだ？」

太陽炉の性能を説明をした、量子化などは戦闘で実際見ないと信じないので説明はしていない、

無論イノベーター化の事を話していない、くわえダブルオーは俺じゃないと起動できないといってある、他のガンダムマイスターも起動できるが、この世界にいないなら、事実上俺だけしか起動でないMSの組み立ては上手くごまかした。

カガリは俺がオーブの事をよく思っていないと悟ったのか、この場を離れ、用意された部屋にアスランと戻った。

「艦長、君も席をはずしてくれないか？」

「しかし」

「彼は武器を持っていないことは知ってるはずだ、私は彼と一対一で交渉がしたいのだよ」

「わかりました」

タリアも出て行き、議長と二人だけになった

「さてと、君に頼みたいことがある」

「ミネルバに乗って、パイロットとして働いてくれますか？」

「さすがだね、ミネルバは新人の集まりだから、現場を知らない。ユニウスセブンの件は世界中に知れ渡り、それがザフト兵がやったことも知られたら、連合は、いやブルーコスモスが動き出すだろう、そして新型艦であるミネルバが狙われる」

「でしょうね、未だにコーディネータはそらの化け物だとほざいてるでしょうから」

「君の戦闘能力はさきの戦いで見せてもらった、報酬は弾むが」

「いいですよ、連合軍のやり方は気に入らせんから」

「そうか、助かるよ」

「それと、オーブは秘密裏にアークエンジェルとフリーダムを持っている」

「本当なのか!？」

「これは間違いない、いずれ彼らも戦場に介入するだろうし、先の大戦で自分達が正しいと思って戦場に介入するだう」

「やっかいだな」

「アナタにとってラクスは邪魔だが、襲撃はよしたほうがいいでしょう」

「それもお見通しと言っわけだ、全く恐ろしいな」

「予想は出来まず、議長にとってラクスは厄介な存在、プラントは今でもラクス派は多いですから」

「そう考えると、たしかに予想されやすいな」

「アナタが間違った道を進まない限りアナタを撃ちません、
（刹那の感情、戦争根絶の意思が強い、本来の俺の感情も混ざってるな、議長が世界を歪ます最後の存在なら消すか？）」

「そうか、なら私が道を踏み外したら、私を撃ってもらおう、艦長には君がミネルバのクルーになってもらったと伝えておこう、機体の整備は？」

「装甲だけお願いします、あと――」

GN粒子用の武器を作れないか試しにデータをみてもらったら、可能みたいだ、GNソード？を何本か作ってくれる様頼んだ

議長は俺を信用しているかどうかは怪しいな、でも俺が連合とオーブそしてラクス派が気に入らないとわかってもらったようだ。

デュランダル Side

「刹那か。

連合やオーブ、それにラクスを気に入らないと示してる態度は好感がもてる、

そのうえ、アレックスの正体がアスランだと知って、ザラ派だと強く言った、その裏世界の事情に詳しい、面白い人物だ」

刹那を一時期雇うと。ミネルバクルー達に伝えた、余ってる部屋にパイロットであるシン達に案内させた

「さて、彼らにラクス襲撃をやめさせるか、フリーダムがなければ成功するが、フリーダムがある以上作戦は成功できない、だったら戦場で消えてもらおうかな、キラ・ヤマトそしてラクス・クライン」

2話 議長に接触（後書き）

駄文ですみません、
主人公は嘘つきですね、原作知識を活用するため都合いい設定を作りました

3話 アンチアスハ同盟？

刹那 Side

俺はシン達にあいてる部屋に案内された、自己紹介などはそこでしようと言っている、

廊下の真ん中であるものじゃないし、部屋に着き、各自適当な場所に座った、

部屋は原作のシンとレイと同じだった。

（二人部屋だと、あと一人はアスランか？せめてハイネにしてくれ）
など考える。

「さて、自己紹介しようか、MSデツキで言ったように、刹那・F・セイエイだ、年は21だ」

よく考えると、アスラン達より上だな。

三人の名前を聞いた後に敬語をやめてくれと頼んだ。

「刹那はアスハの事をどう思う？」

おう、シン君いきなりだね。

レイとルナは呆れてる、同じMSパイロットならさきにそのことを話すだろうと思っていたからだ

「正直に言つて、幻滅だ」

「幻滅？」

「しつてるか？カガリは二年前の大戦で活躍したと言われてるが、その前はゲリラに参加していた。

自分の父親が死ねば、次のオーブ代表は自分なのに、政治に関する勉強よりゲリラに参加したり、

MSに乗れるように訓練してたんだぞ？

いまのオーブがあるのはいけ好かないがセイランの御蔭だと思う、政治は勢いとやる気だけじゃあ国は良くない」

俺の返答にシンは少し嬉しそうにしていた

「ゲリラって本当なの？」

「ああ、アークエンジェルで好き勝手やってたみたいだ、戦闘機に勝手に乗ったり、

ゲリラに参加したときはザフトが悪いと一点張りだったらしい」

原作では嫌いだったな、砂漠編なんかもうデスノートに名前を書きたいぐらいだった、

MSもないのに4機？だったかな、バクウに挑んで、返り討ちにあったらあの態度。

（思い出しただけでも腹が立ってきた！）

「どうしたんだ、刹那？」

「え？いやなんでもない、アスハは好きになれないなと考えていたんだ」

「それじゃあ、シンと同盟むすべるじゃない？」

「そうだな」

「と、それより三人は戦闘の連携は取れてるのか？」

「うつ・・・！」

「シンはとれていないな、何時も独断だ」

「そうね、でも大気圏内でザクでインパルスと連携は難しいけど」

「大気圏内だというのがないが、宇宙だと連携は必要だぞ、シン？」

「わ、わかってるよ」

「くく、そうだいいが。まじめな話、ユニウスセブンの落下を止めるのはいいが、確実に邪魔が入る」

「邪魔？」

「ユニウスセブンを落下させようとした連中だろう」

さすがレイ、わかってるう。

「そう言う事。おそらく元ザフト兵だろう」

「「え！？」」

シンとルナが驚いてる、息ぴったりだ、式と幹也を思い出す。

「驚くことじゃないだろう、連合軍がするメリットはないぞ、先の大戦の兵士の中ではあの結果を気に入らないと思ってる兵士は結構いたぞ」

「でもだからって」

「ユニウスセブンに家族がいた者達ならどうだ？」

ユニウスセブンに家族がいたのなら、ユニウスセブンを破壊され、家族を失った、その実行した連合軍と和平条約、殺された側にとって冗談じゃない結果だろう。

それに気づいたのかシンもルナもいい顔をしていない。

「頭で理解しても、感情が上手くいかないだろう、目の前で大切な人が殺されたら、大抵なら敵を討ちたいと思うからな」

「そうだな、俺もフリーダムが憎い」

「もっとも俺達パイロットは殺す側だ、そのことを自覚しろよシン？」

「！」

「俺達は殺し合いをやる、けど人間は死ぬ時はアツサリ死ぬぞ、けど死んでも後に残る人達に何かを残せるんだ（ロックオンが死んだ時、刹那とティエリアに大きな影響を与えたからな）」

（！）

その言葉にレイは反応した。

「そうだな、俺達は敵軍と戦う、俺達がMSを落とした分だけ、それは死人の数だから」

シンが淡々とつぶやく。

その後、自販機がある場所に案内してもらった、そこにはヨウランやヴィーノだったか、そいつらも居た。

「あ！どうも」

「ああ、機体の整備ありがとう」

「いえ、それにして面白い機体ですね」

「敬語はいいよ」

ヨウラン達にいう

「インパルスより凄いで、右腕に装備してるライフルは実態剣と連

動してるし」

「それより、後ろのある戦闘機？あれはパイロットは要らないのか？」

「戦闘機？」

「ああ、あれは00ガンダムの支援機だ、ダブルオー単機だとは二つのエンジンを同調させるのが精一杯で、安定稼働していない、支援機であるオーライザーとドッキングすることで本来の力を使えるんだ、（もつとも00ガンダム単機と純粹種だけでもかなり強いけど）」

「へー、そのオーライザーの制御はMSでやってるの？」

「いや、オーライザーはハロに！ってハロを忘れてた」

「ハロ？ってあのラクス・クラインが持ってた小型ロボットの事？」

「同じようなものだ、ハロはオーライザーの制御の支援をしてるんだ、（純粹種となった今ならダブルオーからの制御も可能だな）それより何の話をしてたんだ？」

「そうだ、ユニウスセブんだよ、あれをどうするんだろって話をしてたんだ、あんなデカイのどうやって軌道を変える話をしてたんだ」

「もう軌道は変えられないから砕くしかないんだ」

「「「砕く!?!」」」

「でもでかいぜ、半分くらい割れてるといっても8キロはあるだろ?」

「そんなもん、どうやって砕くの?」

「それに、あそこにはまだ死んだ人達の遺体が沢山あるし」

「だが衝突すれば地球は壊滅する、そうなれば何も残らないぞ、そこに生きるものは」

「地球滅亡?」

「だな!」

「そんな」

「でもそれはしょうないっちゃ、しょうがないじゃない、不可抗力だろう、けどへんなごたごたも綺麗になくなって案外楽かも?プラントにとって」

「良くそんな事がいえるな、お前達は、しょうがないだと?案外楽だと?これがどんな自体か、地球がどうなるのか、どれだけの人間が死ぬのか本当にわかってるのか?」

うつわく原作道理だ。

「すいません」

「やはりそういう考えなのか？お前達ザフトは？あれだけの戦争をして、あれだけの思いをして、
やっとデュランダル議長の姿勢の元で変わったんじゃないのか？」

「よせカガリ」

アスランがカガリをなだめる。

「別に本気で言ってたわけじゃないさ、ヨウランも。そんな事もわからないのかよアンタは？」

「なんだと！？」

「よせ、カガリ！」

「シン！言葉に気おつけろ」

「そうでした、この人は偉いんでしたね？オーブの代表でしたよね？」

「貴様！？」

「いい加減にしろカガリ！」

アスランがカガリを止め、シンに近づきシンを睨む。

「君はやけにオーブが嫌いなんだな、昔はオーブに住んでいたんだろっ？くだらない理由で代表に突っかかるのならタダで置かないぞ？」

「ハハハ、くだらない理由か？（さっき俺が言っシンの家族はフリーダムの流れ弾に当たって死んだと忘れてるみたいだ）」

俺は笑いながらアスランに言う

「関係なくはないだろう、シンの家族はアンタの弟であるフリーダムのパイロットに殺されたんだから」

「「え!？」」

俺とレイ以外は驚いている。

「弟って、俺の家族はこいつの弟に殺されたのか？」

「そうだろ、フリーダムのパイロットと双子なんだからな」

「う・・・!」

「う……！」

そのことは表向きには出ていないようだ、オーブでもそれなりの地位がある人間だけが知っている情報だ。

「——！」

シンが声を上げず、カガリに殴りかかろうとするが、俺が咄嗟に止めた。

「待てシン！そんな事をしたら国際問題になる、最悪戦争だぞ？」

「……クッソ——！」

ダンッ

シンは自販機を殴り、走って何処かへ行った。

「ってことだ、関係はあったぞ。そもそもアンタの父、ウズミが死ぬ必要はなかったはずだ、それをアンタみたいな未熟な人間にオーブを押し付けた、シンはオーブが憎いんじゃない、今のオーブが嫌いなんだよ」

「それは、…しかし代表は頑張ってるんだぞ？」

アスランがカガリの弁護を始めたが。

「政治は勢いや努力だけじゃ駄目だろう、結果を出さなきゃ駄目だ、
『私は頑張って努力しました、けどその努力が実りませんでした』
とても市民に言い訳するの？
政治家は努力してもそれが実らなかったら意味はないだろう？」

「く！」

「あんたは政治家としては三流だ」

俺はそう言ってこの場を後にした。

ユニウスセブン到着まで後僅か。

『コンディション・レッド発令、各員は所定の位置につけ。繰り返す、各員は……』

パイロットは所定の位置に向かう。

原作道理、アスランはザクに搭乗する、
それにしても、カガリはどれだけ死ぬかとかい言ったのにベットで
お昼寝か、どんな神経してるんだ？

「艦長、戦況は？」

「ジュール隊が苦戦してるわ、先の強奪機体の二機もきて乱戦になってるわ、あなたの情報通り見かけんないジンも確認できたわ」

「アスランはジュール隊と合流させてください、シン達と連携をとらせるよりそっちのほうがいいはずです、強奪機体は俺が引き受けます、万が一強奪機体と戦うならアビスの破壊を優先させてください」

「なぜ？」

「アビスは地球だとかかなり厄介な相手になります、宇宙にいる今が叩くのがベストです」

「わかったわ、全パイロットに告げるわ」

「さすがだね、これからの事を考えられるか」

「ええ、たしかにアビスは地球で戦うと一番厄介な敵でしたね」

「まったくだ、アレを作ったのは我々なのに失念していた」

シン達に俺が行ったことを伝えたようだ。

「シン・アスカ、コアスプレnder 行きます！」

「レイ・ザ・バレル機、出るぞ！」

「ルナマリア機、出ます！」

「アスラン・ザラ出る！」

各機ミネルバから発進していく。

そして、俺の最初のミネルバからの出撃。

「刹那・F・セイエイ、ダブルオーライザー出る！」

4話 ユニウスセブンの戦い

カオス アビス

「おいステイング見てみるよ。あの緑の粒子を出す奴がミネルバから出てきたぜ」

「ちょうどいい、さっきの借りを返すぞ！」

『おいおい、お前等作戦を解かっているのか？』

「あれが邪魔をするなら、叩くのがベストだろ？」

『たつく、わかった！お前らはあの粒子をだす機体を相手しろ、俺も出る！』

「ステイング、どっちが先にあの首を取れるか競争しようぜ？」

「望むところだ！」

刹那 Side

「おいおい、向こうから来ちゃったぞ？」

「三対一で苦戦したのが悔しかったらしいな」

レイが通信で言ってきた。

「それじゃあ、アスランはジュール隊とシン達はそのままでジンを相手を。」

あの二機は俺に用があるみたいだ」

「了解」

「わかった！」

「頼んだぞ！」

俺はカオスとアビスと交戦する。

二機のビームを避ける。

「クッソ！なんであたんなんだよ！」

「クッソ、こっちは二機だぞ！」

カオスはビームを連射し、アビスがビームランスを構え接近してき

た。

俺はGNソード？でアビスのランスを真っ二つにした。

「ここは俺の距離だ！」

アビスに止めを刺そうとした瞬間、エグザスのガンバレルが襲ってきた。

「ん！仮面も来たか！」

エグザスのガンバレルとカオスの機動兵器ポッドで攻撃してくるが。

「ファングに比べたら遅い！」

「おいおい、全くあたらないの？」

「何やってるんだよ、ボケ？」

「ンな事より、攻めるぞ！！！」

アビスは全ビーム砲を放ち、カオスはミサイルを全て撃った。
そして、エグザスはガンバレルとリニアガンを撃ってきたが、それ
も避ける。

「当たらなければどうと言うことはない！」

俺はまずミサイルをビームで落とし後、
ガンバレルを破壊していく。

「くそっ、全部破壊された!？」

「何やってるんだよネオ！」

「アウル、余所見をするな！」

「え!?!うわっ！」

「「アウル!?!」」

隙を突き、ビームを当てる、連射をしたが、カオスが盾でアビスを
守る

「チッ!?!」

「撤退するぞ!」

「クッソ!」

「ちい！」

このまま追いかけて、撃墜できたがユニウスセブンが先だ。

シン Side

凄い、刹那は三機相手に圧倒していた。

「シン！余所見をするな、来るぞ！」

「ああ、（俺だって！）」

「俺とルナマリアで援護する、お前は接近戦で確実に一機ずつ破壊しろ！」

「わかった！」

レイとルナが射撃でジンを追い詰めていく、俺はその隙にビームサ―ベルで切りかかる。

「ぐわっー！」

一機撃破

「うち、例え同胞でも邪魔をするなら容赦はせん!」

向こうも三機で連携をしてきた。

「速い!?!」

「油断するな、こいつらはかなりの熟練者だぞ!ジンだからと言って油断するとやられぞ!」

「わかってる!」

メテオブレイカーが二基破壊された。

「チッ!」

アスランもジェル隊と連携をとって一機ずつ破壊していく。

「ジンでこの動きってどういうやつ等だよ?」

「口より一機でも破壊するぞ」

「命令するなアスラン!」

しかし、敵はかなり強いのか一機倒すだけでも時間が掛かっている。

メテオブレイカーの一つが起動しユニウスセブンを真っ二つにし、片方は離れていくが、もう片方は地球に向かっていく。

「まだ足りない、もっと砕かないと!」

そう言って、残りのメテオブレイカーを地球に向かっていく破片に移動させる。

「ン!？」

メテオブレイカーを持って移動してる部隊にジンは襲う。

「アスラン!ディアッカ!」

「「ああ」」

三人の連携でジンを破壊する。

メテオブレイカーがまた起動し、さらに真っ二つに分けるがそれでも残骸が大きい。

「まだ足りない！」

「ミネルバから通信！？」

『各機体は母艦に戻れ、ミネルバのタンホイザーで残りの破片を破壊する』

「戻るぞ！」

「つち！」

刹那のダブルオーがユニウスセブンに向かった。

「刹那！？」

「戻れ、帰還命令が出た、もうMSで無理だ！」

レイが刹那に通信で叫ぶ。

「トランザム！」

そう叫んだとき。ダブルオーライザーが赤く光、ソードを真上に上げたと思ったら。

巨大なビームサーベルになった。

「「「なッ!?!」」」

ビームサーベルを振り下ろす刹那。

ユニウスセブンは徐々に斬られていく。

ダブルオーを見たジンのパイロットは焦り。

「させるか!」

ジンがダブルオーに襲い掛かる。

「クッソ!」

俺はダブルオーに襲い掛かるジンを止めようとしたがジンのビームが刹那のダブルオーの背中に命中した。

しかし、ユニウスセブンはさらに真っ二つに出来た。

「刹那!」

俺はすぐさまジン撃墜し、ダブルオーに向かうが残ったジンが襲ってきたが。

「クッソ！」

ジンが一機破壊される。

「え！？」

「いけ！シン！」

アスランがジンを破壊したようだ。

「わかりました！」

俺はインパルスでダブルオーを掴み通信をする。

「無事か、刹那？」

「ああ、破壊されたのはオーライザーだ、だがその所為で動かない」

「なら俺がミネルバまで運ぶ！」

「させるかーーーーー！」

ジンが襲ってきたがアスランが止める

「こんのー！」

「我が娘の墓標、落として焼かねば世界は変わらぬ！」

「「娘！？」」

「ここで無残に散った命の嘆きを忘れ、撃ったもの達と何故偽りの世界で笑うか、貴様らわー！？」

「「！！！！」」

「軟弱なクラインどもに騙され、ザフトは変わってしまった！何故気づかぬか？」

最後のジンが襲い掛かってくる

「我らコーディネータにとって、パトリック・ザラがとった道こそ、唯一正しきものだトーーー！」

「な・・・！？」

動揺するアスランに最後のジンが襲い掛かるが、ダブルオーがビームを放ちジンのコックピットを貫く。

「戻るぞ！これ以上は破壊できない」

「ああ、でも動くのか？」

「オーライザーのドッキングを解除した」

刹那は背中から離れたオーライザーを掴んだ。

「アスラン、行くぞ！」

「ああ」

刹那 Side

原作以上にユニウスセブンを破壊できたがそれでも被害は多きだろう
俺達はミネルバに帰還した、原作と違ってシンとアスランはミネル
バに居る、
それだけじゃなくデュランダルもミネルバに残っていた。

ミネルバ ブリッジ

「タンホイザー起動！撃てー！」

ユニウスセブンを破壊される

「しかし、今回も彼のおかげで被害を襲えることが出来たな、艦長
？」

「はい、しかし、とんでもないビームサーベルでしたね？」

「ええ、あんな兵器見たこと無いですよ」

アーサーが興奮気味に言う。

だがオーライザーが破壊され、ダブルオーの力は半減された、

議長はすぐさまオーライザーの修理に取り掛かるよう命令した。

4話 ユニウスセブンの戦い（後書き）

今回でオーライザーが破壊されました、ある回で復活しますが、ザンライザーを入れるか迷っています、ちなみに破壊した理由はダブルオーライザーだと強すぎて面白くないので、しばらくダブルオーガンダムで行きます、もつともそれだけでも強いですけど、ではまた次回に。

それと誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しく願います。

5話 Z A F T

刹那 Side

ミネルバが大気圏に突入し無事地球に不時着した、その時、メイリンからデュランダルが呼んでいると伝えられた。

原作だとデュランダルは地球に下りなかった。

どう出ようかな、原作にない流れだ。

俺はダブルオーを降り、マッドにオーライザーを見てもらった、どう見てもコックピットが駄目になってるが、両肩のバインダーは生きてる、デュランダルの話が終わったら確認するつもりだ。

「シン、アスラン。議長が呼んでいる」

「え!？」

「俺もか!？」

「いや、実際俺だけだが、お前らの顔を見たら、連れて行かないと思っ
て」

「なんで?」

「お前等、さっきの元ザフト兵の言葉が気になってるだろう?前議

長の事は現議長に聞くのが手っ取り早い」

「俺は必要ないだろう？」

「アスラン、お前は勘違いしてるから、このままにしておけん、シンは珍しくプラント外生まれのコーディネーターだからそこからの貴重な意見も聞ける」

二人は渋ったが俺は無理やり連れていった。

「議長、入ります」

「おや！何故二人が？」

「この二人は敵の通信を聞いたので」

「通信？」

俺は最後のジンに乗っていたパイロットの言葉を伝えた

「そうか、ザラ議長の（彼の言ったとおりだったな）」

「はい、彼らは父の言葉に踊らされた人達なんです」

アスランの拳は震えていた。

「勘違いしてるぞ、連中は自分達の行動を正当化するため、ザラ議長の名を出しただけだ」

「私も彼の意見に同意だ、君が気に病む必要は全くない」

「だが父は二年前、どうしようもないまでに戦争を拡大させ、愚か
としか言いようのない憎悪を世界中に撒き散らしたのは事実です」

「それがおかしいんだよ」

「え!？」

「二年前の大戦の原因はブルーコスモスが起こした血のバレンタイ
ンがそもそもの原因だ、
プラント受けた仕打ちを見たらザラ議長はよく我慢したと思うぞ」

「あの、プラントが受けた仕打ちって？」

「世間は大戦のことであまり知られていないと思うが、かなり酷い
仕打ちを受けた」

俺はプラントが受けた仕打ちをシンに語った。

プラントの、地球へのエネルギー・工業製品供給地化が進み、
理事会は、プラントに重いノルマを化した、それから三年後、
プラントのエネルギー生産部門が、ブルーコスモスのテロにより破
壊され、

評議会は理事会に一時的な輸出停止を申し入れるが、
理事国側は拒否して、プラントは家畜同然になったこと、
そのことでプラント技術者が一斉サポタージュをしても、
理事国はMA艦隊でプラントを威嚇そして血のバレンティン。

「な、なんです、全部ブルーコスモスや理事国が原因じゃないです

か？」

議長もアスランも怒りを感じていた。

「そうだ、ザラ議長の目的はあくまで自治権や貿易自由権を獲得することだった、

プラントはZ A F Tを解体し軍事的組織『ザフト』にしなければプラントは地球の奴隷組織になってた」

「エイプリルクライシスでNジャマーを落としたのは、ザラ前議長が冷静だったからと思うぞ
Nジャマーではなく核を撃っていたら地球人は終わっていただろうし」

「Nジャマーは兎も角、我々がこうしてプラントで生きていられるのも軍事的組織になったおかげでもある、
だが理事会はそれを許さず、二年前の泥沼の戦争だ」

「だから、アスランが必要以上に気にする必要はないぞ」

「だが、しかし」

「問題は、連合が先のジンの映像をとったからだ」

「映像？」

「私は映像を撮ったと思っているよ」

「まさか、ジンの映像を世界に送り、ザフトがユニウスセブンを落

としたと？」

「ブルーコスモスがあれだけの起爆剤を使わない理由はない、最悪、核ミサイルをプラントに撃つつもりだろう」

「……！」

「私も同じ意見だ」

「議長はどうするのですか？」

「無論、核は撃墜はする、しかしプラントの市民を抑えられる程の支持力は私にはない、私が市民を止めても最悪、議長権限を辞任しろ言われかねない」

「そんな……」

「ラクス・クラインなら市民を止められるが、彼女はプラントに居ない」

「ラクス・クラインですか」

「けど、彼女はこの二年プラントに関わってない、プラントが此処まで持ち直したのも、議長や評議会の血がにじむ努力のおかげだ、俺としては彼女は信用できない」

「……」

アスランは申し訳ない顔をしている、無理もない。

「ラクス・クラインはそれだけの影響力があるんですか？」

「これも、プラント育ちじゃないシンには理解できないだろう？」

ラクスの声は美声と言ってもいいが、それだけでプラント中の人間が彼女を支持する意味がわからないだろう？」

「……はい」

「俺も外の人間なんでシンの気持ちはわかる、あれはアイドルを支持すると言うよりも狂信者だ」

「はつきりと言うな君は」

「それが俺の性格ですから」

議長は苦笑し、アスランは何も言えない顔をしている、どうやら少しは同意してるみたいだ。

「ラクスがいれば確かに暴走する市民は抑えられるが、それと別に厄介な連中が暴走する」

「厄介な連中？」

「クライン派、つーよりラクス教と呼んだほうがしっくり来るな」

「たしかにクライン派、好き勝手やりそうだな」

「ラクスの為につてね、最悪、クライン派はブルーコスモスと同じ事をするぞ」

それが俺が感じたクライン派のイメージだ。

「さすがにブルーコスモスと同じとは言い過ぎだろう」

議長が俺に言ってきた。

「でも、ラクスがプラントのトップに立ち、一部の反抗組織がいたら、クライン派はラクスの指示がなくとも潰すと思うが」

「それは俺も同意見です」

「アスラン？」

「私は二年前の大戦を経験してます、はっきり言ってしまうば、ラクスは何もしてません、

クライン派が殆んど用意したんです、フリーダムやエターナルの強奪、そしてあの大战で戦えるための物質の補給は全部クライン派が用意したものです」

「だろうな、でもいまはザラ前議長の話だろう？」

「そうだったね、アスランはユニウスセブンを落下させた彼らの言葉に病む必要はない」

「はい、少しは気持ちが楽になりました、父が本当に目指そうとした事をもう一度、考えたいと思います」

「そうか、それよりアスハ代表が心配していたぞ、なにせ君もMSに乗ってユニウスセブンの落下を阻止に行ったから、代表に会いに行つてないのだろう？」

「はい、俺はこれで失礼します」

「あ！俺もこれで」

アスランに続きシンも退室する。

「どうやら行つたみたいだね」

「そうですね」

「しかし、君には驚かされ」

「シンみたいなプラント生まれじゃない人間の意見が説得力がありますからね、プラントが受けた仕打ちに怒りの意見は」

「だから、シンも呼んだと？」

「ええ、アスランはまだ、責任を感じてる、そのうちプラントに戻ってくるでしょう？」

「私が君を呼んだ時に思いついたのかね？」

「ええ、アスランは大分気にしてましたから、それより俺を呼んだ理由は？」

「ああ、君の機体のことだ」

「オーライザーのコックピットが完全に破壊されてます、両肩のバインダーはもしかしたら生きてるとおもいますから、バインダーからビームを撃てれば助かるんですが、この後調べようと思います」

「そうか、だがコックピットが破壊されたなら、本国で早急にオーライザーの復元を要請はしよう」

「はい、少なくともコックピットの複合センサーユニットがないとトランザムは使えませんから、お願いします」

「オーライザーの設計データを貰ったら直ぐに要請させるよ、それと今回は君のおかげで被害は少なくすんだ、君があの時ユニウスセブンを斬らなかつたら、ミネルバの主砲だけではあそこまで碎けなかった、礼を言わせてくれ、ありがとう」

「いえ、話はこれだけですか？」

「ああ、すまなかつたね、疲れているのに」

「では、失礼します、それとクライン派には気をつけてください、プラントの技術者は何人かはクライン派でしょうから」

「わかった、気をつけるよ」

俺はMSデッキに向かった

「アスランはプラントに戻る可能性が高くなったな、私が道を違えたら撃つか、

彼はデステイニー・プランをどう思うかな？」

ダブルオーとオーライザーの両翼のバインダーをダブルオーの両肩に装着し、バインダーが生きてるか調べる、どうやらビームは撃てるらしい、GNフィールドは2秒が限界のようだ。

「ないよりはマシか、とりあえずオーライザーの設計データを吸い出すか」

メモリースティックに設計データを吸出し、議長に渡した。

コックピットは見事に破壊されていて修復は出来ないようだ、一からやるので大分時間が掛かるみたいだ。議長はデータを送るどころかそのまま直接プラントに戻った。

外を見ると空は灰色になっていた、刹那の感情が出てきたのか悔しいと感情が強く感じた。

ミネルバは原作通りにオーブに向かう。

その途中でレイとルナが射撃の練習していた。

「刹那もやってみる？」

「そうだな（実際どれぐらいの腕が確認しないと）」

ドン、ドン、ドン、ドン

さすが少年兵、腕はかなりの物だ、それともイノベーターであるからなのか？アスラン並であった。

「すっごい」

「本当」

ホーク姉妹が驚いた、コツがあるのか聞いてきたが、繰り返して覚えるしかないと誤魔化した、

オーブに着き、少したってから上陸許可が出た、デュランダルからクレジットカードを貰ったため、私服など買いに行こうとしたらホーク姉妹も着いてきた。

「刹那は何を買うの？」

「こういう場合に着る私服かな」

「刹那さんはどんな服が好みなんですか？」

「どっちと言うとラフだな、というより動きやすいのが好みだ」

「へへえ、アクセサリーとかは買わないの」

「どうかな、一目みて気に入ったら買うかな」

数着私服を買い、三人で食事をした。

それから数日、連合が核でプラントを狙ったようだ、プラントはど
うにか防いだが、

このことでプラントの市民は怒りに満ちていた。

アスラン Side

キラやカガリにプラントに行ってくると話し、プラントに向かった。

プラントに着き、議長と面会できるまで待っていたら、連合が核を
撃ってきたと護衛の人に聞かされた。

「そ、そんな、刹那が予想した通り核を撃ったのか？」

俺はまたあの悲劇が繰り返されるのか不安になった。

議長に呼ばれ、彼のいる部屋まで案内させる、話は勿論、核を撃たれたことの話だった。

「まったく、嫌な予想だけが当たる、予想したとはいえショックだったよ。こうまで強引に開戦されいきなり核まで撃たれるとはね」

「そうですね……私も同じ気持ちです」

「この状況で開戦するということ事態、常軌を逸しているというのに。その上これでは……これはもうまともな戦争ですらない」

「はい……」

その言葉道理、これはもう戦争ではない、大量殺人のための争いではなく、これは民族浄化レベルだった。

「連合は一旦軍を引きはしたが、これで終わりにするとは思えん。逆に刹那が言ったとおり、今度はこちらが大騒ぎだ。防げたとはいえ、またいきなり核を撃たれたのだからね」

「それはそうでしょうが、……この攻撃、宣戦布告を受けてプラントは、今後どうしていくおつもりなのでしょうか？」

「我々がこれに報復で応じれば、世界はまた泥沼の戦場となりかねない。

解っているさ。無論私だってそんなことにはしたくない。だが、自体を隠しておけるはずもなく、知れば市民は皆怒りに燃えて叫ぶだろう。許せない、と」

議長という言葉はわかっていて、このまま何もしなかったら連合はまた撃つて来る、核を。

「それをどうしろという。今また先の大戦のように進もうとする針を、どうすれば止められるというんだね。既に再び我々は撃たれてしまったんだぞ、核を」

「ラクスなら、この事をしつつ市民を抑えられるかもしれないといつてましたね？」

「ああ、だがそれ以上にリスクもある」

刹那が言った、クライン派、彼らは異常とも言ってもいいほどラクスを心酔している、俺も薄々感じていたが、刹那にいわれあの異常性を自覚ができた。

ラクスが議長になったら、彼女は二年前と同じように戦うだろう、綺麗事を言いながら。

彼女は自分は間違っていないと信じてる分、性質が悪い。

「議長は、どうやって市民をなだめるつもりなんですか？」

「ラクスの偽者は用意してある、正直いえばこの手段は使いたくないのだが」

モニターにラクスのそっくりな人物が映し出された。

「声もラクス・クラインと同じだ」

議長が使いたくないと言った手段、これを使えば市民は抑えられるは、クライン派はどう出るか。

「使ってください、今この混乱を抑えられるのはこの子だけなら、使うべきだと思います」

あの泥沼の戦いが始まるのなら、偽者を使ってもとめるべきだ。この混乱を抑えないと、クライン派を抑えるもクソもない。

「ラクスが何かを仕掛けたら俺が彼女を説得します」

「わかった」

ミーアのおかげで市民は落ち着くことが出来た。

そのあと、俺にも何か出来ないか頼んだら、

俺は議長にフェイスの資格を与えられ、新しい機体でミネルバと合流してくれと頼まれた。

「アスラン・ザラ、セイバー、発進する！」

アスランがセイバーでプラントを出て少し前

刹那 Side

オーブに待機してから数日が経った、原作通りに核を撃たれたがそれを防いだ。

オーブは連合と手を結んだことでミネルバはオーブを離れることにしたが、
連合はオーブ領海で待ち構えていた。

艦長から発進の指令が来た。

「シン・アスカ、コアスプレnder 行きます！」

「刹那・F・セイエイ、ダブルオーガンダム出るぞ！」

「海に落ちるなよ、ルナマリア、落ちても拾ってやれない！」

「意地悪ね」

5話 Z A F T（後書き）

刹那に議長、腹黒！

誤字、脱字、おかしい表現、感想や指摘は受け付けているので宜しく願います。

6話 シンの覚醒

オーブ近海戦

ミネルバからの艦砲射撃が敵部隊を狙い通り散開させる。
そして出撃したレイとルナマリアのザクはミネルバの守りに付き、
刹那とシンが散った敵
を順次撃破していく。

「落ちろ！」

ダブルオーガンダムとインパルスは次々と向かってくるウィンダム
を落としていく。

「……ふん、あれだけの数を相手なかなかやるようだな。単艦なの
によくやる……」
流星はザフトの新造艦と言ったところか」

「例のMAを用意させる」

「はっ」

「遅い！」

ダブルオーは6機のウィングダムに囲まれビームを放たれるが、それを避け、逆にビームを放ち敵を落としていく。

敵はGN粒子で電波障害が起き、連携を取れていないが、それを数で補おうと次々とMSを発進させる。

ちなみにザフトは刹那から渡されたデータでGN粒子の中で通信が出来る通信機をすぐさまミネルバの中で開発した。

「撃った後が隙だらけなんだよ！」

「シン、敵の回避パターンは法則性があるうえ、回避運動が大きい、そこを突いて確実に一機ずつ落とすぞ！」

「わかった！」

シンは攻撃するとき、相手の回避行動を読むようになった。そのおかげか敵の回避行動が読めるようになり、先程より効率よく敵を落

としていく。

刹那とシンが次々と敵を落とすが、連合はそれ以上の速さでウィンダムを向かわせる。

『ちょっと、冗談じゃないわよ、どれだけ増えるのよ?』

『口を動かす前に手を動かせ!死にたいのか!?』

『わ、分かってるわよお!』

レイに注意され、やけくそ気味に襲い掛かる敵MSを迎撃し始めるルナマリア。

『不味いですよ、あの数、どうすんです艦長?』

『タンホイザーを使うわ、シンを呼び戻して!』

『了解!シン、聞こえる?ミネルバの防衛に戻って!』

『そんなこと言ったってこの数じゃ……え!?』

『刹那!』

『今だ、戻れシン！』

『助かった』

刹那はシンを囲んでいたウィンダムを半分落とし、シンを後退させる。

「目標は敵艦隊！」

「了解！各員に通達、タンホイザー起動！照準合わせ！目標は敵艦隊、チャージ開始！」

ミネルバの艦首の下から陽電子砲の砲身が浮き上がる。

「ミネルバがタンホイザーを使う……！？」

「こ、これで何とかなりそうね……！」

「（陽電子砲は効かないが、撃たせて直接知ったほうがいいな）」

「司令！敵艦から何やら巨大な砲身が浮かび上がってきました！」

「そうか、やはり使ってくるようだな……。よし、ザムザザーを出せ！」

連合の旗艦空母より巨大なMAが出撃する。

「敵艦正面、我が艦隊の前に固定完了しました」

「ザムザザー機関安定、システム・オールグリーン。陽電子リフレクター展開準備完了です」

「よし、陽電子リフレクター展開！敵殲滅兵器をここで食い止めるぞ！」

「「はっ！」」

「アンノン接近！これは！？」

「光学映像です！」

そこに映し出されたのは巨大なMAだった。

「なんだアレは！？」

「MA！？」

ミネルバブリッジはザムザザーの存在に戸惑っていた。

「あれに取り付かれたらお終いだわ、タンホイザーを敵MAごと焼き払います！」

刹那とシンが射線軸を離れた事を確認をして。

「タンホイザー撃えー！」

「了解、タンホイザー撃えー！」

ミネルバの切り札が放たれるが、ザムザザーの陽電子リフレクター

に弾かれた。

「そ、そんな……！」

「タンホイザーを弾いた!？」

『何をしている、まだ終わってないぞ!？』

刹那が啞然としているミネルバクルーに喝を入れるように大声で通信する。

MAはインパルスに襲い掛かった。

『シン!？』

刹那が援護しようとインパルスに向かおうとしたが、十数機近くのウィングダムがダブルオーに襲い掛かる。

インパルスが徐々に追い詰められ、ENが尽きようとしていた。

オーブがミネルバに砲撃してきた事にシンは驚き、その隙をつかれザムザザーに足を掴まれた。

ザムザザーはクローでインパルスの足を掴み海に叩き落そうとしたが、

インパルスのENが尽き、VPSが解除され、足を切断された。

『うわあああああ！』

『シン！？』

(こんなところで、こんなところで俺は！！)

シンのSEEDが弾いた。

『ミネルバ、デュートリオンビームとレッグフライヤーとソードシ
ルエットの射出準備を！』

「えっ！？」

『いいから早く！！』

「指示に従って！」

インパルスはENを回復し、ザムザザーに襲い掛かる、ザムザザー

は砲撃したが、
インパルスのビームシールドで防がれ、上空からビームサーベルで
コックピットを真つ二つにされた。

シンはザムザザーを落とした後、敵の空母やMSを鬼のように叩き
落していった。

刹那はザムザザーのコックピットが真つ二つにされた時、
ダブルオーに襲い掛かったウィングダムを全て落とし、
インパルスと同様、片っ端から敵MSや母艦を叩き落した。

「切り札がなくなったら、馬鹿みたいに啞然とするのはお前たちも
一緒みたいだな」

結果はオーブ近海に待ち伏せした地球軍は全滅。

MAを降りた刹那とシンに、クルー達は取り囲んだ。

それから、ミネルバはその場を離れた。

刹那が自室に戻り、議長に連絡を入れた。

『議長、ミネルバの刹那・F・セイエイからの通信が着てますが？』

「繋げてくれ！」

「はっ！」

刹那 Side

俺は議長に通信を入れた。

「やあ、今回も活躍したそうじゃないか？」

「シンが、敵のMAを破壊したとき、敵が隙だらけになったところを狙っただけですよ」

「だが、その時はミネルバクルー達も啞然していた、君はその中で唯一動いたことは評価するよ、私は」

「まあ、それより、ミネルバはこれからどこに向かわせるんですか？」

「カーペンタリアでアスランと合流してくれ、それまでカーペンタ

リアで休暇を取ってもらう。
アスランと合流した後――」

議長にこの後ミネルバが通るルートの説明をしてもらった。

「このルートは、ガルナハン基地はたしか…」

「ああ、連合のローエングリンに手を焼いている」

「そこでミネルバですか？」

「ああ、それにあそこに住んでいる町の住人は連合に压制され、奴隷のように働かせられている」

「彼らを助けてくれと？」

「ああ」

「じゃあ、一つ頼みがあります」

「なんだね？」

「その作戦だけでいいので、ある人物を雇ってくださいませんか？」

「かまわんよ、この作戦は重要だからね、誰だね？」

「サージェントの叢雲効」

6話 シンの覚醒（後書き）

誤字、脱字、おかしい表現、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

7話 インド洋の戦い

刹那 Side

カーペンタリアに着いたら、そこにはハイネが居た。
どうやらミネルバに配属されたいらしい、ハイネは艦長達に挨拶を済ませたら、デッキにいる俺達に挨拶をしに来た。

「シン・アスカ、レイ・ザ・バレル、んでルナマリア・ホーク？」

順に指差し、名前を呼んでいく。三人はそれに頷く。

「君が刹那・F・セイエイ」

「ああ」

「俺はハイネ、今日からミネルバに配属になったから、よろしくな、フェイスだからといって敬語と隊長と呼ぶなよ？」

最初に釘を打ってきた。

「しかし、それでは軍としての示しがつきません」

レイが食い下がるが。

「んじゃ、フェイス命令で」

「う……！」

「お前の負けだ、レイ」

「わかりました」

「んで、刹那に技術者達からのプレゼント」

ハインに案内され、着たら、そこにはGNソード？が8本に肩のバインダーから発射できるGNミサイルが大量にあった。

「これは、ダブルオーの？」

「ああ、今は火力不足みたいだからな、技術者達は頑張ったみたいだぜ」

「助かるな、GNソード？はオーライザーだから真価を発揮するかな、GNソード？は特に助かる」

「それより、お前等は休暇なんだろう、なんでMSデッキにいたんだ？」

「ああ、俺がシンと模擬戦をやるからな」

「おお、それじゃあ、お前らの实力を見せてもらおうかな？」

模擬戦が出来る場所に行く途中にシン達はGNソード？のことを聞いてきたので、説明をしながら行った。剣とライフルが一体化となつてすることに驚いていたが、GNドライブを搭載したMSしか使え

ないと知ったら興味が失せた様だ。

「さて、遠慮なく来い、シン！」

「はい！」

シンはインパルスで俺はディンに搭乗いての模擬戦。

S i d e O u t

インパルスがライフルでディンを狙うが、ディンは全てギリギリで避けた、射撃で倒せないと判断したのか、ビームサーベルを取ろうとしたが、ディンはその隙に体当たりをして、インパルスのバランスを崩し、コックピットにライフルを狙いを定めた。

「終わりだな」

「そうですね、しかしインパルスをディンで抑えるとは」

「ダブルオーの性能だけじゃないみたいね、刹那の強さは」

「クッソ〜〜！」

「おうおう、悔しがってるなヒヨッコは」

刹那はシンに何がいけなかったのかを説明していた。

それからレイとルナマリアも刹那と模擬戦をした、最も刹那はジンに乗って二人を圧倒した。

「なんで、こっちの攻撃が当たらないのよ？」

「言い訳は見苦しいぞ、ルナマリア」

レイに叱られ、少しへこむルナマリア。その後三人の問題点を教え、カーペンタリアを出る少し前まで模擬戦を繰り返した。最もメカニックは休暇がないと泣いていたのは言うまでもない。

カーペンタリアを出る前に、アスランと合流した。シンは原作と違って食って掛からなかった。アスランから俺がMSの指揮を任せると、議長の伝言を言った為なのか、シンはアスランの中は良好だった。

それ以前に、パトリック・ザラの話の時にアスランも苦労したと感じた所為もあるが。それとフリーダムがガリを誘拐した事件はミネルバにも情報が来た。

それに関して、アスランは『何をやってるんだ？』と怒りを隠しきれず、つぶやいた。

ミネルバは修理も終わり、カーペンタリアを出た、こっちは原作道りにファントムペインがウィングダムを30機つれて来た。

『刹那、MSの指揮、貴方に任せるわ、いいかしら？』

「はい、議長にも頼まりましたから！」

「ハイネ・ヴェステンフルス、グフ出るぜ！」

「シン、上がった腕前を連中に見せてやれ！」

「はい、シン・アスカ、コアスプレnder行きます！」

「アスラン・ザラ、セイバー発進する！」

「ダブルオーガンダム、刹那・F・セイエイ出る！」

「おいおい、ネオ、新顔が二機いるぞ？」

「カーペンタリアで、ザフトは凄いね！」

「でも、緑の粒子は俺が貰うぜ！」

「おいおい、ステイング!?」

ステイングはネオの呼びかけを無視をしてダブルオーに向かった。

「カオスは俺に用事があるようだな、ハイネは紫の機体を、シンとアスランは他のウィンダムを頼むぞ、それとガイアは見当たらないが注意しろ!」

「「「ああ」「」」

「メイリン、アビスの反応が出たら俺に伝えてくれ」

「わかりました!」

「さーて、隊長さん、俺が相手だぜ?」

「ちっ、新型が相手か」

ウィンダムのビーム射撃を簡単に避けるハイネ。

「おいおい、アンタ、隊長だろう?少しは楽しませろ!」

ネオに通信を入れたハイネ。

「若いね、けど俺も負けるわけにはいかんのよ!」

サーベルでグフに切りかかろうとするが、グフは盾で受け止める。

「だから、その程度なのかよ?」

グフは蹴りをいれ、ウィンダムを後方に飛ばした。

「おいおい、とんでもない奴がミネルバに入ったな」

実はハイネも刹那と模擬戦をしていた、MSのOSが甘いことがわかったため、OSの見直しもやったためか、ミネルバのパイロットの腕は比較的に上がっている。

「ちっ!」

ライフルを構えようとしたが、グフはスレイヤーウィップでライフルを掴み、電撃を流し破壊した。

「ザクとは違うんだよ、ザクとは!!!」

「クッソ!俺も引退かよ?」

「遅いんだよ!」

シンはウィンダムとの連携を物ともせず次々破壊する。

インパルスはウィンダム回避行動を呼んで、ビームを確実に当てて行った。

前回の戦闘で、連合が使ってるMSのOSの回避行動パターンがわかったらしく、

苦戦はしていない。

アスランはシンの上達振りに驚いていた。

「見とれてる場合じゃないか！」

セイバーに襲い掛かるウィンダムを撃墜していく。

「新装備か？」

ダブルオーはGNソード？を両手に構え、カオスのサーベルと激突した。

「ちっ、実体剣でサーベルと互角かよ！？」

ダブルオーは後方に下がり、ライフルモードでカオスを狙う。

「ビームまで撃てるのかよ!？」

カオスはダブルオーのビームを避けず、ビームシールドで防ぐ。

「ほう、回避すれば落としていたものを、少しは上達したな」

刹那は相手が避けても、あらかじめ回避ポイントを読み、相手が回避する場所に二射目を撃って敵を迎撃していたのを、スティングは戦闘データで気づいた。

刹那はソードモードに切り替え、カオスに大降りで斬りかかる。

「そんな、大振りで!」

だが、GNソード?の刀身がビームサーベルが出てきた、サーベル抜きの間合いで回避した為、伸びたサーベルでカオスの左腕を破壊した。

「なっ!?!ビームサーベルだと!?!」

カオスはすぐさま後退した。

「ちい、スティング、撤退する!」

「くっそ！」

『おいおい、俺来たばっかだぜ？何やってるんだよおっさん！』

ピク

『しょうがないだろう、借りた連中は全滅、新型が二機もある、この作戦は失敗だ』

空中部隊に敵戦力を集め、海中のアビスでミネルバを叩く作戦だったが、借りた連中は全滅だけじゃなく、主力である自分とカオスは被弾した、インパルスとセイバーはアビスを水中で見つけたら迎撃に向かうだろう、するといくらアビスが水中専用と言っても、4機相手にミネルバを落とせない。

『何もやってないっーに』

『次のチャンスがある』

ファントムペインは引き上げていく

『シン、アスラン追いかけるぞ、ハインはミネルバの護衛を頼む』

『深追い禁物だぞ』

『カーペンタリアの近くで襲ってきたんだ、近くに基地を建造しているかもしれない』

情報ではこの近くに基地がないことは伝えられていたが、基地がないんじゃない、建造中なら話が違ってくる。

『わかったわ、貴方達はそのまま偵察に出て頂戴』

ダブルオー、インパルス、セイバーはカオス達の後を追った。

『ネオ、連中が追いかけてきたぞ？』

『勘がいいのか、それとも無謀なのか、まあいい、戦闘はせず、俺達は母艦に戻るぞ』

『あいよ』

『イライラする』

アウルは何もしてないのか不機嫌になっていた。

ネオはガイアと通信が出来るとこまで近づいたら、通信で撤退だと告げた。

刹那達は建造中の基地を見つけた。

『これは！？こんなところに基地を！』

『それに、働かせられているのは一般人じゃないか？』

しかも銃を突きつけられている

『クッソ！』

『待て、シン！』

『あれをほっとけとでも言うんですか？』

『お前は建造中の基地を破壊するつもりだろう？』

『そうですね、あんなのがあるから、彼らは無理やり働かせられているんですよ？』

『駄目に決まってるだろう』

『じゃあ、どうするんですか？』

『降りて、連合軍を脅すんだよ、MSは見当たらない、おそらくさっきので全部だったんだ、
連中はこっちに対抗する手段はない、脅しだけで十分だ』

『……すいません、俺』

『気にするな、あんなのを見たら誰だって感情的になる』

『そうだな、それより早く降りよう』

『はい!』

『ああ』

三機のMSに対抗する戦力はないと悟った連合軍は降伏した。

強制労働されていた人達は解放され、
アスランとハイネはフェイス権限で強制労働させられていた人達の
防衛部隊を要請した。

本国はアッサリと要請に答えた。

『シン、お前がやろうとしたことは人としては間違っていないが、軍人としては間違ってるぞ』

ハイネはシンが取ろうとした行動をきいて、シンに通信で説教していた

『・・・・・・』

『あのまま、お前が基地を破壊していたら一発くらい殴らないと示しがつかなかったぞ』

『すみません、俺は何も考えず』

『今回は刹那が止めたが、同じ鉄は踏むなよ』

『はい!』

『んじゃ、今日はミネルバのトイレ掃除な』

『は!?!』

『フェイス命令、言っただろう、刹那がとめたからいいようなものを、

刹那がとめてなかったらお前は確実に行動をしていた、これも軍としての勉強だ。

それに今日だけでいい、あと男子トイレ限定でいいぞ』

『ぐ・・・、はい』

シンはインパルスから降りて、トイレ掃除に向かった。

8話 ガルナハン攻略

ガルナハンを支配下に置く連合軍の基地を攻略するのにザフトはサーペントテールの叢雲効を雇った。

ガルナハンのレジスタンスが見つけた坑道でインパルスを向かわせる作戦が上がったが、
タイミングが難しく、その作戦は却下された。

「今回の作戦の為に雇われた傭兵の叢雲効さんだ」

「サーペントテールの叢雲効だ」

効が皆に挨拶をした。

サーペントテールの叢雲効は有名だったのか、会議室はざわざわし始めた。

「とりあえず、今回は先日取ろうとした作戦、坑道の中をインパルスで向かわせる作戦を辞め、
俺と、アスラン、シン、刹那、そして効さんで力押しで決まった！」

その時、一人の兵士が質問をした。

「あの、五人だけで大丈夫なのですか？」

「疑問は最もだと思うが、この地形だと少数で攻めたほうが効率がいい、

この作戦に参加する機体は全て飛行可能だからな、固まってるところに陽電子砲を喰らったら目も当てられん」

「それに、ミネルバにも陽電子砲があっても、以前オーブで出てきたMAと同じ陽電子防御をもつMAが確認されている、こっちが陽電子砲を撃って防がれただけじゃないが、じっさい防がれたときの爆風でこっちのMSが巻き込まれる」

納得したのか、質問をした兵士が座った。

「お前らにやつてもらうのはこの基地で待機だ、主力が集まってるなら、この基地が手薄だと読み、奇襲を仕掛けるかもしれんからな」

「今回は刹那を先頭に向かわせるダブルオーのGN粒子で相手のレィダを無効化した後に少数で奇襲をかける作戦だ」

「作戦実行は一時間後だ。お前達もこの基地を落とされないよう気をつけてくれ」

「」「」「はい！」「」「」

俺達奇襲班はMSに搭乗し、マハムールを出た。

ガルナハン基地

「ん？レーダの故障か？」

ドゴン

「な、なんだ！？」

「おい、索敵班何をしていた、MSが来たぞ？」

ガルナハン基地に一機のMSが奇襲を仕掛けてきた。
最初は砲台や防衛の為に待機していたMSが破壊されていく。

「こっちのレーダが故障した！」

「何！？クツソMS隊全機ださせる！」

『さらに、4機のMSを確認！』

「なんだと！？」

ガルナハン基地は混乱していた

「おいおい、こつも上手くいつっちゃうわけ？」

グフはダガーⅡを次々と斬って行く。

「足並みがそろえてない状態だ、多少は同情する」

アスランは上空からアルフォルトスでデッキから出てくるMSを狙い破壊していく。

「うおおおおー！」

インパルスはビームサーベルで敵MSを斬って破壊していく。

「これがミネルバの主力パイロットの力か」

叢雲効は最低限の動きで敵の攻撃を避け、対装甲コンバットナイフ・アーマーシュナイダーで次々MSを倒していく。

104

「くっそ、ザムザザーとゲルズゲーはまだか？」

「今出ました」

「ローエングリンのチャージも始めろ、おのれザフトめー！」

「MAが来たみたいだな」

ハインはザムザザーに方向を向け、ペダルを踏み、テンペストビームソードでを構えザムザザーに襲い掛かる。

「そーらあ、落ちろー!」

ザムザザーは避けようとするが巨大ゆえ、避けることが出来ず落とされる。

「ザムザザー落とされました」

「えーい、何をやっている?」

ザムザザーがアツサリ落とされたことで、ガルナハン基地のMSパイロットが戸惑い始め、動きが悪くなった。

「この程度つで、動揺するか? 貴様らは兵士に向いていないな」

叢雲劾はガトリングガンを構え、動揺しているMSを撃って破壊し

ていく。

シンとアスランは連携を行い、ゲルズゲーと交戦していた。

セイバーがライフルを撃ち、MAはリフレクターを展開し防ぐ、インパルスはMAの背中をビームサーベルで斬りかかろうとしたが、MAが寸前で避けるが、セイバーがビームサーベルを手にし、MAを破壊した。

「ナイスだシン！」

「アスランこそ！」

インパルスとセイバーの連携でゲルズゲーを破壊されたガルナハンは更に混乱した。

「チャージは？」

「80%です」

「撃て！」

「しかし、いまローエングリン砲を出したら、狙われます！」

「いいから、早くせんか！」

「は、はい！」

「奇襲はソレスタルビーイングの十八番だ！」

ダブルオーはGNソード？を二丁構え、ライフルモードで敵を打ち落としていく。

「出てきたか！ローエングリン砲が！」

「愚かだな、こんな状態で陽電子砲を使うとは、当分、連合からの依頼は蹴ったほうがいいな」

「肩透かしだな、今回も、GNドライブがここまで凄いとは」

ハイネと叢雲効はそれぞれの感想をつぶやいた。

ダブルオーは陽電子砲にGNソード？を構え

「ダブルオー、目標を駆逐する！」

先に両翼バインダー側面に8基の発射、計16のミサイルを発射した後、

GNソード？ライフルモードを高出力で発射した。

陽電子砲の盾になろうとしたMSはミサイルで破壊される、ミサイルが当たらなくとも高出力として出たビームはMSごと貫通していく。

「陽電子砲にビームが撃たれました!？」

「なに!?! なんとかせんかー!」

ガルナハンの指揮官の叫びも空しく陽電子砲が破壊されて行く。

破壊の余波で指揮官がいる場所も巻き込まれ爆発した。

陽電子砲がなくなったことで、MS部隊は降伏した。

「今回の作戦に協力してくれてありがとうございます」

刹那は効にお礼を言う。

「依頼をこなしたただ、それに俺がいなくともこの基地を落とせていただろう？」

「そうでもないですよ」

「お前はザフトからの依頼がなくなったらどうするつもりだ？」

「傭兵かジャンク屋にでもなろうと思います」

「傭兵になるならサーペントテールに入らないか？」

「考えておきます」

(刹那・F・セイエイか、あのMSの動き、この男も記憶しておくか)

「よう、戻ったか効」

「おかえり」

「久しぶり」

効がサーペントテールに戻ったら、出迎えた人間の中に腐れ縁の男、ロウ・ギョールがいた。

「来ていたのか？」

「ああ、イライジャの依頼でな、それで、ザフトと連合はどうだった？」

「そうだな、俺も聞きたいぜ、最近、連合はやりすぎてる」

「情報道りの圧制をしていた、それより面白い人材を見つけた」

「お前がそんな事言うなんて珍しいな？」

効がブルーフレームで取った映像をモニターに移した、そこに移っていたのはダブルオーガンダム。

「ザフトの新型か？それにしてもザフトっぽくないな」

「このMSのパイロットは俺と同じ、ザフトに長期に雇われてるパイロットだ、本人はこれが終わったら
ジャンク屋か傭兵になるとか言ってたからな」

「おお、それじゃあ内も戦力がアップするな、ははは」

「それにしても、肩から出てる緑色の光は何だ？」

「GN粒子と言ってたな、周囲の電波通信やレーダー機器を妨害する効果がある」

「おお、すごいねえ、この人がサーペントテールに入ったら戦力アップじゃん」

「だが気になるのは此処からだ」

映像ではダブルオーが基地から出るところだった。

「浮いた！？もう一度撒き戻してくれ！！」

「推進力なしで飛んだのか？」

そのことにみんなが驚いていた、そして戦闘。

「実体剣だと思ったらビームも撃てるのか、はあ実体剣から!?!? ビームサーベル!？」

かゝあ何で出来てるんだ? 見てみてゝ」

ロウだけが大声をだして驚いていた。

「なあ、このパイロットで誰だ?」

「刹那・F・セイエイ」

映像には刹那が移っていた。

「こいつがゝ。今どこにいるんだ?」

9話 ダブルオーガンダムVSフリーダム

黒海沿岸都市ディオキア

ミネルバは先日の作戦を終え、マハールから黒海沿岸都市ディオキアまで来ていた。

そこに待っていたのはデュランダルだった。

デュランダルは地上の視察と慰問と俺達から話を聞きたいと言ってきた。

「やあ、刹那、それにアスランも久しぶりだな」

シン達は先に来ていて既に挨拶を済ませていたようだ。

「無傷でガルナハンを落とした情報は他のザフト兵達にもやり気を与えている、まったくたいしたものだよ」

「それでもありませんよ、敵がこっちを視認するのが遅れた為、向こうは足並みを揃えられる前に奇襲をかけられたのが大きいです、もう少し先に視認されたら、もう少ししてこずっていましたよ」

「そんなに謙遜する事はない」

「ありがとうございます…しかし停戦、終戦に向けての動きはどう

なってるんです?」

議長は少しため息をついて話を続ける。

「残念ながら連合側は何一つ譲歩しようとしない…これではどうにも出来んよ…戦いを終わらせる、戦わないと決めるのは戦うと決断するよりもはるかに難しいものさ…」

シンがそれに対し発言する。

「でも…戦わないと思うのは大事なこともありません。しかし敵の脅威があるときは、何か守るべきものが危険にさらされた時には力を使うのはいた仕方ないことではないでしょうか。」

いままで黙っていたアスランが口を開いた。

「だが、そうやって殺されたから殺して、殺したから殺されて、その繰り返しで最後は平和になるのか?と言われたことがあります。シンが言うことはおそらく正しい。自分が復隊した理由の一つでもあります」

「君はどう思う刹那?」

「そうですね、お互いを理解しあうしかないですね。例えどれだけ時間を賭けても」

（ツインドライブの本来の存在意味を教えていいか迷うな。議長がしたらどう出るか）

「後現金な話になりますが、人類がお互いの力を合わせないと倒せない敵が現れないと力を合わせないでしょう」

00の世界がそうだった、ガンダムと言う圧倒的な力の前に、ユニオン、AEU、人類革新連盟の三大国が力を合わせ、国連の元で世界最大規模の軍が誕生した。だがリボنزの計画や国連軍のトップが急ぎすぎた結果アロウズが誕生した。

「自国で倒せないのら力を合わせるしかない、だが今はそんな都合のいい敵もない」

アスランが答える。

「そうか？いるだろう、この戦争の引き金を引いたやつ等が」

議長だけが少しにやけた。

「誰なんです？」

シンが聞いてくる。

「この戦争を裏で煽っている連中、彼等は戦争をビジネスとしか考えておらず、人の不幸を私腹を肥やすための手段にしている連中がいる」

「死の商人ロゴス」

「……!?」「……」

「やはり、知っていたのか？」

「はい、今の世界の仕組みの裏を見ればわかります、ブルーコスモスを作ったのもロゴスですし」

「そうか。私はロゴスをどうにかしようと思っている、その時は君達の力をあてにさせてもらおうよ」

俺達は返事をして、この話は終わった。

翌日、俺とアスラン、シン、ハインは休暇を貰った。

俺は気分転換に町におりた。

（それにしても、原作と違ってミーアの活動がおとなしい、ザフトが連合から圧制されていた町の人達を慰めてるだけだった。原作は

ライブなど派手にやっていたが)

「考えてもしょうがないか」

「いた——！！」

「ん！？」

「俺の悪運はやっぱ最強だー」

(この声は、ロウか？)

声ができる方を見ると、ロウ・ギュールがやってきた。
しかも、こっちに来る

「なあ、お前、刹那だよな？」

「そうだけど、なんで俺の事知ってるんだ？」

「サーペントテールでちょっとお前のこと知ったんだ、それでお前が乗ってるも「ちよっと待った、」

刹那は小声で

「街中でMSの話は不味い、人がいない場所に移すぞ」

「そうだった、悪い」

刹那達は町外れに移動した。

「それで、聞きたいのは俺のMSの事か？」

「ああ、推進力なしでMSが浮いたあのMSはどうなってるんだ？」
どこまで話すかな。

「浮いたのは原動力に使ってるGNドライブの御蔭だ、通称太陽炉とも呼ぶが」

「太陽炉？」

「重粒子を蒸発させることなく質量崩壊させ、陽電子と光子を発生させることにより、莫大なエネルギーを半永久的に生み出す原動機関だ」

「なるほど、質量崩壊で陽電子と光子を発生か」

「ちなみに、このエネルギー機関を作れる環境は、木星のような高重力下の環境だけだ。製造には莫大な時間が掛かり、たしか爺さんの日記だと製造作業に約20年、製造可能な環境に至るまでの航行時間を含めれば、約40年を費やしているって話だ」

「よ、四十年！？」

「ああ、おまけに木星で作った研究所は木っ端微塵だそうだ」

「そうなのか、それとあの武器はどうなってるんだ？」

GNソード？のことを話した。

「GNドライブがなければあの切れ味は出ないのか？」

「ああ」

その後、ジャンク屋のことを詳しく聞いた。00の世界に戻る保障はないから、ザフトの依頼が終わったら、真剣に仕事の事を考えないといけない。

「悪いな、時間をとらせちゃって？」

「いや、俺もジャンク屋の事細かくしれて助かったとこだ」

「なにか困ったことがあったら連絡してくれよ」

「ああ、わかった」

その後、ロウと分かれた。ミネルバに戻ったらシンがステラと接触してみたんだ。

ミネルバの補給が終わりディオキアを出港することになった。黒海を進行中スエズから通信が入る。

どうやら地球軍に待ち伏せされているらしい。そこに刹那、アスラン、ハイネの三人がブリッジへと入ってくる。

「まちぶせか？」

アスランが聞くとすぐにハイネが続ける。

「スエズの戦力は？増援とあわすとどのぐらいの規模になるんです？」

タリアが答える。

「オーブで連合とやり合った数に加え例の強奪部隊もいるのよ」

「あいつらか」

「そうよ厄介なことに。ともかく本艦は戦闘態勢へと移行します
コンディションレッド発令。刹那、アスラン、ハイネたのむわ」

そう言うと三人はブリッジから出ようとする。
そこにタリアが付け加える。

「あ、アスラン、今回の地球軍の増援はオーブ軍と言う話よ。あなたにはつらいでしょうけどいまはあれも地球軍なの。覚悟は良いわね。」

「わかっています」

アスランは答え。俺達はMSデッキに向かった。

「アスラン・ザラ、セイバー発進する！」

「ハイネ・ヴェステンフルス、グフ出るぜ！」

「シン・アスカ、コアスプレnder行きます！」

「ダブルオーガンダム、刹那・F・セイエイ出るぞ！」

連合とオーブはお互いの量産MS部隊を展開した。

セイバーとインパルスは連携を取って敵部隊を混乱させ一機ずつ破壊していく。

「シン、俺が仕掛ける、散会した敵を狙え」

「わかりました！」

「同盟を結ぶから、自国の兵が犠牲になるのに」

アスランは戸惑いよりも怒りの感情が強く出ていた。

散開した部隊をある程度破壊した後、セイバーはムラサメを落とすて行く。

インパルスもそれに続き敵を落とす。

「どれだけ、兵を無駄にするきだ？」

ダブルオーは二丁のGNソード？をライフルモードで敵を二機ずつ破壊していく。

その時、連合軍から強奪機体が空母から出てきた。

「今度こそ、落としてやる！」

カオスはダブルオーに突っ込む。

「速い！出力を上げたのか？」

「くっ、今度こそ、テメエの首を落としてやる!!」

カオスはビームサーベルを抜き、ダブルオーに斬りかかる。

バチバチ

「ちいい、しつこいんだよ!」

ダブルオーは力ずくでカオスのビームサーベルを弾き、交代させ、カオスの腹に蹴りをお見舞いした。

「ガハッ!」

「こいつで——《ピピピ》何!?!」

海中から出たアビスがダブルオーにビームを放った。

ダブルオーは寸前で避けたが、右翼のバインダーを掠めた。

「ちっ、カオスと海中のアビスを同時はきついな」

「おいおい、俺も混ぜろストーカ君!」

バランスを整えようとしたカオスの顔に蹴りを入れたグフ。

「ゴホッ!」

「ステイング!」

蹴りの衝撃でコックピットにもかなりの衝撃が来たのか、パイロットは頭をぶつけた。

『ステイング下がれ!』

「ああ、ふざけんじゃねえ、俺はまだやれるぞ!」

『鼻血を出してる奴言つな』

「うつせぞ、ロリコンのおっさん!」

『おっさんじゃない!』

「なっ!」

カオスが通信をしてる間にダブルオーとグフは同時にカオスに蹴りを入れ、お互いの武器で腕を切り落とした。

「クツソー、テメエの所為だ――!」

『アウル、回収してやれ』

「クツソ、ロリコンのおっさんが俺のチャンスを潰してるじゃねえか!」

「おっさんじゃない!」

「ロリコンは否定しないのかよ!?!」

「おっさんの方が大事なんだよ!」

アビスは沈んだカオスを回収した。

「パトリック・コーラサワーでも乗り移ったか？」

カオスは最初は勢いがあつたが、直ぐに動きが鈍つたのを不思議に感じた刹那。

「ガイアの反応！」

ダブルオーはガイアに向かっていった。

「青いのー！ー！」

ガイア飛び上がったあとはMAに変形し両肩のビームでダブルオーを狙う。

「遅い」

ダブルオーは最低限の動きで避け、ガイアに高出力のビームを放ち、両足にビームを貫通させ四肢を破壊した。

「さーて、今度こそ！」

「アウル、ステラを回収してくれ！」

アウルのこめかみがぴくぴくと動く

「わったッヨ！」

ガイアに止めを誘うとしたダブルオーにウィンドム部隊が襲い掛かる。

「ちっ、あいつら悪運が良すぎるぞ！」

敵MSが更に増えたことで、ミネルバはタンホイザーを撃って状況を有利にしようとしたが、そこへタンホイザーの砲身を貫く一筋の光が奔る。撃つ直前のタンホイザーは大きな爆炎と共にその機能を停止した。

「チッ、もう来たのか」

ビームを撃ったのはフリーダムだった。

「フリーダム！？」

「キラ！？」

そしてアークエンジェルも姿を現した。

戦場は突然の事で場は混乱した。

アークエンジェルの他にストライクルージュが出てきて。

「私はオーブ首長国連合代表。カガリ・ユラ・アスハ。オーブ軍！直ちに兵を引け！現在、訳あって国もとを離れてはいるが、このウズミ・ナラ・アスハの子、カガリ・ユラ・アスハがオーブ連合首長国の代表首長であることに変わりない！

その名において命ずる！オーブ軍はその理念にそぐわぬこの戦闘を直ちに停止し、軍を退け！」

その言葉でオーブ軍のMSは動きを止めた。

「シン、アスラン、ハイネ、突っ立てる敵をを叩く！少しでも数を減らすぞ！」

三機ともMSを落とし始めた。

ダブルオーはGNソード？を構えストライクルージュに襲い掛かった。

「戦場で、政治活動するな――！――！」

ダブルオーの攻撃をフリーダムがビームサーベルで受けて防いだ。

「フリーダム！」

しかし、フリーダムは徐々に押され始めた。

「なっ！フリーダムがパワーで負けてる！？」

アスランもアークエンジェルに向かおうとしたが、敵のMS部隊に足止めを喰らっている。

ダブルオーはカオスと同じように力づくでフリーダムを弾いた。

「これで！」

両肩のバインダーのビームでフリーダムのコックピットを狙ったが、フリーダムは間一髪で避ける。

そしてそのままダブルオーにビームライフルを構えビームを放つが、ダブルオーはそれを避ける。

「避けた!？」

キラは種を弾き、ダブルオーに通信で

「あなたは、カガリの声が聞こえなかったんですか!?! オーブと戦うなんて」

「なら、同盟を破棄しろ、貴様がその三流政治家を攫ったから、オーブが戦場に出てきただろう？」

それを、戦場に出て、やめろだと? そういうことは政治家連中に言え!！」

フリーダムはビーム連射で撃つが、ダブルオーは全て避ける。そのことにキラは驚きを隠せなかった。

「戦場はお前らの遊び場じゃないんだよ!」

刹那の瞳がイノベーターの瞳に変わった。

それと同時に、ダブルオーのツインドライブのパワーが少し上がった。

ダブルオーはフリーダムの射撃を避けながら、GNソード?を構え斬りかかる。

フリーダムのライフルを斬り落とし、破壊した。

フリーダムはすぐさまビームサーベルを構え、迎え撃つ。

バチバチバチ

ダブルオーとフリーダムは互いの武器で押し合う。

アークエンジェルはその隙に両軍に攻撃し始めた。

その所為で、戦場はさらに混乱した。

「僕はただ、オーブを撃たせたくないだけだ」

「キラ！」

「クッ！」

ダブルオーに攻撃をしたストライクルージュ。刹那はフリーダムを吹き飛ばし、回避する。

ストライクルージュにビームを撃つが、黄色のムラサメがシールドで防いだ。

がシールドは焼ききれ、使い物ならなくなった。

「人の話は聞くもんだぞ、ザフト君？」

「言っただろう？その台詞は政治家連中に言えと」

ダブルオーはムラサメに斬りかかる、ムラサメは避けようとするが避けきれず、右肩の斜め上から綺麗に斬られた。

「なっ、肉じゃないんだぞMSは！？」

あまりにも綺麗に切れた為、思わず口にしたバルトフェルド。

フリーダムはムラサメを回収し、ストライクルージュに渡し、戦おうとしたが、

ムラサメから通信で撤退するように命じられた。

「逃がすかよ！」

ダブルオーは高出力のビームをアークエンジェルに放とうとしたが、フリーダムに攻撃され、邪魔された。フリーダムはダブルオービームを避けた隙に撤退を始めた。

「逃がすか、トランザム！」

フリーダムも撤退しようとしたがダブルオーは赤くなり、フリーダムに迫る。

そのスピードは一瞬と言ってもいいぐらいのスピードでフリーダム
の目の前に迫った。

赤い光は消えた。

「なんだ!？」

ダブルオーの動きが見えなかった為、驚くキラ。

「くっ、なんで貴方は僕を攻撃するんですか、僕はもう戦場を離れるのに？」

「これだけ戦場を混乱させて、逃がすと思うか?これだけやって罪の意識がないとは、何様のつもりだ？」

フリーダムは何とか距離を取り、バラエーナで威嚇するが、刹那はそれを読み、

フリーダムとの距離をつめようとするが、アークエンジェルのゴツトフリートが撃たれた。

ダブルオーはそれを避けたがその隙にフリーダムは全速力で戦場を離れた。

「チッ!」

連合側のMS達も撤退していく。

「GNドライブは無事のような、僅かな移動なら何とかなるか、

バインダーの御蔭なのか、5・6秒は使えるな。（咄嗟とはいえ無茶したもんだな俺も）」

ミネルバはタンホイザーを失った事よりダブルオーでフリーダムを僅かとはいえ押したことで不安が消えていた。

9 話 ダブルオーガンダムVSフリーダム（後書き）

ファントムペインのがギャグキャラになりかけてる。

誤字、脱字、おかしい表現、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします

10話 アスランの怒り

修復と補給の為ミネルバはマルマラの街に寄航していた。

アスランは先のアークエンジェルとカガリの行動にい怒りを感じ、彼等と話をするため独自にアークエンジェルの行方を調査していた。そんな折、戦場カメラマンをしていたミリアリア・ハウと偶然再開し、キラとの接触を取り持つてもらった事に成功する。

アスランはセイバーに搭乗し、待ち合わせ場所に向かった。

そこにはキラ、カガリにミリアリアが待っていた。アスランはセイバーから降りて彼らに話をした。

「キラ、カガリ」

アスランの声には怒りが混じっていることにキラ達は気づいていなかった。

「アスラン」

「どう言う事だアスラン、心配したんだぞ、それになんでお前がザフトに戻ったんだ？」

アスランに質問したカガリにアスランは。

「そのほうがいいと思ったからだ。自分の為にもオーブの為に」

「そんな何がオーブの為だ。ザフトはオーブと戦争をしてるじゃないか？」

「カガリ」

「キラ！」

「あれは君の機体？」

キラはセイバーに目を向け質問する。

「ああ」

「じゃあ、この間の戦闘にも？」

「ああ、俺も戦っていた。今はミネルバに乗っている」

「「！！」」

「お前を見て話そうとした、だが通信が通じなく。だが何故あんな馬鹿なことをした？御蔭で戦場が混乱し入らぬ犠牲も出た」

「馬鹿なこと？あの時ザフトが戦っていたのはオーブ軍なんだぞ？私達はそれを止めようと」

「戦場に出て暴れるのがか？お前がする事はオーブと連合の同盟をやめさせることだ。」

同盟を結んだから連合は協力を要請しオーブがこたえたんだろう？
あの時オーブ軍が撤退たら連合はオーブが契約を破ったといって攻
めていたかもしれないんだぞ？」

「じゃあ、君はザフトでまた僕達と戦うの？なぜ僕達を探してたの
？」

「キラそれは――」

「やめさせたいと思ったからだ。あんな事をユニウスセブンの事で
プラントが攻められるのは分かっているがその後の連合のやり方は
どう見ても悪い。」

プラントはその連合を止めるた為頑張っているのにお前達はただ戦
場を混乱させているだけじゃないか？」

「本当にそうなの？え？」本当にプラントが正しいなら、あのラク
スは何？」

キラの質問にアスランは少しキレ気味になった。

「分からないのか？核を撃たれ防いだとはいえプラントの人達は混
乱していた。」

その混乱を止める為に議長は用意していたんだ。本物はプラントに
いなかったからな。

二年前、本来なら俺とラクスがプラントをまとめなくちゃならなか
ったのに、

俺達はその責務を放棄してオーブで暮らし何もしなかったんだ。

プラントを立て直せたのは議長や評議会の人達が血を渗む努力で今
のプラントまで立て直したんだぞ。

それでも議長達は核を撃たれやり返さないといったらどうなっていたと思う、

議長達がどんなにがんばってもラクス以上の支持を得られなかった、そのラクスはなんだ何をしていたこの二年間？」

「アスラン……」

「核を撃たれた後のプラントの人達の声聞いたことあるか？
彼等は戦えと、殺される前に殺せと叫んだんだぞ！」

「でもお前がオーブと「ふざけるな、オーブ、オーブとお前はオーブが良ければそれでいいのか？」
アスラン……」

「知ってるか、連合に圧制された人達はどうなってるか、それに逆らったらどうなるか？

奴隷のように働かせられているんだぞ！逆らったら殺されるんだぞ！
同じナチュラルにそんな事をしてる連合にオーブは止めるどころか
同盟を結んだんだ」

「でも私だって止めようとしたんだぞ」

「止められなかったらう、刹那が言ったはずだぞ「政治は努力した
だけじゃ意味がないと」。

連合はコーディネータだけじゃなく同じナチュラルまで殺そうとしてるのにオーブの代表であるお前は
なんだ？オーブ、オーブとそんなにオーブが大事ならオーブに戻り
フリーダムでセイランを脅しオーブを撤退させろ」

アスランはもうこれ以上言うことはないと言うか顔でセイバーに搭乗しようとした。

「それでも僕はオーブを撃たせたくないんだ」

「何を！」

「二年前みたいに君と戦いたくない。オーブだけじゃない戦って撃たれて失ったものはもう二度と戻らないから」

「自分だけ分かったようなことを綺麗事は言うな！

お前の手だって既に何人もの命を奪ってるんだぞ？」

「知ってる。だからもう本当に嫌なんだこんな事は……」

「ッ」

「撃ちたくない撃たせないで」

「撃ちたくないだと、撃たせないでだと？」

「撃ちたくないならMSに乗るな、戦場に出てくるな、

キラ、世界はお前が思っている様に簡単じゃないんだ。

これ以上戦場を混乱させるなら俺が止める」

「それと力ガリお前はもう子供や女じゃない政治家だ、自分の立場

を考える」

セイバーはそのまま飛んでミネルバに戻った。

そのころ刹那、シン、ハイネ、レイはロドニアある施設にMSで向かっていった。

その途中にセイバーと合流してそのままロドニアの施設に5人で向かった。

刹那とシンを残し三人は施設の中に入った。

「なんだ…ここは…?」

「気味が悪いな…ん?」

「どうしたレイ?」

「あ…ああ」

「レイ?」

「ア…ア…アア!」

ハインは刹那達に連絡を取り、レイをシンに預けた。刹那はレイの変わりにアスラン達と奥に向かった。ハインはフェイス権限でミネルバに来るよう頼んだ。

「これは・・・死体か？」

ハインがライトを照らしまわりを見渡した。

「チツ・・・（分かっていたとは言え、気分が悪くなるぞ。刹那の思考と同調してなかったら吐いてたぞ）」

「・・・なんだよ……これは？」

かなりの死体が転がっていただけじゃなく腐臭が充満していた。

「なんで・・・こんなに子供が入るんだ？」

三人はある部屋に入った。

「おい、これを見る！」

ハインに呼ばれ二人はハインがあっていたデータを見た。

「64年7月11廃棄処分参入書、8月廃棄処分購入書……」

「これは・・・？」

「被験体…つまり子供の入室記録か」

「クッソ…胸糞悪いぜ」

「連合のエクステンデット、何がコーディネータは悪魔だ。こんなことを指示した連合はなんだ？」

「…刹那（キラ、お前達はオープンしか見ようとしない、連合がこんな事をしているなんて分かっていないだろう？）」

「データを吸出し早く離れようぜ」

「・・・ああそうだな」

三人はデータを吸出し外に出た。丁度ミネルバも到着した。

医長は艦長を叱っていた「なぜ彼らだけで行かせた」のかと。

シンは三人が吸いだしたデータを見て肩を震わせて両の拳を固く握り締める。

「艦長MS接近、この識別番号はガイアです！」

「一機だけなの？」

「はい」

シンとアスランが向かい、刹那とハイネは待機した。

その後、シンはガイアのパイロットを連れて医務室に向かった。

ガイアのパイロットはとりあえず捕虜として扱うことになった。

ハイネはシンにな連合のパイロットであるステラを知っているのか聞いていた。

「ディオキアの崖から海に落ちた時に助けたんです。俺が死にたいのかとついよく言ったら凄く脅えてなんとか収めたんです」

「それで、そのときに救難信号を出したのか？」

「はい」

「それからどうしたんだ」

「ステラの知り合いが探してたのを見つけて引き渡したんです」

「何人いたんだ？」

「二人です、…もしかして彼等がアビスとカオスのパイロット…？」

「あの子で三人、決まりだろうな俺らと同年か、嫌なものだな戦争は…」

「……ハイ」

「まあ、あの子の様子を見るしかないな」

ハイネの言うとおりでシンには眠っているステラを見守るしか出来なかった。

それからステラが目を覚ました。

「う…う…う」

「ステラ！」

シンがステラに呼びかける。

「俺だ、シンだ！ステラ！」

「シ……ン……誰……ここは？」

「ステラ！？俺が分からないのか！？ほら君から貰った貝殻だ」

「ネオは・・・ネオ・・・」

そんな時、シンの様子を見にレイが部屋に入った。

「シン、交代しよう、お前も寝ないと持たないぞ!...起きたのか?」

「レイ!...起きたけどステラは——」「ネオ!ネオ!」

「ステラ!?!」

「ステラ、今はゆっくり寝ている」

レイはそのままネオの振りをしてステラを安静にさせた。

「...うん」

ステラはそのまま眠りについた。

「レイ、シンと交代できたか?ってどうしたお前等?」

「刹那...実は——」

シンとレイは今の出来事を刹那に話した。

「ステラって子はレイをネオと勘違いしたのか」

「ああ」

「とりあえず、この子が不安定になったらレイに任せようがいいな」

「…ステラ」

「しかし、俺がネオじゃないと分かっただろうでるか？」

「今は出来ることからやるしかないだろう？」

「そうだな」

「シン、お前はもう寝ろ」

「…わかった」

それからステラは時間が経つ度に衰弱していった。

シンはステラのことを心配するが現状はそれを許さなかった。

ジブラルタルにむかうミネルバを連合とオーブが待ち伏せていた。

ミネルバは完全な修復が出来ずに戦闘に入ることとなった。

刹那の機転で待ち伏せがあると分かった為、セイバーとダブルオーを先に出させた。

「ダブルオーガンダム、刹那・F・セイエイ出る！」

（キラ、カガリお前達がまた同じことをするなら俺が撃つ）
「アスラン・ザラ、セイバー発進する！」

11話 クレタ沖の戦い

連合軍とオーブ軍はクレタ沖でミネルバを待ち伏せしていた。

ミネルバから全てのMSが出た。

「今度こそ、落としてやるぜー！」

カオスがダブルオーに襲い掛かる。

「毎度毎度。お前はコーラサワーか？」

カオスはダブルオーに突っ込む前にミサイルを発射させる。

「今さらそんな物で！」

ダブルオーはライフフルモードで全てを落とす。カオスはその隙を突こうとしたが、読まれ右腕を斬られた。

ハインは淡々と量産型を落としていく、そして一機のムラサメを落とそうとしたら、どこからかビームが放たれグフの右腕が破壊された。

「クッソ、なんだ!？」

ハイネが向いた先にはフリーダムとストライクルージュそしてアーケンジエルがやってきた。

「オーブ軍!ただちに戦闘を停止して軍を退け!地球軍の言いなりになってこんな戦いをしてはいけない!オーブの理念を思い出せ!」

「何がしたいんだあいつら?」

「ハイネ!援護するミネルバに戻れ」

刹那が通信でハイネを撤退させるよう言った。

ハイネは刹那の援護を受けながら撤退しようとしたが、カオス、アビスそしてムラサメ隊が好機とばかりにハイネに襲い掛かる。

「やらせるか――!」

刹那はムラサメ隊を撃墜していくがアビスがグフに襲い掛かる。

「どいつもコイツモ邪魔するじゃねよ――!――!――!」

アビスの全ビームを発射させ、グフはそれを受け大破した。

「ハイネ！」

「トランザム！」

ダブルオーはトランザムを使い海に落ちそうになったグフを掴みミネルバまで戻った。

グフは何とかミネルバに戻した。

それをよそにカガリは。

「やめるんだオーブ軍！オーブの理念を思い出せ、それをなくして何のための軍か！」

「そんな綺麗事を何時までも――！」

「いい加減以にしろ――！」

インパルスとセイバーがストライクルージュにビームを連射して放つ。

そこにフリーダムがストライクルージュを掴み回避する。

「アスラン！？」

カガリはアスランが攻撃をするとは思わず驚き声を上げた。

「シン、連携でフリーダムを落とすぞ！」

「わかった！」

セイバーとインパルスがフリーダムに襲い掛かる。

「アスラン！」

堪忍袋の緒が切れたのかアスランが種を弾いた。

「キラーーーー！」

セイバーがフリーダムにサーベルで斬りかかる、キラはアスランの構想が信じらず動揺する。

「アスラン何を！？」

シンはセイバーに気を取られてるフリーダムにセイバーと同じようにサーベルで襲う。

「なんで君達はカガリの言葉を聞かない？」

シンはこの通信でキレ種が弾けた。

「オーブしか考えられないのかアンタは――！」

フリーダムは二機の攻撃を避け、マルチロックで二機を狙うが、シンとアスランは避ける。

「なにが何のための軍だと？じゃあオーブが結んだ同盟は何のためだ？」

「くっ、アスラン」

「いい加減にしろ」

シンとアスランはライフルを撃ちフリーダムを追い詰める。

ダブルオーはミネルバの防衛に入る。

「オーブの力を今こそ――！」

玉碎覚悟で次々とダブルオーに向かっていくムラサメを刹那はGNソード？で真つ二つにしていく。

カガリはそれをみて泣き始める。

「何故分らないんだアスラン！」

「何を！」

「カガリは今泣いてるんだ！」

「「ふざけるな！！」」

シンとアスランの声が重なる。

「！」

「お前はカガリやオーブが良ければそれで言いとでもいつのか？」

「アンタは知らないだろう、連合が何をやっていたのか、連合の所為で人生を狂わされた人達の苦しみがわかるか？」

シンとアスランの通信で更に動揺するキラ

種を弾きセイバーの四肢をサーベルで破壊しようとする。

「くっ！」

アスランはやられたと思った。

「ミネルバ！チェストフライヤー、フォースシルエットを！」

シンは咄嗟に上半身を分離させフリーダムにぶつけた。フリーダムは上半身をぶつけられバランスを崩す、その隙にセイバーは分離したインパルスのパーツにビームを放つ。

フリーダムは爆発の衝撃で後方に吹き飛んだ。

インパルスは合体が済み、セイバーとフリーダムを落とそうとするがカガリが二人の前に出る。

「やめろ、アスラン！」

「カガリ！！！」

「カガリ様お下がりください」

カガリを守ろうとムラサメ三機がインパルスとセイバーに突撃を駆けた。

シンとアスランはサーベルでなぎ払う。

「あ・・・ああ・・・ああ！」

オーブ軍が次々落とされる。

ダブルオーは量産型の数に苦戦していた、その為何機かミネルバに向かうムラサメを逃がしてしまう。

ダブルオーを突破したムラサメは玉砕覚悟でミネルバに突撃した。

ルナとレイはなんとか落としたが一機だけ二人の攻撃を避けミネルバに突撃し自爆した。

そのムラサメの特攻でミネルバは第一装甲に穴を開けられた。そして火器の殆どが沈み、
ルナマリアのザクも巻き込まれ大破した。

「お姉ちゃん！」

「メイリン落ち着いて。作業班状況は？」

『コックピットは無事です、直ぐにパイロットを救助します』

「ちい」

ある程度雑魚を倒したダブルオーにカオスとアビスが襲う。二機はダブルオーが疲弊したときを狙っていた。

「そつえばいたなお前等」

刹那もキレているのか、一瞬でカオスの撃墜する、その隙にカオスごとダブルオーを撃とうとしたアビスにGNソード？を投擲した。アビスはシールドで防いだが、GNソード？がシールドに当たった瞬間にもう一つのライフルで投擲したソードにビームを放つ、その威力でシールドを貫通され中破したアビス。刹那は止めを誘うとしたが残ったウィンドラムがダブルオーにビームを撃った為、二機に止めをさせなかった。

ダブルオーはそのまま敵の空母を向かい、空母にミサイルを放ち沈めるが、全ての兵が逃げた後だった。

「カガリ、お前はオーブしか見てない、オーブが良ければそれでいいと思ってるだろう？」

「ち、ちがう私は」

「何が違う！！」

アスランは怒鳴りつける。

「戦争で親を亡くした子供は連合に実験動物のよう使われ薬を打たれ、記憶を操作されているんだぞ？連合がやってることを見ないでオーブオーブと子供のがわがままですで戦場に出るな！！」

「アンタは何も見えていない、何が理念だ、あんた達が理念だなんだの言ってる時に連合の施設で体を脳を弄られてる子供がいるんだぞ！」

シンもアスランに続きカガリに怒鳴りつける。

「わ、私はただ……」

「アンタは刹那が言ったとおりの三流政治家だ消えろ！」

アスラン達がカガリを落とそうとした時アークエンジェルは全武装を解除してインパルスとセイバーにミサイルを発射させた。

キラはその隙にカガリを連れて、戦場を離脱した、アークエンジェ
ルはそのまま海に潜って戦場を離脱する。

連合軍とオーブ軍が壊滅的な打撃を受けた。

生き残ったオーブ軍の兵士は殆んどアークエンジェルと合流した。

連合軍はMSが全滅した為そのまま撤退した。

11話 クレタ沖の戦い（後書き）

試験がある為次回の投稿は三日後です。

私が通ってる学校は日本の学校と違って母国語だけじゃなく英語にドイツ語も覚えなさいといけません。日本語で話すのが懐かしと思うこの頃。

日本に、戻りてえ〜。

12話 ネオ

刹那 Side

クレタ戦から少し経った。

シンはステラに付きっ切りで医務室にいる。

俺はマッドさんに呼ばれMSデッキに向かった。

「マッドさん、何かあったんですか？」

「おお、来たか」

マッドさんはダブルオーの前で待っていた。

「まあ、ハッキリ言うぞ、トランザムは使っな」

やっぱりその件か。原作でもイアンがオーライザーが無い時期にツインドライブの粒子放質量に機体が耐えられ無いと言っていた。

「GNDドライブもそうですけど、機体その物はどうなんですか？」

「機体はまだ俺が整備してるから大丈夫だが、今度トランザムを使えばGNドライブは確実にオーバーロードを起こし自爆するぞ」

「悪いな、刹那」

俺とマッドさんの会話にハイネが割り込んできた。

「俺がへまをして、助けるために無茶をさせたみたいで」

「いや、あれはフリーダムがグフの右腕を破壊した所為だ。お前が気にするな」

「そうだな、機体は変えればいいだけだ」

ハイネのグフとルナのザクは大破状態、修復するより新しい機体と変えた方が早い。

「と言っても、グフは気に入ってたんだ」

マッドさんの話を終えた後、俺おハイネは部屋に戻る途中にメイリン達の会話が聞こえた。

「で、シンとアスランがフリーダムを追い詰めたの？」

「うん、アスランさんがやられそうになった時にインパルスのパーツをぶつけてセイバーを助けたのよ」

「へーえ、刹那さんは単機でフリーダムを追い詰めたみたいだし、ミネルバのエースパイロットって以外に最強チームじゃねえ？」

「はは、確かに、シンも単機で大分強くなったし」

「あ．．．．」

「ん、どうしたメイリン？」

ヴィーノ達が後ろを向くとハイネが笑顔で居た。刹那はお腹を押さえて笑いを堪えている。

「ハ、ハイネさんもエースだと思ってますから、大丈夫です！」

「くく．．．．くくく．．．．」

「刹那、お前笑いすぎだ。別に俺は気にしないよ」

「・・・く・・・わ、わかってる、ただ俺達を通ったタイミングがドンピシャだったからつい。・・・く」

するとメイリンの後ろの通路からルナマリアもやってきた。

「メイリン」

「お、お姉ちゃん！」

「お姉ちゃん！じゃないわよ。もおう私は怪我で寝込んでいたのに
お見舞いのも来ないで」

「う、ごめん、ついさっき交代が入ったから先に飲み物を」

「もういいわよ」

「刹那、ハインここに居たのか」

S i d e O u t

アスランが刹那とハイネに相談があると言って二人をどこに連れてった。

「ルナとメイリンって、あの三人の内どっちが好みなの？」

ヨウランが唐突に二人に質問をした。

「突然、私は刹那さんかな。あの中で一番落ち着いてるし」

「私もそうかな」

「おお、両手に華じゃん刹那」

「だったら、刹那を二人の部屋に誘って姉妹ど——」
「こほ」

「エッチなこと考えるんじゃないの」

「へ、へんたい」

ヴィーノはルナマリアから鉄拳を貰い四人は解散した。

シンは早朝に医務室の先生を気絶させステラを連合に返そうとした時にレイと鉢合わせをした。

「返すのか？」

「ああ、このままだと死んじゃうし、生き残ったとしても実験動物扱いだ」

その時、刹那達もやって来た。

「やっぱりな」

「まったく」

刹那とハインは分かっていた風に口を開いた。

「その子を返すんだろう、シン？」

「はい、もしあなた達が邪魔をするなら——」「安心しろ、議長から

許可を取ってある」え!？」

「まったく、お前に知らせようとした矢先にこれだ」

「その子を返した後の罪はないが、医務室の先生に暴行した罪は消えないぞ? 営倉が一発ぐらい殴らないと先生がかわいそうだし」

「わかってます、帰って来た時は思いっきり殴ってください」

「OK、ヒヨッ」覚悟しとけよ?。」

「レイも連れてってやれ」

「刹那!？」

「レイも気になるだろうネオとよばれてる男を?」

「はい」

「じゃあ、早く行け。ハッチは俺達であける。艦長にも言っている」

シンとレイはステラを連れてインパルスで出た。

刹那達がメイリン達と話してる最中にアスランが相談があると言ったのはこの事だった。

三人で議長に掛け合い許可を貰った。

刹那は議長に連合がD・S・S・Dを襲うかもしれないと言って、D・S・S・Dに護衛をさせたほうが言いと助言した。

理由は連合はオーブ軍を使うくらい切羽つまっている。D・S・S・Dは独自の技術があるから連合がその技術を奪う可能性がある指摘した。

議長もその考えに納得したのかD・S・S・Dに護衛を送ることにした。

シンとレイがとある小島でネオを呼んだ。

レイはかつてラウ・ル・クルーゼが着けてた仮面を着けインパルスの外で待っていた。

数分が経ち紫のウィンドムがやって来た。

「ネオ・ロアノークだ、約束通り一人出来た！」

シンはステラを抱えインパルスを降りた。

「・・・ステラ」

「ステラを渡す前に確認したいことがある」

ネオはレイの仮面に見に覚えがありそうな顔をした。

「なんだ？」

「アナタはムウ・ア・フラガと言う男を知ってるか？」

「確かエンデュミオンの鷹と呼ばれたMAのパイロットの名だろう。それがどうした？」

「アナタに会って確信した。アナタはムウ・ラ・フラガだ！」

「は！？」

ネオは何を見当違いな事を言ってるんだという顔をしていた。

「この子がアーモリワンで三機を強奪した後にアンタも感じたはず、俺の存在を。俺は白いザクに乗っていた」

「あの感覚は？」

「フラガー族特有の感応能力だ。アナタがムウでないのなら俺と同じアル・ダ・フラガのクローンと言う事になるが、それだとあなたの年ではありえない」

レイは仮面を取り素顔を見せた。

「なっ！？」

「レイ！？」

シンとネオはレイがの言葉に驚愕したが、だが二人が驚愕した理由は同じ理由ではなかった。

シンはレイがクローンだと言う事に驚き、ネオは自分がネオじゃないと言われた事とレイが自分と同じ顔である事に驚いていた。

「その子は記憶を操作されているならアナタも記憶を弄られてる可能性があるぞ」

レイは銃をネオに突き付け告げた。

「シンは銃殺刑覚悟でこの子をアナタに渡す。シンのはこの子を戦争に関係ない世界で生きて欲しいと願っている」

シンは真剣な顔でネオを見ていた。

「…わかった、約束する」

シンはステラをネオに渡しステラに別れの挨拶を続けた。

「もし、彼女が戦場に出ていたら俺がアナタを撃つ」

「・・・わかった！」

ネオはそう返事をしてこの場を去った。

ネオは母艦に戻る間、自分の存在に疑念が浮かんでいた。

12話 ネオ（後書き）

次回はPV150、000にユニーク20、000突破企画の番外編です。

一時間後に投稿します。

番外編 新訳Z 1（前書き）

PV十五万 ユニーク2万 突破記念のもしもシリーズです。

設定はオーライザーは壊れていないと刹那の世界を知っているアスラン達のお話です。

番外編 新訳Z 1

刹那 Side

インド洋で戦闘が終わったかと思ったが目の前の空間が歪み俺とシンとアスランは機体ごと空間に引きづり込まれた。

「ここはどこだ？」

「俺達、地球にいたのに？」

「落ち着けアスラン、シン」

俺達が気がつくと宇宙にいた。

しかもあるはずのプラントが存在していなかった。

「アスラン、刹那。複数の熱源を確認しました」

「こっちもだ、これは戦闘か？」

「行つて見るか」

「危険じゃないのか？」

「俺達はいま情報が欲しい状態だ。それよりお前らの機体のENは？」

「セイバーはまだ8割以上残つてる」

「インパルスも同じで」

「とりあえず様子見だ」

「そうだな」

こうして俺達は戦闘宙域に向かった。

（アーガマ？それにZに百式？）

「なんだ、あのMSは！？」

「それだけじゃない、あの戦艦も見たこと無いぞ」

「・・・アスラン、シンあの金色のMSとGを助けるぞ」

「しかし」

「あの二機が相手をしてる奴はなにか嫌な感じがする」

「・・・わかった」

カミーユ Side

「ジェリド!」

「今度こそ終わりだなカミーユ!」

ジェリドはマウアーは新型MAとMS部隊でZガンダムと百式を襲ってきた。

アーガンには幾つかのMSはあるが今は修復の最中、戦闘に使える機体がこの二機だけ。

「ちっ!」

Mk-2をジェリドの攻撃を避ける。

「カミーユ、落ち着け！」

「大尉、しかしこの数だと」

「一機ずつ破壊するぞ、幸い二機のMA以外はたいしたことが無い」

「はい！」

その時、ティターンズのMSを攻撃した見たこと無いMSが現れた。

『二機相手にこの数が、この手の連中は雑魚だと相場が決まってる』

「なんだ、あのMSから出てる緑の粒子は。それにあのMSのパイロットはNTなのか？」

『こちらはザフト軍ミネルバ所属のアスラン・ザラだ。その変形MSと金色MSの援護を行う』

『味方なのか？』

「大尉、彼等は信じていいと思います」

「なにか、感じたのか？」

「はい、僕達に敵意はないみたいです」

「そうか、こちらエウーゴ所属のクワトロ・バジーナ大尉だ、援護を感謝する。」

話はこのMS部隊を倒した後で構わないか？」

「ええ、こつちもそのつもりです」

すると、緑の粒子をだす機体が赤くなったと思ったらとんでもないスピードでMSを破壊していく。

「なんてスピードだ！」

クワトロ大尉も驚いている。他の二機も僕と同じぐらいできるがあの機体は別格だった。

『誰が雑魚だと？このガンダムもどきがー！』

ジェリドは赤くなった機体を襲う、ジェリドの突いたサーベルが貫いたと思ったら――

赤くなった機体は量子化した。

「『『なつ、なんだと！？』』」

そして、ジェリドの後ろに量子化した機体が現れジェリドのMAを真つ二つにした。

「なんだ、今のは？」

あのMSは従来のMSの性能を超越しているぞ。

「な、なんて機体だ。あんなMSが存在するのか？」

「こちら、刹那・F・セイエイ。我々は貴方達と争うつもりは無く会談を持ち掛けたいが？」

「クワトロ大尉」

「よかるつ、我々の戦艦で話そう」

僕は彼等をブリフィングルームに案内した。
案内している内に自己紹介をすませた。

「会談に応じてくれてありがとうございます」

青いパイロットスーツを着た男が口を開いた。

「いや、我々も君達の助けが無ければ危ないところだった」

「さて、まず聞きたいことがあります？」

「何かね？」

「プラント。ザフト、コーディネイターこの言葉に聞き覚えはありますか？」

「いや、全く無いが」

すると、赤いパイロットスーツ着た二人が信じられないと言う顔をした。

「アスラン、シン、決まるだ。此処は異世界のようだ」

「「!!」」

今なんて言っただ彼は？

「どういう意味かね？」

「そのままの意味です。お一つ聞きたいのですが？このMSの動力はなんですか？」

「核融合炉だが」

「なんだって!？」

僕達はなぜその事で驚いてるのか分からなかった。

「何故驚くのかね。君達のMSの動力は違っのか？」

「俺のは兎も角、彼等の機体はバッテリーで動いています」

「な！？」

「まさか、君達のMSは電気で動いてるのか？」

「はい」

「そんなメチャクチャな」

アナハイムが知ったら飛びつくだろうなとクワトロ大尉も思ってるだろうな。

「それで、君の機体はどんなだね？」

「俺の機体は太陽炉、通称GNDライブと呼ばれる動力炉です」

「聞いたこと無いな」

「木星のような高重力下の環境じゃないと作れない動力炉です」

「君は彼等より冷静だがなにか理由はあるのかね？」

確かに、刹那と名乗った男は他の二人より冷静すぎる。

「簡単な話ですよ。俺は彼等がいた世界とは違う世界の人間なんです」

「なるほど、異世界に来たのは二度目か？」

「はい、最も来たと言うより事故でやってきたなんですけど」

「なるほど」

「まず、彼等の世界のことを話します。この世界は最後でいいですか？」

「構わんよ」

彼等の世界はコーディネーターとナチュラルの戦争だった。スペースノイドとアースノイドの関係とそっくりだった。

そして、刹那の世界は驚くことが多すぎた。

「太陽光発電システムか」

太陽風をエネルギーに変換して無限のエネルギーを手に入れた世界。
地上からエネルギーを使う必要がないか。

「全く、羨ましい世界だよ」

だけどそれでも人は戦争をしていた。彼が所属していた組織ソレス
タルビーイングの活動目的を聞いた。

「CBの武力介入によって世界の統合を促し、人類の意思を統一させ、争いの火種を抱えたままに外宇宙へ進出することを阻止する」

「なるほど、真理だな、意思の統一は出来たのかね」

「世界が統一して大きな戦争はなくなりました。流石に小さい内紛などは消えませんでした。が全世界が一つになったのは確かです」

僕も羨ましいと思った。戦争が無くなった世界は平和なのだろう。

そして、イオリアと呼ばれた天才宇宙物理学者のような人がいればこの世界だって戦争がなくなるかも知れなのにと嫉妬してしまった。

2000年先の世界を予見して施設武装組織を作った人物が。

「ですが、イオリア・シュヘンベルグの目的はさらに先にありました」

「先とは？」

「来るべき対話の為に人類を革新に導くことでした」

「革新！」

クワトロ大尉と同じ事を言ってる。

「はい、俺の機体、ダブルオーライザーはパイロットの遺伝子に影響を与え、人間が遺伝子レベルで眠らせている能力の発現を促す力を持っているんです」

刹那の瞳が金色になっていた。

「NTか」

「そちらではそうでしょうが、俺の世界ではイノベーターと呼ばれてます、

そしてイノベーターの力とツインドライブが連動すればトランザムバーストが使用でき、

そのシステムで人々の遺伝子にも影響を与えます」

「まったく、驚くばかりだな今日は」

「はい」

「君達はこれからどうする？」

「正直言えば困っていますよ」

「ここエウーゴのパイロットとして働かないか？無論この世界の常

識は教える」

三人は相談して、直ぐに了承した。

クワトロ大尉はこの世界の現状を説明した。

彼等と話をして大分時間が経った時、放送で先程の部隊がやって来たらしい。

「さっそくか、すまないが出るぞ？」

「「「はい！」」」

僕達はMSに搭乗した。

「カミーユ・ビダン、ガンダムMkⅡ？行きます！」

「アスラン・ザラ、セイバー発進する！」

「シン・アスカ、インパルス行きます！」

「刹那・F・セイエイ、ダブルオーライザー出る！」

これが彼等との最初の出撃だった。

番外編 新訳Z 1（後書き）

これは連載はしませんのであしからず。

ちなみにインパルスとセイバーにしたのはバッテリーで動くMSが存在してることの分からせるためです。以上！

13話 ベルリンの死闘

ファントムペインの整備班はデストロイガンダム出撃の準備を急ピツチで進めている。

ネオはレイに言われた事を気にして裏でいろいろと調べていたが、自分が感づき調べる事を予見していたのか観覧出来たデータでは自分の疑問を晴らす事ができなかった。

（まさか、ステラ達以外全てが俺の監視だったとは、迂闊に動けないか）

ネオは内心悪態をつきながらステラの調整を見守っていた。

（くっそ、結局は何も出来ないのか）

「なあ、誰だよあの死にぞこないは？」

「新入りか？」

ステイングとアウルがネオに聞いてくる。

「ああ、あの機体に乗せるため本国から送られてきた」

ステイングとアウルはステラに関する記憶を何らかの情報で上書きされていた。

「ちえ、俺達の方が上手く使えるぜ」

「全くだ、しかも俺達にはあのMAかよ」

二人に用意されたのはエクステンデット用に調整されたザムザザーだった。

「仕方ないだろう、機械がステラのほうが効率がいいと判断したんだ」

「わーっ たよ」

アウルは駄々っ子が諦めたような感じでいじけた。

「あの子、ステラの調整が終わり次第出るぞ」

「あいよ」

「オーライ」

（俺がこれ以上自分の事を調べれば始末されるか、そうしたらステラ達は・・・）

シンはステラを返した事にお咎めは無かったが医務室の先生に暴行を行った事で三日間の営倉いりになった。

ミネルバは修理を終えた矢先に、本国から連合がベルリンに進行しているとの入電が入った。

「ユーラシア中央に地球軍が進行しすでに3都市が壊滅！ザフト全軍は非常体勢を取れとの事！」

メイリンが読み上げ、それを聞いてタリアが

「地球軍！？……目的地までは遠くないわ。本艦は至急ベルリンへと向かう！」

ブリッジ遮蔽、コンディションレッド発令！パイロットは搭乗機にて待機！なにがあるか判らないわ。気をつけて！」

刹那達にもその情報が入りMSデッキに向かった。

デストロイがロシア方面からベルリンに向かっていく。

ベルリンに向かうまでに幾つかの都市は無残に破壊されていた。

（ちっ、結局何も出来ないのか）

ネオは自分の無力に怒りを感じながらウィンダムでデストロイの援護をしていた。

（ステラが敵を倒さないと俺達が死ぬか・・・あながち間違っていないが）

ファントムペインは何時切り捨てられても可笑しくなくらいに作戦を失敗し続けている。

（だからこそそのデストロイか・・・）

ハイネは怪我が完治したが、MSが無いからMSの整備を手伝っていた。

刹那はMSの状況をハイネに聞いた。

「出れるのは俺のダブルオーとインパルスにセイバーか？」

「俺のグフとルナマリアのザクは出られんがレイのザクは出れるみたいだ」

「だがザクは飛行は出来ない、救助活動をやったほうがいいと思うぜ」

「そうだな、情報だと幾つかのザフト部隊も返り討ちにあったと報告もきているし」

刹那とハイネは艦長にそのことを伝えレイに救助活動の許可を得た。

「不満だろが我慢してくれよレイ？」

ハイネはレイに言うが

「いえ、これが懸命だと思います、それにハイネも行きたかったのでしょう？。」

「まあな、グフの修理が終わっていたらと思ってる」

「連合は俺達に任せて待っていてくれハイネ？」

「わかってるよ、アスラン」

その時、ブリッジから光学映像が送られてきた。

そこに映っていたのはデストロイに破壊されつくした町が映っていた。

「おいおい冗談だろ、なんの映画だよコレは？」

ハイネは思わず口にしたが、どう見ても現実的に有り得ない光景だとみんなが思った。

「ベルリンに住んでる人は殆んどナチュラルだろ、何がしたいんだ連合は？」

シンは拳を強く握り締め呟いた。そこに更にタリアから通信が入った。

「刹那、状況は混乱してるわ。それとアーケエンジェルが連合と交戦中よ」

「キラ、これが連合のやり方だぞ・・・オーブはこの連合と同盟を結んだんだぞ」

「アスラン・・・」

シンはアスランがアークエンジェル達に殺意を向いてるのが分かりアスランを心配している。

「！すまない」

「いや、それより敵の情報に例のMAも二機いるぞ（原作と違ってきたな、こっちもあっちも）」

「そうですよ、今はあのデカ物を止めるのが先決ですよ」

「そうだな、シン・・・」

アスランはシンの言葉に冷静になったのか、表情がよくなった。

デストロイと二機のザムザザーはドイツの首都ベルリンを破壊していた。

「あんた達なんか、消えちゃえええ！」

「消えろおおお！！！」

「おらああああ！！！」

（ふん…調整は上手くできたという事か）

ステラだけじゃなくステイングやアウルも記憶を弄られた。ステイングとアウルは内心デストロイに乗るパイロットがステラだと言う事に納得言っていないと判断され記憶を都合のいいように弄られた。

三人は次々とザフト部隊のMSや都市を破壊していく。正に悪魔そのものであった。

既に守備隊は役に立つ事も無く大半を無力化され、ベルリンはもう破壊されるのを待っただけの町となったが、そんな時にデストロイの動きを邪魔するように数発のビームが注がれる。

「やめろおおお！！！」

現れたのはフリーダムとアークエンジェルと数機のムラサメだった。ムラサメはザムザザーを抑えようとしたが、ザムザザーの火力と陽電子リフレクターの前では何も出来ず防戦一方になった。

（アークエンジェルか・・・）

「ステラ、ステイング、アウル、奴らは敵だ。お前達やお前達の大
事なものを壊す敵だ」

ネオは通信でステラ達を煽る。そのれに同調するように三人の攻撃は更に増した。

「くっそー、なんでこんな事を!？」

「キエロオオオ!！」

デストロイはフリーダムに向かって砲撃をする。

フリーダムはデストロイの砲撃を避けながら自分もビームで砲撃するが陽電子の前で無効化されていく。

「・・・フリーダム!」

ネオは頭に知らないはずの映像がフラッシュバックする
内心複雑な気持ちでフリーダムい砲撃をする。

「この感じは!?!」

フリーダムはそれを避け、ウィンダムを落とそうとするが

「ネオ!」

ステラがフリーダムに砲撃をして、ウィンダムを落とす隙を与えない。

「くっ、…ムウさんなのか?」

その時、ミネルバも現れ、ミネルバから三機のMSが出てきた。

「…ボウズ、来たのか」

「アスラン、シン、アーケエンジェル側は無視して、あのデカ物を押さえてくれ、俺は二機のMAの相手をする!」

「わかった!」

「了解した！」

二人とも内心納得言っていないがこの状況ではわがままを言っていない事も分かっている為、刹那に従った。

（原作と違ってザムザザー二機増えてるな・・・）

「なんだよ、この化け物みたいなMSは？」

インパルスとセイバーが近づいた事でデストロイの攻撃はさらに過激になり、都市を破壊していく。

「くっそ、なんでそんなに殺したいんだああ！！！」

「待て、シン迂闊すぎる！」

インパルスは急降下してビームを回避しながらデストロイに向けて接近し、

背後から迫ってきていたドラグーン型腕部ビーム砲シュトルムフ
アウストのビームを回避し、
その勢いでデストロイめがけて突っ込み、手にしたサーベルでコッ
クピットを切り裂いた。

この一撃によってコックピットの中が一部露出するも必殺の一撃に
はならなかった

「なっ!？」

「無茶をする・・・」

キラはインパルスの動きに驚き、アスランは安堵した。

インパルスは追撃しようとするが、ウィンダムが体当たりでインパ
ルスを止めた。

「やめろおお、ボウズウウウ、あれに乗っているのはステラだぞ！
」

その言葉でインパルスの動きが止まった。

「緑の粒子を出す奴！」

「キエロオオオー!!」

ステイングとアウルはムラサメを無視をして、ダブルオーに襲い掛かる。

ダブルオーは両手にGNソード?を構え、左のザムザザーの懐に向かったが、もう一機のザムザザーが砲撃をして、ダブルオーの動きを止めた。

「やっぱり、簡単にいかないか」

「今度こそ、オトスウウウー！」

「この声はアウルかよ!?（生きていたのか）」

「シネエエエエー!!」

「こっちはステイングかよ!?」

二機のザムザザーはダブルオーに攻撃の暇を与えないように砲撃を続ける。

「チッ」

刹那は避けながら攻撃のチャンスをつかっていた。

「オラオラー！ー！」

「落ちろ落ちろ！ー！！！」

ダブルオーはビームの嵐を避ける。ムラサメは攻撃に巻き込まれ数機被弾した。

「何やってるんだ奴らは？」

刹那は被弾したムラサメに呆れる。

「それにしても、なめられた物だ」

刹那は二人の攻撃パターンを見切ったのか、隙をつきGNソードを一機のザムザザーに投擲した。

「何！？」

「アウル！」

「なめすぎなんだよ！」

突き刺さったGNソード？にビームを放ち、刺さったGNソード？のところが爆発しザムザザーは落ちる。

「デメエー……！！」

「攻撃に隙が無いとはいえあれだけ同じパターンで攻撃されたら嫌でも見切れる！」

ダブルオーはザムザザーの砲撃を掻い潜り、ザムザザーを落とした。

シンはネオの言葉を聞いて、先程デストロイに傷を付けたところからステラを確認をした。

「……ステラ！」

「何だって！？」

アスランも確認したのか、セイバーの動きが止まった。

「なんで、どうしてステラがあんな物に乗ってるんだ!？」

シンは通信でネオに問いかける。

「すまないと思ってる。俺の権限ではどうにもならなかった・・・」

「くっそー！ー!!」

「シン・・・」

アスランはどうすればいいのか迷っていたが、デストロイはネオが被弾したと思い、叫びながら攻撃を再開した。

「ネオー！ー!!」

「的になりたいのか？」

キラはシン達に通信で叫ぶ。

「キラ・・・」

「く・・・」

フリーダムはインパルスの攻撃でえぐられた場所にレールガンを放ち、デストロイはさらにダメージを受ける。

「やめるー！ー！」

インパルスはサーベルでフリーダムを襲い掛かるが、フリーダムはそれを避けながら後ろに下がっていく。

「シン・・・」

アスランはシンの気持ちを分かっていたのか、シンを行動を止め様としなかった。

シンはデストロイに通信で呼びかける。

「ステラ、俺だシンだよ！」

ウィンダムが動かず、ネオも通信しない事でネオが落とされた思い混乱していくステラは叫ぶ。

「いやだ、死ぬのはいやー！ー！」

ステラは叫びながら見当違いなとこに攻撃していく。シンはステラ

なだめるように通信を送り続ける。

「君は死なない、俺が、俺が守るから」

「守る・・・」

その言葉をきいてデストロイの攻撃がやんだ。

「・・・ボウズ」

「・・・シン」

アスランはステラの暴走をとめたことに安堵していたが、フリーダムがチャンスと思いデストロイに襲い掛かる。

「キラ!？」

「ちっ!」

ネオはフリーダムを止め様としたが、フリーダムに四肢を破壊され撃墜される。

『マリューさん、ムウさんを』

「くっそー、！？」

（キラ！？何だこの記憶は）

ウィンダムはそのまま地面に落ちた。

キラはアークエンジェルに通信を送た。

ステラはウィンダムが完全に落とされ、再度暴走した。

「ネオ！ネオーーーーー！！！」

「ステラ、落ち着いてくれ、ステラ！！」

「クッソ、キラー！」

アスランはキラの行動に腹を立てたのか、デストロイに再度襲い掛かるうとするフリーダムを止めた。

「アスラン！？」

「ふざけるな、シンがあの子を宥めたのに、お前はーーーー！」

キラはアスランの言ってる事が理解できないのか

「何を言ってるんだアスラン？」

「ただ暴れたい時だけ暴れる、どこまで自分のエゴを振りまくつもりだお前は？」

「アスラン！？」

「ステラ——！」

シンは通信でステラをとめられないと思い、コックピットを開けたまま直接ステラの前まで移動しようとする。

「お前はただ戦場を混乱させてるだけじゃないか——！」

セイバーはフリーダムにサーベル攻撃し続ける。

「あれをほっとけと言うのか君は？」

「あの子を止める為にシンは説得をしていたのに」

フリーダムはセイバーの攻撃を避け続けるが、数発のビームがフリーダムに注がれる。

「アスラン」

「！！」

「刹那！」

「状況は？」

アスランは簡単に状況説明をした。

「あの機体にはシンが返した子が乗っていて、シンが説得をし成功したと思ったが、キラがウィンダムを落とした所為でまた混乱し始めた」

「だったら、フリーダムをこの場から撤退させるぞ」

「わかった！」

「あの青い機体とアスランを同時に相手するのは・・・」

ステラはネオを落としたフリーダムが襲われてるのをみて落ち着いたのか、攻撃を辞めた。

「ネオを倒した奴が・・・」

攻撃がやんだ隙にシンはステラの目の前までやって来た。

「ステラ」

「!？」

シンはヘルメットをとり、ステラに自分の顔を見せた。

「・・・シ・・・ン？」

「そつだよ、シンだ。君を守りに来たんだ」

「……守る……ステラ……を守る」

「そつだよ、ステラはこんな物に乗る必要は無いんだ」

「シン…」

「ステラ」

「シン！」

シンはステラを抱き寄せ、ステラをインパルスのコックピットに戻った、
その瞬間にデストロイのコックピットにビームが放たれ爆発した。

「「シン！！」」

キラは何とか隙をみつけ、デストロイのコックピットにビームを放った。

キラは刹那達がシンの名前を叫んだ隙に刹那達を突破した。

「しまった！」

「くっそ。シン！」

インパルスはデストロイのコックピットの爆発の時に少し離れた。

フリーダムはそのまま、コックピットにサーベルを突き立て、デストロイを破壊した事を確認するとアークエンジェルに戻った。

「シン、無事か？」

アスランが通信で叫ぶ。

「はい、何とか俺もステラも無事です。ステラはさっきの爆発で気絶してますけど大丈夫です」

「そっか、ふう」

「それより戻るぞ、補給を済ませ救助活動手伝っぞ！」

「ああ、そっだな」

「はい！」

三機はミネルバに戻った後、救助活動を手伝った。

刹那 Side

「ふう、なんとか終わったか」

救助隊がやって来て、艦長からミネルバに戻れと言われた。

（原作と違って大分状況が違っていたが、とりあえずステラを助けられたのは大きいな、

ヘブンズベースにはエクステンデットの資料もあるはずだし、それよりも驚いたのがレイがアウルを救助したのが驚いたな）

アスランはこっち側の上、ステラもアウルも生きてる

「これから出たとこ勝負ってどこか」

14話 世界の敵（前書き）

色々あって何とか書き込みが終わりかけようとした時、雷が落ちて停電。

『おいーーーーー！！マジ！？マジなの！？』と本気で叫びました。

自分が居るとこは日本より停電がおきやすい国です。

停電は3時間程度だが、14話はペアでした。

マジで書く気が失せたがなんとか思い出しながら復元しました。

14話 世界の敵

「……う……ここは？」

目を開けたら見慣れない天井を目にしたアウル。

「起きたか？アビスのパイロット君」

「アンタは？」

「俺はアレだ、緑の粒子をだす機体のパイロットだ。お前は？」

「!？」

緑の粒子の機体と聞いて驚くアウル。

「別にお前を殺そうとか思ってないから。むしろ普通の生活が出来るようにする為に観察かな？」

刹那を警戒してるアウルに刹那は

「とりあえず名前を知りたいんだけど」

「・・・アウル・ニード」

「そうか、俺のフルネームは刹那・F・セイエイだ」

「まあ、自己紹介も終わったし。単刀直入に聞く普通の生活を送りたくないか？」

「何でだ？」

「戦争が終わった後はどうするんだ？」

「そりゃあ・・・」

アウルは答えようとするが答えられない。

（無理もないか、大分強化されて記憶を弄くられたし）

「未来みらいの事はゆっくり考えればいい」

「・・・・・・・・」

アウルは何故自分は未来の事を考えられないのか疑問に満ちていた。

「アウルの子供の頃の話が聞きたいのだが？」

「俺のガキの頃の話？」

「ああ、軍に入る前のことを覚えてるか？」

「そりゃあ・・・！？・・・なんなんだよ・・・これは・・・？」

「アウル？」

アウルの様子が少しおかしくなった。

「なんで、・・・俺は・・・俺は・・・？」

「落ち着け！！！」

刹那は大声でアウルを落ち着かせた。

「はあ、はあ、はあ・・・」

アウルは息を整え口を開いた。

「俺の記憶がおかしい、なんだよこれ？」

「お前達は事は少し知っているぞ」

「教えてくれ、なんでステラの事を忘れてたんだ、なんで知らない記憶があるんだ？」

（どうやら連合の奴らに上乗せされた記憶のメモリが剥がれたようだな）

「お前とステラって子は記憶を弄られ連合にいいように使われたんだよ」

「何だよそれ？記憶を弄られたって？」

「お前はアウル・ニードだ、違うか？」

「・・・・・・」

「今までのお前もおまえ自身、そして今のお前もお前自信、違うか？」

「!?!」

「過去を忘れ、新しい人生を歩んでいいんだぞ。さっき俺が聞いただろう？」

『普通の生活を送りたくないか』とな？」

「送れるのか？」

アウルは刹那に質問をした。

「送れるぞ。連合の研究室でお前達の事が載っていたからな。
お前らは被害者だよ」

「お前らって事はスティング達も居るのか？」

「ステラって子だけだ」

「…そうか」

「スティングって奴も助けてやるよ」

アウルは刹那の言葉に疑問を持った為、刹那に質問をした。

「なんで、俺を助けようとするんだ？」

「俺もお前らと同じだからだよ」

「!？」

「俺の場合は誘拐された後、戦場で死ねば神様の元に逝けると信じ込まされたんだよ。

俺だけじゃないぞ、他に沢山居た。中には街中で爆弾を抱え自爆テロを自らやった子供いた。

最後には俺達を前線に送り込んで自分達は戦場を離脱しやがったんだよ」

アウルは真剣な表情で刹那の話を聞いた。

「俺は奇跡的に生き残った。それから戦争を生み出す奴や利用する奴を破壊するために生きてきた

（やはり、こういった事だと刹那の感情が強く出るな）」

「アンタはその為に戦場に出るのか？」

「ああ、お前達を道具のように利用したブルーコスモスを破壊する。お前達みたいな子が二度と現れない世界にす為にな」

「.....」

「お前が変な気を起こさなければ出歩いてても良い様に艦長に話をつけてやるよ」

「…おいおい」

刹那の言葉にアウルは呆れた。

「ステラって子は既に意識を回復して出歩いてるぞ」

「はあっ!？」

「あの子はこの艦を乗っ取るような子じゃないと判断されたから」

「ちょっと待て!艦って?」

刹那はニヤケながら答えた。

「この艦はミネルバだ。さっき言っただろ緑の粒子を出す機体のパイロットだって」

「それは言ったが、てっきり何処かの基地かと思ったんだよ!」

「ミネルバはジブラルタルに向かっている。2、3日で「アウル」

「！——つと！」

ドアが開いたと思ったらステラがアウルに抱きついた。

「ス、ステラ！？」

「アウル生きてた！」

「ああ、生きてたぞ。と言つよりお前どうしたんだ？普段ならこんな事しないのに？」

「ステラどうしたんだ？ってそいつも起きたのか！」

続けてシンも医療室に入ってきた。

「ああ、名前はアウルだ」

刹那がアウルの名前をシンに教えた。

「そっか、俺はシン。シン・アスカだよろしくアウル」

シンがアウルに自己紹介をした。

「あ、ああ。俺はアウル・ニード」

「さっき言った通り、お前達の事は調べがついてるし艦を乗っ取るとか、物騒な事を考えなければ殆んどが好意的だと思うぞ。（同情的な意見が多いと思うが、憎しみあつてよりいいか）」

「わかつてるよ。俺も俺の記憶を弄ったやつ等が憎くなったからな」

「弄る？」

ステラがアウルに聞く。

「ステアが知る必要はねえよ」

ぶつきらばつに答えたアウル。その時ハイネ達も医務室に入ってきた。

「おゝお、起きてるな少年」

「ハイネも歳があまり変わらないだろう」

「んだよ、アスラン。そんな事言つてると剥げるぞ？」

「ヅラじゃないからな！」

「誰もそこまで言っていないだろう」

（やっぱり気になってるのか？）

「それに最近は抜け毛がないんだぞ！！」

アスランが必死に切実にハイネに訴える。

「そ、そうかよかったな」

「…ああ、お前等とりあえず自己紹介したほうがいいぞ？」

「「あ」」

二人はアウルに自己紹介をして、議長にアウル達が出歩けるように許可を正式に取った。

出歩けるように二人のフェイス権限を使ったが、特に副艦長のアイサーが弱気なのか「議長の許可を取った方がいいのでは？」とか、しつこく言ってきた為、二人は議長から許可を貰ってきた。

「とりあえず俺達の誰かが監視役として居るなら、出歩いてもいいと許可を貰った」

「いや、普通は許可を貰えねえだろう？」

アウルがザフトの対応にツツコミを入れた。

ジブラルタルに着くまで刹那達はアウル達と気があったのか、ふざけ合いができるまで親密になっていった。

ジブラルタルに着いたら議長が居てアスランだけが議長に呼ばれた。

アーケエンジェルの医務室

フリーダムに落とされたネオがアークエンジェルに保護され医務室で目を覚ました。

「ここは・・・？」

目を覚ましたときに居たのはキラとマリューだった。

「マ…リユ？」

ネオが確かめるように呟くとマリューはネオに抱きついた。

「ムウなの？」

「あ・・・ああ」

マリューは何度も確かめるように、涙を流しながらムウに問いかけた。

マリューが落ち着きキラは何故連合に居たのかを質問をした。

「記憶を弄られて、ネオ・ロアノークとして生きてたんだよ。キラに落とされるまでな。」

（落とされた瞬間にクルーゼの奴にボコボコにされた時のビジョンがフラッシュバックしたのが原因だけだ）」

「記憶をツて、そんな事出来るんですか？」

「出来るぞ、ザフトから強奪した三機のMSのパイロットの記憶を弄ってたからな。」

俺の場合は最初だけだったと思うけど」

「思っけどって？」

「最近になって気づいたんだよ。ザフトにクルーゼと同じクローンと接触したとき言われたんだよ。」

記憶を弄られてるかもしれないってな」

「それからどうしたの？」

「ムウ・ラ・フラガに関するデータを調べていたら俺が閲覧したら詳しく出ないように細工されていた痕跡があったんだよ。それから連合を疑い始めたけど何も出来ないと思っていたらお前に落とされ記憶が戻ったんだよ」

ムウは出来るだけ簡潔に説明した。

「そうだったんですか」

「以前の記憶とネオの記憶はどうなの？」

「混ぜてる感じだがそれほど違和感はないぞ」

「ムウさんはこれからどうするんですか？」

「連合のお偉いさんに借りがあるからな、俺も戦わせてくれないか？」

（ステラ達を戦いの道具としてしか見てなかったジブリールだけでも殺さないと気がすまないし）

「ムウさん・・・」

「あの黒い機体はどうなったんだ？」

ムウは一番知りたがっていた事を聞いた。

「僕が落としました」

「…そうか……（キラを怨むな、あれは俺自身の所為だ）」

「ムウ？」

マリューはムウの表情が強張ったことに気づき問いかけた。

「なんでもないさ、それよりお前等はこれからどうするんだ？」

「ラクス達と合流しようと思います」

「あのお姫様は今どこに？」

「宇宙にいます。連絡が取れ次第合流する予定です」

「そうか……」

翌日、ムウは動けるようになったのでクルー達に挨拶に向かった。

それから二日後。全世界に向けてデュランダルが政權放送が始まった。

演説用のテーブルの前に2人の男が立っていた。

「皆様、プラント最高評議会議長のギルバート＝デュランダルであります」

「私は前議長パトリック・ザラの息子のアスラン・ザラです」

「私と彼は皆様にお伝えしたい事があります」

「こちらの映像を御覧になって下さい。これは連合が行った破壊活動を我が軍の兵士が撮影した記録映像であります」

画面ではデストロイがベルリンを破壊しつくしてる映像が映し出された。

デストロイと戦っているのはインパルスとセイバーそしてフリーダ

ムが映っていた。

「これはユーラシア中央から西側地域の都市に向け連合の新型巨大兵器が進行したときの様子です」

この映像で世界中の人達が驚いていた。

『この巨大兵器は何の勧告もなしに突如攻撃を始め、逃げる間もない住民ごと焼き払ったのです。』

我々は多くの犠牲を出しながらも何とか撃破することができました。進攻したのは地球軍！そしてされたのは地球の都市です！

連合側の目的はザフトの支配地域からの開放ですが。これが開放と言えるのでしょうか！』

次に映し出された映像は地球軍に押さえつけられてる人々だった。

『たしかに我々の軍は連合のやり方に異を唱え、独立を果たそうとする人々を人道的な立場で支援してきました』

『あの連合の化け物が何もかも焼き払ったのよ！』

『敵は連合だ!』

『ザフトは助けてくれたぞ!』

映像は都市を焼かれた人達が映し出された。

『やつ等が敵なんだよ』

『コーディネータは化け物だと言うが、こんな事をした連合の方が化け物だ!』

『『『『『そうだ!』』』』』

「ステラがやった・・・」

「ステラはやらされたんだ、だからステラが気にする必要はないよ」

シンはステラを慰める。

「ステラ達を利用して自分達は安全なところで座ってるやつ等が悪い」

んだ」

「シン……」

『我々の平和を望む手を跳ね除け、我々と手を取り憎しみで戦う世界よりも対話による道を選んだユーラシア西側の人々を裏切り者として焼き払ったのです。！子供まで！』

『我々が手を取り合い平和の道を進む事に邪魔をする組織が存在する事を皆様はご存知でしょうか？』

今までデュランダル議長が語っていたが、次はアスランが語り始めた。

『その組織を語る前に皆様に二年前の大戦の原因を知ってほしいのです。』

二年前の大戦を引き起こした内の一人の人間、私の父、パトリック・ザラの最初の目的はプラントの自治権や貿易自由権を獲得すること！なぜプラントは自治権などを獲得しようと思ったか皆さんはご存知ですか？

反コーディネイターを訴える組織によるテロ事件が発生しても、自治権がなく、非武装が徹底されているプラント側には対抗手段はなく、コーディネイターの間には不満が高まったからです。

故に父とシーゲル・クラインは自治権や貿易自由権の獲得を訴え、「黄道同盟」を設立しました。

だけど、これに対し理事国は、黄道同盟の活動を圧制して、大西洋連邦宇宙軍、ユーラシア宇宙軍、東アジア共和国航空宇宙軍の合同軍の前身がプラント宙域に駐留さえ、プラントの地球へのエネルギー・工業製品供給地化を進めさせ、プラントに重いノルマを化すような政策を進めたのです！

さらにプラントのエネルギー生産部門が、ブルーコスモスのテロにより破壊されたおりも、評議会の理事会に一時的な輸出停止を申し入れに対し理事国側は拒否し、プラントは深刻なエネルギー危機になりました。

この扱いに不満を持ったプラント技術者が一斉にサポタージュをし、ても何の不思議がありません。

しかし、それにさえも理事国はモビルアーマー部隊でプラントを威嚇したのです』

『それから理事国はプラントの自治権や貿易自由権をことごとく拒否をして、プラントに進攻して血のバレンタインが起き二年前の泥沼の大戦です』

『皆さんはお気づきでしょう。プラントが自治権を得られていたら、二年前の大戦だけではなく血のバレンタインも起きませんでした！

そして今回の西側ユーラシアの地球軍の進攻。これにはある共通点があります。

それは戦わせようとして戦いが起こっている事です！』

『アスランが言ったとおり、二年前も今回も裏で手を引いている者たちが居ます。

彼等自分達の利益のためには戦えと！戦わないものは臆病だ！従わないものは裏切りだと！

そう叫んで常にわれ等に武器を持たせ敵を作り上げ、撃てと指し示めた者達、平和な世界にさせないとする者達、プラントの自治権を拒否をして、西側ユーラシアの惨劇も彼等の仕業なのは明らかです』

『コーディネータは間違った存在と忌み嫌うブルーコスモスを彼等が創り上げた事は皆さんはご存知でしょうか。

軍需産業複合体ロゴス、彼等こそが世界に戦争をもたらす真の敵です！』

『私達が願うのは戦争のない世界、二年前のような大戦の繰り返しにさせない為に、それを阻害する者、

世界の真の敵ロゴスを討つ事をここに宣言します！』

その声明は確実に戦争にて疲弊しきった人々の心に響いた。二年前の大戦の原因と今回の惨劇の原因であるロゴスを討てば戦争は終わると民間人の心は確実に傾いた。

『それと、皆様に伝えたい事があります。この映像を見てください』

アスランの言葉の後に映ったのはアークエンジェルだった。

『私も二年前にこの艦に乗り大戦をとめました。しかし彼等はオーブの代表であるカガリ、ユラ、アスハ代表を誘拐し、今回のロゴスが引き起こし戦場に彼等は出てきて、ザフト軍と地球軍、オーブ軍にも攻撃を仕掛けました』

映像に映ったのはフリーダムとアークエンジェルが両軍に攻撃をしていた映像だった。

『フリーダムに積んでいるエンジンは核エンジンです。それだけでユニウス条約に引っかかるのに彼等は戦場で両軍に攻撃しました。』

もはや彼等は戦場に出てきて好き勝手暴れる核エンジンで武装したテロ組織です。

この映像を見てください』

映し出されたのはデストロイと戦っているMS。

『この巨大MSに乗っていたのはロゴスによって薬で強化され、洗脳され、記憶を好い様に操られた16歳ぐらいの子供でした。そのパイロットはロゴスの所為で生まれた被害者。我々はパイロットを救おうとしました。この時はパイロットも落ち着きこの惨劇を止められると思いましたがフリーダムがこのパイロットの仲間を倒したことでパイロットは暴走したんです』

インパルスが動きが止まったデストロイに近づこうとした時にフリーダムがウィンドムを落とした。
その事でデストロイは暴れたのは明らかだった。

『我々が対話で解決しようとしたのに彼等は人の言う事は聞かず自分勝手に戦場で暴れました。
私のかつての仲間、彼等は二年前の大戦を止めた驕りから自分達が正しいと勘違いしています。
もはや彼等が振りまく身勝手な正義感などは迷惑以外何物でもない！私達はロゴスだけでなく自分勝手な正義をもつ彼等を討つ事を此処に宣言いたします！』

アスランの言葉にキラ達、アークエンジェル側だけじゃなく、シン達まで驚いた。

14話 世界の敵（後書き）

アスランが主人公みたいだと思うのは気のせいでしょうか？

前書きどおり一度消えた回なのでこれから少しずつこの回を修正していきます。

誤字、脱字、おかしい表現、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

15話 違う道（前書き）

あけましておめでとーいーいねーます。

15話 違う道

インパルスと二機のグフが一機のザクにd同時にビームを放つがザクはあらかじめ呼んだように三機の攻撃を避ける。

ザクはビームを避けた後、すぐさまビームトマホークを取り出し、インパルスに投擲した。

インパルスは避けようとしたが、回避ポイントにビームが放たれ撃沈。

一機のグフは接近戦に持ち込もうと間合いをつめようとしたが、ザクも接近する為にバーニアを吹かせグフに接近する。

グフはその行動が読めなかったのか、一瞬動きが鈍くなり、その隙にザクは体当たりをかました。

グフは体当たりで倒れ、その隙にコックピットにビームが放たれ撃沈した。

残ったグフは距離を取ろうとしたがザクの射撃にあえなく撃沈した。

「くっそ、三対一でこれかよ?」

インパルスから降りたシンが悪態を吐く。

「全くだ、こっちの射撃は全部避けられるし」

グフから降りたアウルもシンに乗る。

もう一機のグフからハイネが下りて。

「そう言つなよ、お前等。と言いたいが。インパルスとグフ二機をザクで倒されるのはへこむぜ」

三人はザクから降りた刹那に視線を向けた。

「機体がお前らの反応に追いついてないだけだ。実際に三人とも俺の攻撃に反応できてたぞ」

「それでもへこむぞ。三日間やって一回も勝てないんだからな」

四人は模擬戦をしていた。

無論、刹那が乗ったザクのビームライフルはペイント弾だ。

デュランダル議長とアスランの発表から三日経った。

アウル達は検査をして、アウルはシンとハイネの、ステラはルナマリアの監視あれば出歩いて言いと議長が許可を出した。最も迂闊な動きを見せたら射殺する条件付で。

議長が四日後にシン達に新型を与えると云ったので、その間に刹那と模擬戦をしていた。

最初はシンとハイネが刹那に頼んだが、アウルも「俺にもやらせてくれ」と言って三対一の模擬戦を繰り返している。

アウルはステイングを助けたいと言う気持ちがある為、訓練をしたいとハイネ達に頼んだ。

周りは反対したが、ハイネがフェイス権限を使い。これで問題が起きたら全責任を請け負うからと言って無理やり周りの連中を納得させた。

何より、議長の解説の後に対ロゴス同盟ができて、何割かの連合の兵もプラント側についた。

刹那達は模擬戦が終わった後、ニュースでロゴスやプラントに関しての刹那達の目に留まった。

『ザラ前議長の命令でNジャマーの所為で地球はエネルギー不足になった事はどう思われますか？』

『Nジャマーではなく、核ミサイルを撃たれていたら我々は生きていなかったでしょう』

『確かにそうですが、実際にNジャマーで被害は出ていますよ？』

『当時のコーディネータ達が受けた仕打ちも同じようなものだ
彼等もブルーコスモスロゴスの戦争システムに——』

刹那 S i d e

（ナチュラルにエイプリルクライシスの事を弁護させるか。
デュランダルがD・プランを強制的に行うなら止めるだけだが……
すでに原作とかけ離れてるし。どう出ようか）

俺はテレビを見ながらこれからの事を考えた。

原作だとアークエンジェルを落とすにいくのだが、議長は混乱して足並みが崩れた連合を叩くと言った。

シン達に新型を授与する為にこの基地で待機している。

ジブリールは何時でもオーブに逃げれるからヘブンズベースでしとめられない。

それに、レクイエムの事をどう話すか・・・

「どうした刹那、難しい顔をして？」

「いや、ロゴスを倒した後はどうするのかと考えていたんだ」

「倒した後か・・・」

シンが珍しく、深く考えていた。

「俺は、どうすっかな？」

「アウルは普通の暮らしはしたくないのか？」

「俺は、その普通の暮らしがわかんねんだよ」

アウルや他のエクステンデットは物心ついた時から訓練などをしてきた為か、普通という物が分からないのは無理はないか。

「俺は軍に残る。ロゴスがなくなっても完全に戦争が終わるわけじゃないだろうし」

「……」

俺とアウルは言葉を失った。

「どうしたんだ？」

「……いや」

「なんというか、なあ……」

俺とアウルはお互いの顔を見て答えた。

「シンがそこまで深く考えてるなんて・・・」

「シンは俺と同じで、考えるのが苦手なタイプかと思ったから」

「俺だって考えるときぐらいあるぞ。刹那やアスラン、それにハイネを見ていたら俺も少しは先のことを考えないと思って」

「そうか、いい傾向だと思うぞ」

「ありがとうございます」

「それより、もう一戦だ」

「勘弁してくれよ、アウル」

俺は、アウルの申し出を断って自室に戻った。

翌日、シン達と一緒に司令部に向かった。

司令部に着いくと、将校にハンガーに案内された。

そこには、四機の新型MSの前にデュランダル議長が立っていた。

「やあ、お待たせしたね。君達の新型MSだ」

（デスティニーが二機にインフィニットジャスティス！）

「先に君達の新しいMSを紹介しよう。同型機のデスティニーはシンとハイネ用にカスタマズイズされた君達の専用機だ。そして、レジェンドはレイ、君の機体だ」

議長がデスティニーとレジェンドに目を向けた。

「左のデスティニーはシンの、そして右がハイネのだ」

アスランはジャスティスを見て議長に問いただした。

「議長！ このジャスティスも同時期に作られたのですか？」

「いや、残念ながらこの機体はクライン派がデスティニーとレジェンドのデータを持ち去り、独自に作った機体だ」

「クライン派が!？」

シンはクライン派という言葉に少し驚いた。

「クライン派を調べていたら、この機体で作られたファクトリーを見つけてね。

MS部隊を向かわせたら、この機体があつたのだよ。他にもフリーダムとグフの後継機も作られていた」

「フリーダムまで!」

「グフの後継機となるドムトルーパーは完成していて、そのドムの攻撃を受け、応戦に出たがフリーダムは破壊できず撤収されたが、ジャスティスだけはどうか奪取出来たのだ」

「…そうですか(ラクスはこんな物まで作らせたのか)」

「ジャスティスを調べていたら、デステイニーのデータが使われていたのが分かってね」

「クライン派は新型のMSも作れる資金があるのですか?」

シンが議長に質問をした。

「クライン派は独自に武装組織を創っていた。おそらく地球軍とプラントにスパイを紛れ込ませお互いの情報を流しているんだろう」

「ミーマの正体を明かさなかったのはそれが理由ですか？」

俺は以前の発表にミーマの正体を明かさなかった事を疑問に思った。ラクスがしてきた事はテロ行為を暴露すれば彼女の動きを制限できると思った。

「プラントには思っていた以上にクライン派とラクスを支持している人間が多くてね

ミーマが偽者だと言ったら、彼らはプラントの市民を煽ってミーマに悪感情をもたれる可能性があるから、まだ発表はしない」

「そうですね、先手を打たないと本物が仕掛けるかもしれませんよ？」

「分かっているが、タイミングが難しくてね」

「あ、あの。ミーマって誰のことですか？」

この場で、ミアがラクスの偽者だと知らないシンが驚いた。

「シン、プラントが核を打たれた後に市民を宥めたのはラクスの偽者だよ」

「気づいてなかったのか？」

「私はてっきり、君たちが説明したと思ったが」

アスランが説明をし、ハインは呆れ。議長は知らなかったことに驚いた。

「説明はしてませんでしたからね」

「俺だけ知らなかったのか？」

「ミネルバクルーも知らないぞ。教えても混乱を招くだけだからな」

レイがシンに言った。

「それにな、俺がミィアを使ってくれといったんだ」

「アスランが!？」

「ああ、あの場はラクスしか宥められなかったし。本人はオーブで隠居生活をしていたからな」

「……そうだったんですか」

「言い訳はせんよ、我ながら情けない手段しか持っていなかったからね」

「いえ、議長を攻めてるわけじゃありません。ただ。本物のラクスにむかついただけですから」

「その気持ちは分かるぞ、シン」

ハインがシンの両肩を叩いて言う。

「次の戦闘には出てくる可能性がある」

「ロゴスを討つ邪魔をしたのが本物だと世論に？」

「ああ」

「俺も。その案に乗ったんだ」

「アスランが？」

「ああ、ラクスが今まで何もしなかったからな。彼女はあのまま何もしなければよかったんだ
それなに、この戦争に介入し始めた。それがテロ行為だとも気づかずにな」

「なるほど。それで、議長はロゴスを討った後はどうするんです？」

俺は一番聞きたかったことを質問をした。

「デステイニー・プランという計画を考えていた」

「考えていた？」

「ああ、君やシンを見たらまだ人類はやり直せると思ってね
D・プランは失業した人達や戦火に巻き込まれ未来に希望を者達に
与えようと思ってるね」

「その、D・プラントは？」

「遺伝子工学による優生学的社会システムだ」

「優生学？」

「簡単に言えば品種改良。競馬の事だ」

俺は思ったことを口にした。

「刹那。せめて人間に関連した事を言ってくれ」

議長は苦笑した。ハインは分かりやすく説明を始めた。

「つまりだ、両親の片方が理系の天才で、もう片方が文系の天才なら生まれてくる子供は完璧超人って事だ」

「ついでにジジイが格闘家でババアが日舞の達人なら隙はない」

「刹那は優生学を嫌っているのか？」

アスランは少し困惑した顔で聞いて、ハイネは顔をそらし笑いを堪えている。

「俺はナチュラルだぞ。それに、人間は進化する生き物だ。宇宙に出れば適応する為に人間は変革するはずだ」

ニュータイプや刹那がイノベーターに変革したように人間は進化をする。

「簡単に言えば、D・プランは遺伝子をしらべ、自分に適切な職業に就くプランだよ」

「なるほど」

シンは納得したが、ハイネは

「それより、俺は刹那がナチュラルだって事に驚いたぞ」

と言って驚いた。

「だから、D・プランを見直すことにしたのだよ」

「最初は強制するつもりだったんですか？」

「……ああ。その時は君をどうしてた？」

「自分勝手ながら、あなたを撃っていたでしょうね。
たとえその後、裁かれても」

「そうか…、安心したまえ。先ほど言った通り、君とシンのおかげ
で見直すことにしたんだ」

「刹那は兎も角、俺ですか？」

「そうだ、君はステラという子と分かり合えた。お互いは敵同士で
殺し合いをした中だというのに。

私は気づいたんだ、人は自ら変われると」

「議長…」

「生まれたときから、すべてが決まるD・プランは間違っている気がする。」

違う道を探そうと思っている」

「力ずくでロゴスを排除した後だと難しいですよ」

「わかっている」

議長も自分が矛盾してる事はわかっているだろう

ロゴスを倒した後で分かり合えるなどと言っても説得力はなくなる。しかし、ロゴスをほっとく訳にはいかないのも事実だ。

「俺も協力しますよ。議長」

アスランはそう言った。

「俺も出来ることから手伝いますよ」

「俺はギルについていくだけです」

ハインもレイもアスランに続いた。

「戦争がない世界を目指すなら俺も手伝います」

シンは強い意志を感じさせる目で議長に顔を向けた。

「俺は今までの戦闘で相手の兵士を殺してきましたから、せめて、抑止力として生きますよ」

「君を雇って、相手を殺させたのは私だ。君が気に病む必要はない」

「それでも、実行したのは俺だ。俺の目的も戦争のない世界ですから、

ロゴスを討てば大きな戦争はなくなりますが、小さな紛争は続くだろうし。

それをとめる為の抑止力として存在し続けますよ。

（この世界で生きていく事になるし）」

「それより、ヘブンスベースにはいつ攻めるんですか？」

場の空気が重くなったのか、ハインは話をヘブンスベースに戻した。

「三日後だ。最初に降伏勧告を持ちかけるが。彼らはそれをけるだろう」

アスランは議長に質問をした。

「俺のオーライザは？」

「持ってきている」

「パイロットはどうするんだ？」

シンはオーライザーのパイロットをどうするか聞いてきた。

「アウルに頼もうと思う。構いませんか？」

「ああ、この戦いは連合ではなくロゴスを撃つ戦いだ。ナチュラルとコーディネータが力を合わせると言うなら許可を出すさ」

「ありがとうございます」

その後、シン達は自分達の機体を見に行った。

ハインのデスティニーはオレンジ色だった。他の機体は原作通りの性能だったのは言うまでもないか。

俺はミネルバに戻り、部屋で待機してるアウルにヘブンスベース戦だけでもオーライザーのパイロットになってくれと頼んだ。

「その、オーライザーってのは刹那の機体の支援機なのか？」

「ああ、ダブルオーライザーの性能を100%使うにはパイロットが必要なんだ」

オーライザーを調べたところ、トランザムライザーを使うにはオーライザーのコックピットで調整しないといけない。
以前にダブルオーから出来ると思ったが、ダブルオーのコックピットでは完全に制御が出来ないようだ。

「……」

「強くなりたいなら、あの支援機に乗るのが一番だぞ」

アウルはその言葉に反応した。

「どういつ事だよ？」

アウルとはウマが合う所為か、よく話す。だから俺は一種の賭けに出た。

「これは、誰にも言わないでくれよ？」

「…何だよ、真剣な顔で」

アウルは少し戸惑っていた。

「まじめな話だ」

俺が真剣だという事が伝わったのか、アウルも真剣な顔になった。

「わかったよ、誰にも言わねえよ」

俺はイノベーターの目を発言させた。

「そ、その目!？」

「あの機体は、ダブルオーが出す緑の粒子は人の遺伝子レベルで眠ってる能力を発現を促す力があるんだよ」

「刹那がやたら強いのはその所為か？」

「ああ、あの機体は俺のバイオメトリクスがないと動かせないが、オーライザーは別だ」

「何で、俺に言うだよ？」

「お前とは話が合うし、何より同じ青だろ？」

「どっちが本音なんだよ？」

「前者だ。この事は誰にも言わないでくれよ？」

「わかった」

この後は、アウルとハンガーに行きダブルオーとオーライザーの調整を行った。

ヘブンスベース戦での期間はすべて機体の調整や馴らし使ったが、シンはルナマリアに少しはステラに構ってあげなさいと言われ、ルナマリアに叱られた。

15話 違う道（後書き）

誤字、脱字等の報告があれば直ぐに修正します。

何分私は頭があれなので脱字や誤字まど他の作品より多いですが、温かい目で見てくださいと助かります。

16話 ヘブンスベース（前書き）

今回はダブルオーライザーに追加武装があります。

皆様の御蔭で総合評価が2300ポイントを突破しました。
ありがとうございます。

本来ならもう少し早く投稿する予定でしたが、パソコンかネットの回線が恐ろしく遅かった為なのか、編集したした時、一万字近くあったのに2千字まで減っていました。

その後は投稿をやめようと頭によぎるぐらいショックを受けました。

停電のときは自然災害だと思って、多少気にしてませんでした、
今回は流石にショックでした。

以前できた内容は同じですけど、表現が大分違っていきます。

16話 ヘブンスベース

ザフトの軍隊がヘブンスベースの前に艦隊を展開する。

施設内に立て籠もるロゴスのメンバーに最後通告を言い渡していた。

そして、ミネルバのMSデッキでは出撃の準備が整えられていく。
殆んどの間人間がロゴスのメンバーは降伏しないだろうというのが大方の見解だと予想した。

「私も、戦いたい」

刹那達がMSの搭乗する前にステラが突然、シン達に頼んだ。

「バーカ、お前が戦う必要はないんだよ。スティングは俺が助け出すんだからな。」

（アイツに初めて貸しを作れるし）」

「アウル！ 何もそんな風に言わなくてもいいじゃない！」

アウルの言い方にルナマリアが怒る。

「ステラには丁度いいんだよ」

「ステラは女の子なのよ。 もう少し優しくしなさいよ」

「大丈夫だよステラ。俺がステラの分も戦うから」

「シン」

「ルナって、煩い小姑タイプなんだな」

「なんですって〜?」

二人のケンカを他所に、シンはステラの頭を撫でる。

「これから大規模な戦場になるのに余裕だな。 あいつ等は」

ハイネが苦笑しながら刹那に言う。

「緊張して、実力を出せないよりはいいだろう。 あいつ等はこんな大規模な戦場に出た事ないから」

「まあな、レイとアスランは落ちつてるし。お前は何時ものように余裕か」

「そうでもないぞ。これでも緊張はしてるぞ」

「そうは見えないぜ」

「そうだな、刹那はあまり顔に出さないからな」

アスランもハイネ達の会話に割り込んだ。

「アスランとハイネは前大戦の経験があるからいいが、俺はないんだよ」

「それでも、頼りにしてるぜ。ダブルオーライザーの性能を」

新型を与えられてから、ダブルオーライザーでハイネ達と模擬戦をした。

トランザムを使わなくても、ダブルオーライザーの圧倒だった。もっとも新型の機体に慣れていなかったのが原因だが。

「お前等いい加減にしとけ。さっさと機体で待機するぞ」

「アウルが」

「アイヨ。先に行くぜ」

ルナおばちゃん」

「お、おば!？」

刹那とアスランとレイは自分の機体に搭乗した。

そして、アウルも逃げるようにオーライザーに向かった。

「アウル!!」

ルナマリアは叫びながらアウルを睨んだ。

「ステラ、行ってくるよ」

「うん」

「すっげー差だな」

ハインは呆れながら今のやり取りに苦笑をした。

「ステラは此处で待っててちょうだい」

「うん。ルナも気おつけて」

「大丈夫よ、ステラ」

シン達はデッキに向かって待機した。

パイロット達と違い、ミネルバのブリッジは重い空気が漂っていた。ディランダル議長が見ている先にはモニターにが地球連合の基地、ヘブンズベースが映っていた。

この基地に立て籠もっている、ロゴスに要請したの回答期限まで残り3時間。

刹那はブリッジに回線を開いた。

『議長、俺達を外で待機させてください』

「どうした？」

『嫌な感じがしたんです。恐らく彼等は戦闘の準備を終えたと思います。』

後手に回る前に、俺たちだけでも外で待機をしたほうが懸命だと思います』

「わかった。許可を出そう」

「いいんですか？」

グラデイス艦長は議長に問いかけた。

「かまわんよ。それに、相手はロゴスだ。奇襲を仕掛ける可能性のほうが高い。

新型はエネルギーの補給は必要はないだろう。インパルスだけをデツキに待機させ、残りを外に」

「わかりました。コンディションレッド発令。インパルス以外のMSは発進し、外で待機を」

「アスラン・ザラ、ジャスティス、出るぞ！」

「レイ・ザ・バレル、レジェンド、発進する！」

「ハイネ・ヴェステンフルス、デステイニー、出るぜ！」

「シン・アスカ、デステイニー、いきます！」

「刹那・F・セイエイ、ダブルオーガンダム、出るぞ！」

「アウル・ニーダ、オーライザー、出るよ！」

ミネルバから主力MSが発進された。

「ミネルバからMSが発進されました！」

「なんだと！？先手をつたれたか！こちらも攻撃を開始しろ！」

ジブリールは攻撃開始発令をだした。

「オーライザー、ドッキングモード！」

ダブルオーとオーライザーがドッキング終わった瞬間に、ヘブンスベース基地からミサイルが放たれた。

『各機、ミサイルを迎撃しろ！』

『了解！』

『『わかった！』』

刹那達は、ミサイルを迎撃しているが、大多数な為、全てを落とせなかった。

着弾を逃れたミサイルは、幾つかの艦を沈めた。

『あつぶね、いきなり撃ってきやがった』

『元連合の兵士の台詞か？』

ハインは、苦笑しながらアウルに通信した。

『俺は俺だ。それに、あいつ等の俺らを見る目が元から気に食わなかったし』

アウル達、エクステンデットはMSの消耗品の目で見られていた。

ミサイルを撃ち終わった、ヘブンスベース基地からはMSやMAが次々発進した。

『やはり、戦闘を準備をしていたか。全軍に通達。直ちに攻撃を開始』

デュランダルの通信でザフト側も次々とMSが発進される。

シンのデステイニーは高速で飛翔し、敵MSをアロンドイトで、真つ二つにしていく。

ハインとレイはビーム射撃で正確に敵MSに当て倒していく。

刹那はGNソード？で射撃や接近戦で対処していく、アウルはオーライザーに新しく新装備のGNビットやダブルオーライザーの両肩にあるバインダーのビーム砲で敵を倒していく。

『ステイングはどの機体に乗ってるんだ？』

『落ち着けアウル、おそらくエース機だから、直ぐにわかる』

『くっそ、雑魚ばかり！！』

その中で、アスランは懐かしい機体に再開した。

「バスター！？いや少し違うか」

「コーディネーターが！！」

ヴェルデバスターは二丁のビームライフルでインフィニットジャステイスを狙ったが、

ジャステイスはそれを全て避けバスターに接近した。

「援護される前に、叩く！！」

バスターの目の前に接近したジャステイスは、
両足のビームブレイドでバスターの両腕を切断した。

「くっそ、ミューデイの仇を取れないで！！」

ジャステイスはそのまま、他の機体を落としていく。

「すごいですよ、彼等。たったの五機であれだけのMSを押してま
すよー！！」

ミネルバブリッジでは五機の活躍に目を奪われていた。

「議長、そろそろ降下部隊もやってきます」

「そうだな、これで我々も優位になる」

そんな事を言っていたら、メイリンからいやな知らせが来た。

「地上から高熱源が!!」

すると、目の前に有り得ない光景が映し出された。

ヘブンスベース基地から大きな光が放たれた。

「なんだ!？」

「降下部隊は?」

他の議員が啞然としてる中、デュランダルはすぐさまメイリンに降下部隊のことを聞いた。

「そんな!？ 降下部隊が全滅です!!」

「何と言つもの、議長!!」

「安心した前、あれは罠のダミーだ。彼等が増援の降下部隊を無視すとは思えなかったからね。

全軍に通達、本物の降下部隊は時期に降下する。それが奇襲になるはずだ。

ロゴス達を地上に目をむけさせる」

その言葉で、ザフト側のMS達は戦意を取り戻した。

「ザフト降下部隊を全滅!!」

「くくく、デュランダル。これでお前達を終わりだ。デストロイを発進させる!!」

ジブリールはすぐさま次の対策に出た。

「これで、デュランダルを討てれば」

「討てますよ。彼ら死に物狂いでデストロイを相手をするでしょう。だから我々の勝ちです!!」

ジブリールは強気に他のメンバーに言い放つ。

へブンズベース基地からは五機のデストロイが出てきた。

「デストロイか!!」

「あの、どこかにステイングが？」

「どの機体に乗ってるんだ？」

シンの言葉に刹那は自身をもつて。

「左から二番目の奴だ！！」

「「「！！」」」

「わかるのか？」

アスランは刹那の自信に驚いたが、アウルはカオスが使っていた、通信チャンネルの周波数を使ってデストロイに呼びかけた。

『オレだ、ステイング！！』

『死ぬ前に、自分の名前を晒しに来たのかよ？ コーディネータ！
！』

『ステイング！』

「おいおい、あたりかよ」

ハイネ達もアウル達の通信を聞いて驚いた。

「あの機体は俺達がやる。お前等は他の機体を」

「わかった！ 丁度同じ数だ。一人一機ずつだ」

シン達は自分達がデストロイに向かっていった。

二機のデステイニーは赤い色の翼とオレンジの色の翼を展開させ、その機動力で接近してアロндаイトでデストロイを真つ二つした。

ジャステイスは先程のバスターと同じくビームブレイドでデストロイを破壊した。

「あの機体には接近戦がいいが、レジェンドでは分が悪いが」

レジェンドはデストロイの足元に接近して、ビームジャベリンで足を切り落とし、

コックピットにジャベリンを投擲して破壊した。

刹那達は通信でステイングに呼びかけるが。

『何やってるんだよ、ステイング！！ 俺だよ、アウルだ！！』

『しらねえよ、そんな奴！！』

デストロイはスーパースキュラでダブルオーライザーを狙うが、アッサリと避けられる。

『記憶を弄られているの!?!』

『アウル、デストロイの武装を破壊するぞ。 助けるのはその後のほうがいい』

『それしかねえか』

ダブルオーライザーはGNソード?でビームサーベルを発生させ、デストロイに接近して右腕を斬り落とした。

デストロイはもう片方の腕をドラグーンとして放った、サーベルで斬られ破壊される。

「くっそつたれがー!!」

ダブルオーライザーはすかさず、デストロイの両足を斬りおとした。

デストロイはそのまま倒れた。

スティングは倒れた衝撃で気絶した為、アウルが通信をしても反応しなかった。

ダブルオーライザーはデストロイに近づこうとするが、連合のMSやMAが次々と出て来た為スティングの救出は後回しにした。

『っち、次から次へと。行けよ!!』

ダブルオーライザーからGNビットが放たれ、MSを次々破壊していく。

「あの、化け物みたいなMSをアッサリと。凄いですよ新型!!」

ミネルブリッジのアーサーは賞賛していたが、メイリンからMSが接近したと報告がきた。

「MS接近! この識別はストライク!？」

「何だと!？」

メイリンの報告にブリッジの人達は驚いた。

「アスハ代表か!？」

「わかりません。光学映像です!!」

映像に映し出されていたのは黒い、漆黒のストライクだった。

しかも、黒いストライクは次々とザフトのMSを破壊していく。

「メイリン、インパルスとレジェンドを呼び戻して!!」

艦長は黒いストライクの動きが只者じゃないと悟り、前線に出ているインパルスとレジェンドを呼びましょう指示をだす。

「前線に戦力を絞ったのが仇となったか」

「そうですね、しかしデストロイ相手に出し惜しみは出来ないかと・
・・・」

「わかっている」

「黒いストライク接近してきます!!」

「イゾルデ、トリスタンでけん制を。インパルスとレジェンドが来るまで持ちこたえるのよ」

ストライクノワールはザフト軍のMSを次々と落とし、ミネルバに接近する。

「無謀だな」

ストライクノワールはリニアガンでミネルバ沈めようとしたが、

ミネルバの牽制で難しいと考え、フラガラッハ3ビームブレードで沈めることしたが、

インパルスから放たれたビームで中断した。

「Gだと!？」

「これ以上、好き勝手やらせないわよ!!」

インパルスがビームを放つが、ストライクノワールは余裕で避ける。

「この程度!!」

ストライクノワールは右手にビームブレードを左手にビームライフ
ルショータイを握り、
インパルスに接近していく。

ビームライフルショータイでインパルスを牽制し、インパルスの目
の前まで接近したて、
ビームブレードで真つ二つにしようとしたが、インパルスは何とか
避け、左腕の切断だけですんだ。

「調子にのらないでよ!!」

ルナマリアの声と同時にインパルスはストライクノワールに蹴りい
れて後退させた。

「ちい、やる!!」

インパルスは何とか距離を取りながら、ビームライフルだけで対応

しようとするが、
腕の差か、段々と追い詰められ。

「これで、終わりだ!!」

インパルスは目の前まで接近され、バルカン砲で対抗するが、PS
装甲には意味がなく、
そのまま落とされるしかなかったが、ミネルバの方角からストライ
クノワールに目掛け赤いビームが放たれた。

「増援!？」

「セイバー!？ 誰が乗ってるの!？」

「ルナ!!」

「ステラ!？」

「全く、嫌な大人だな私も。 あんな少女を戦場に行かす事を許可を
出すなんて」

ミネルバブリッジのデュランダルは愚痴をこぼす。

「仕方ないと言いたいですね」

インパルスが追い詰められてるとき、MSデッキからステラが通信で助けに行かせて欲しいと頼んできた。

断らなければいけなかったが、インパルスが追い詰められてる今は、そんな事を言っていられなかった事もあるが、ステラが真剣な表情になっていた為、議長は許可をだした。

「ナチュラルである彼女がコーディネーターである子を助けたいか・
・・・、
時代は変わるだろうか？」

デュランダルは誰にも聞こえないように呟いた。

セイバーに搭乗していたパイロットがステラだとわかったルナマリ
アは驚きを隠せずにいられなかった。

『なんで、ステラが!?!』

『シンはステラを守るって言うてくれた。だから今度はステラがシ
ンの友達のルナを守る』

『ステラ・……。よっし、二人であの黒いの落とすわよ!』

『うん!』

インパルスとセイバーは同時にストライクノワールに攻撃を始めた。

「つく!!」

インパルスのビームライフルで牽制し、セイバーのアムフォルタスでストライクノワールを落とそうとするが、ストライクノワールは何とか避ける。

しかし、刻一刻と追い詰められていく。

「一か八か玉砕覚悟で!」

ストライクノワールはインパルスに接近しようとしたが。

ステラはMAに変形して、ストライクノワールに接近した。

ストライクノワールは一瞬動きが鈍った。その時、前線の方角からビームが放たれストライクノワールに命中した。

「あれはレジエンド!」

「遅くなつてすまない。前線のMSに足止めを喰らった」

「小さいネオ」

「だから俺は小さいネオじゃない。レイだ。それよりなんで彼女がセイバーに?」

ミネルバから通信で、レジェンドは後方を守るように命令を受けた。それと、同時にステラがセイバーに乗った経緯もきいた。

「ストライクノワール撃沈されました!!」

「なんだと!?!」

オペレータの言葉に、ヘブンスベースの司令室はざわつき始めた。

「ジブリール、どうするんだ?」

「奇襲も失敗して、デストロイも全てやられた」

「!!--これは、ザフトの降下部隊が大気圏に近づいています!!--」

「!!--何だと!?!!--」

「馬鹿な!?! なぜ.....まさかさっきの降下部隊は!!--」

ジブリールが降下部隊が!!--だと気づいたが。

「ニーベルングのチャージは?」

「25%です!!」

その言葉に、司令室は慌て始めた。

「この熱源は・・・アークエンジェルです!」

「何!?!」

刹那達が敵MSを落としていく時、味方MSの反応が一気に10機口ロストした。

『なんだ!?!』

そして、味方のMSがビームに貫かれ落とされる。それを視認した刹那は、ビームが放たれた方向を見た。

そこには、アークエンジェルと二機のフリーダムの姿があった。

「フリーダム!! (ストライクフリーダムは兎も角、誰がフリーダムに?)」

『私はラクス・クラインです。ザフト軍、地球軍は直ちに戦闘を辞

め、撤退してください』

アークエンジェルのオープンチャンネルからラクス・クラインが撤退するよう呼びかける。

アークエンジェルからは

『刹那。なんだよ、あれは？』

『俺が、聞きたい』

『シン、ハイネ此処を頼む。俺はアレ《ラクス》に用がある。刹那はあの新型のフリーダムを頼む！』

アスランが刹那達に通信をおくる。

『わかった。ここは任せな！』

『了解！』

通信でハイネとシンは了承した。

『いくぞ、アウル』

『オーライ！ 全くスティングを助けようとした時にきやがって』
ダブルオーライザーとジャスティスがアークエンジェルに向かう。

ダブルオーライザーはGNソード？をストライクフリーダムに向け、ビームを撃つ。

ストライクフリーダムはそれを避け、オープンチャンネルで呼びかける。

『アナタはラクスと言葉を聞かなかったんですか？』

『刹那、キラの言う事を聞く必要はないぞ』

『わかってる』

アスランは刹那にキラ達の言葉を無視しろと通信を送る。

『人の話は聞くもんだぞ』

フリーダムが、ジャスティスの前に出て、バラエーナやビームライフルを撃って牽制するが。

「誰が乗ってるか知らないが」

アスランは、それを避け、フリーダムの上に移動してかかとを落とし、フリーダムを海に叩き落とした。

『アスラン！？』

ストライクフリーダムはジャスティスを止め様とするが。

『貴様の相手はこっちだ!!』

ダブルオーライザーに邪魔される。

『くっそ!! この前とはスピードが違う!?!』

キラはアクセルを踏み、ストライクフリーダムを高速で飛翔しながらビームライフルを撃つ。

『アウル、口を閉じてろ』

刹那もダブルオーライザーを最大加速でストライクフリーダムの攻撃を避ける。

「何て速さ!! こっちの攻撃が当たらない?」

ストライクフリーダムが撃つビームを避けながら、接近するダブルオーライザーにキラは。

「なんで、当たらない?」

キラは焦り始めていた。新しい機体、ストライクフリーダムならミネルバのMSを止められると思っていた。

しかし、ダブルオーライザーには自分の攻撃が当たらない。

「くうふうふう」

アウルはダブルオーライザーのかかるGに耐えていたが。

「そこだー!!」

ストライクフリーダムはダブルオーライザーの動きを見切った上で、ビームを撃つが、

ダブルオーライザーは急停止して、ビームを避けた。

「うんぐ! (すこしは手加減しろ!)」

「そんな!」

「今度はこっちからの攻撃だ!」

ダブルオーライザーは最大加速で飛翔したまま、GNソード?をストライクフリーダムに向けビームを撃つ。

「くう、避けられないわけじゃない」

ストライクフリーダムは何とか避ける。

「さすがに、ライフルで仕留めるのは難しいか。ならトランザムー!!」

トランザムライザーになり、ストライクフリーダムに接近する。

「赤くなつた！ けど」

トランザムライザーは一瞬でストライクフリーダムの目の前まで接近した時、

ストライクフリーダムの腹部に内蔵された大出力ビーム砲、カリデウスを撃つが、

トランザムライザーは量子化して消えた。

「へ！？ ！！後ろ！！」

キラの反応速度と勘でトランザムライザーの背後からの攻撃を何とか避けた。

「はぁ・・・はぁ・・・今は・・・？」

キラはかつて、ストライクに乗り始めたときの事を思い出した。

「殺される・・・こままじゃあ・・・」

かつて、ストライクに乗りはじめて、初めて味わった恐怖が今、キラの脳裏に蘇る。

『「こちらはアスラン・ザラだ。 ラクスどういふつもりだ？」』

アスランはアークエンジェルにいるラクスに通信で問い掛けた。

『アスラン。今すぐザフト軍に撤退するように伝えてください。
この戦いは二年前と同じです』

『ふざけているのか？ 二年前は両軍ともお互いを消しあつたから、俺達が介入して収まった。
だが、今回はロゴスが目的だ』

『力で制しても、待っているのは争いです』

『なら、今お前達がやっている事はナンだ？ 少なくともロゴスは自分達のエゴで戦争を食い物にしている。そんな奴らを逃がせと言うのか？』

アスランはラクスの行動に腹を立てていた。

『しかし、このままではデュランダル議長が支配する世界になってしまいます』

『それを防ぐために、ロゴスを見逃せと？』

『違います、私はただ世界を　『いい加減にしろ！！　お前はそうやって自分の意見だけを押し付ける。そのうえ相手の意見は聞かず一方的に力で抑えつけてる事に気づいているのか？』

なんだ俺が乗っているこの機体は？ キラが乗っている機体は？
お前は自分が望む世界にならないから力で自分が思うような世界を
変えるつもりか？」

アスランの勢いに何もいえなくなったラクス。

アークエンジェルのブリッジは静まり返った。

『これ以上、お前達を逃すわけに行かない』

そう言った瞬間、ヘブンスベース基地から大きな爆発が起きた。

『なんだ！？』

ジャスティスに海に叩き落されたフリーダムは海中を出た。

「くっそー、アスランの奴」

その時、目に映ったの四肢がなくなったデストロイだった。

デストロイは何とか飛んでいた。 周りのザフトのMSは何もしなかったため。

「あの機体はステラが乗らされた。 それにザフトは何をやってる

んだ」

ムウ・ラ・フラガはザフトの行動が理解できず、そのままフルバーストでデストロイを沈めた。

「とつとと落とせばいいものを」

トランザムライザーがストライクフリーダムに止めを誘うとした時、声が聞こえた。

（あの機体はステラが乗らされた。それにザフトは何をやってるんだ）

その声に不審に思い、アウルはそこに目を向けると、ステイングが乗っていたデストロイがフリーダムに撃たれ爆発した。

「ス・ステイング！！！」

「誰だ？」

ザフト軍にはハイネ達のフェイス権限であのデストロイに手を出すなどと言った為、

デストロイがザフトによって落とされる心配はなかった。

デストロイが攻撃を再開してもデスティニーのビームシールドで完

全に防ぐ事ができた。

だが、事情を知らないムウはベルリンのデストロイに恐ろしさを知っている為、

デストロイを躊躇せず破壊した。

「貴様かー！ー！！」

アウルはGNビットを発射させ、フリーダムを襲った。

「ドラグーン！」

デストロイの爆発で動きが止まっていたストライクフリーダムは直ぐにトランザムライザーに攻撃を再開した。

トランザムライザーはストライクフリーダムの攻撃を避け、ビームを撃って反撃に出た。

「邪魔すんじゃないぞ！！」

トランザムライザーはGNソード？と両肩のバインダーからビームを撃って、ストライクフリーダムを牽制した。

アウルがストライクフリーダムに少し目を向けたことで、フリーダムはGNビットを何とか避けた。

「キラばかり狙いやがって」

「この声！？ ネオか？」

「声？」

トランザムライザーを中心に精神感應現象が起きた。

「ネオ！　なんであんたがスティングを殺した？」

「この声！　アウルか？」

「アンタも俺達を道具としてしか見てなかったのかよ！？」

「違う、俺は……」

アウルの泣きそうな表情でこれ以上はただの言い訳になると思ったムウは何もいえなかった。

この時、精神感應現象が消えた。

「残量粒子30%か……」

刹那は残量粒子が30%を切った為、トランザムを強制解除した。

「うおおおおー!!」

アウルは感情のまま、GNビットをフリーダムを襲わせた。

「撤退するわよ!」

「しかし、まだ話が「死にたい? キラ君でもあ機体には分が悪い。今は撤退するのよ!!」

「わかりました」

フリーダムはこの攻撃で右腕をやられたが、アークエンジェルがダブルオーライザーを牽制し、二機のフリーダムを撤退させた。

「アウル……」

ストライクフリーダムはジャスティスやダブルオーライザーを警戒しながら、アークエンジェルと共に戦闘中域を離れた。

「ラクスがロゴスをかばう形になったな。これでプラントの人達は少しは目が覚めるか。

ラクス、なまじ世界の人々がお前に心酔する為お前はいつか世界を滅ぼすかも知れないんだぞ」

アスランは呟き、そのまま前線に戻ったが、敵司令部から白旗が上がった後だった。

アーケエンジェルが現れた事により、場が混乱した為、誰もジブリールが姿を消した事に気づかなかったようだ。それに気づいたロゴスメンバーは白旗を揚げた。

アウルはステイングが搭乗していたデストロイが爆発した場所で泣き叫んでいた。

「なんでだよ、後はコックピットから助け出すだけだったのに、ダチもできて、紹介すはずだったんだぞ」

刹那達はかける言葉が見つからず、アウルが泣き止むまで待っていた。

泣き止んだアウルは、ネオをステイングの墓前に連れて来ると誓って、ミネルバに戻った。

16話 ヘブンスベース（後書き）

最後のムウとアウルのやり取りはもう少し請っていましたが、以前の表現を忘れた為、安っぽくなった上に少し強引でしたでしょうか？

オーライザーにGNビットを6基追加しました。

当初からアウルがオーライザーに乗る事が決まっていたいました。

ミサイルとバインダーのビームじゃ物足りない為、GNビットです

ケルデイルのシールドビットをもう少し小さくして、

両翼のバインダーに三基ずつ装着したような感じです。

劇場版のDVDが着きました。海外である事と輸入税の為か3倍近くの値段でしたが、悔いはない出来でした。

ダブルオークアンタがかっこよかったです。出したいのですが、いくらなんでも無理があるんじゃないかねといわれそうなので自重します。

最終回までストーリーの内容は出ていますが、作者はその場の細かい表現が下手な為か少しスランプ気味です。

息抜きに刹那、シン、アスランがZの世界にトリップした番外編を書くかもしれません、流れは劇場Z 逆襲のシャアかな。

17話 それぞれの思い

アークエンジェルのブリッジでラクス達は先日のヘブンスベース戦での報告をエターナルにしていた。

『ヘブンスベースが落ちたか・・・』

モニターに映っていたのはアンドリュー・バルトフェルド。かつて砂漠の虎と言われた男だった。

「はい。私達はとめることが出来ませんでした」

ラクスは己の不甲斐なさに少し落ち込んでいた。

『で、キラと見つかったムウはどうしたんだ？』

バルトフェルドはアークエンジェルのブリッジに居ない人物の事を聞いた。

「キラくんはストライクフリーダムでも緑の粒子をだす機体が倒せなかったのがショックみたいなの。

ムウは何も言ってくれなくて」

マリューは二人の現状を話した。

『戦闘データを見る限り、このMSはMSの概念をぶち壊してるな。機体の量子化ってどんな冗談って話だ』

「ストライクフリーダムはフリーダムのパワーを超えていたあの機体に対抗する為、作られたのにあの機体には通用しなかったわね。以前とはあまり変わっていなかったのに」

ブリッジにある幾つかのモニターではダブルオーライザーの戦闘が映し出されていた。

「人間があのような機体を持つのは危険です。それがデュランダル議長の下にあるのも問題だと思います。このままではデュランダル議長が創ろうとしてる世界になってしまいます」

『デステイニー・プランか……。遺伝子で決める世界か。本当に行うと思うのか？』

バルトフェルドは素直に自分の疑問を口にした。

「議長が研究していい資料も多数発見しています。議長がそのプラ

ンを使わなくても

彼が支配する世界になります」

「僕もラクスと同じ意見です」

ラクスに続き、ブリッジに入ったキラもラクスに同意した。

『大丈夫なのか？』

ブリッジのメンバーはキラに大丈夫なのかと心配な表情をしていた。

「大丈夫です。それよりザフトを止めないというラクスの意見は僕も賛成です。

僕達をテロリストとして指名手配しただけじゃなく、ラクスの言葉に耳を傾けようとしなかったんですから」

『そうだが、もう少し様子を見たほうがいい。監視の目も厳しくなっている』

バルトフェルドは自分達の監視がきつくなっている事を話した。

「そんなに、厳しくなっているの？」

『ああ。世界に知らせた事で、ザフトに協力してるほかの国も監視を始めているんだぞ』

「みんな、テレビを見てみる！！ デュランダル議長が先日のヘブンズベースの事を話しているぞ」

カガリが慌ててブリッジに入ってきて言った。キラ達はすぐさまモニターでデュランダルが映っているチャンネルに変えた。

『先日のヘブンスベースの戦闘で殆んどのログスメンバーを捕まえる事に成功しましたが、

盟主であるジブリールを逃がしてしまいました。我々は総力を上げジブリールの行方を捜しています。

それと皆様にお伝えしたい事があります』

デュランダルがそう答えたら、ラクスにそっくりな人物がデュランダルの隣に現れた。

『私は一つ皆様に謝罪しなければなりません。私の隣に居る彼女は皆様はラクス・クラインだと思いでしょうが、実は彼女はラクス・クラインではありません。彼女はミーア・キャンベルです』

『皆様をだましておいた事は本当に申し訳ないと思っています。どんなに謝罪しても許される事ではありません』

ミーア・キャンベルは深くお辞儀をした。

『彼女の戦争を止めたいと言う気持ちは本物です。私達がこのような事を発表するのは、

深い理由があります。これを見てください』

映像では先日のヘブンスベース戦でストライクフリーダムがザフトのMSを破壊していた。その後にアークエンジェルが現れた映し出されていた。

『私はラクス・クラインです。ザフト軍、地球軍は直ちに戦闘を辞め、撤退してください』

フリーダムとストライクフリーダムがアークエンジェルを守るように移動した。

『彼等の介入した事でジブリールを逃がしてしまいました。他の口ゴスのメンバーが言うには、

彼等が現れた時に司令室が混乱し、その隙に自分達を置いて逃げ出したそうです。

彼等が起こした事件はまだあります』

そこにはラクスがフリーダムをキラに渡した映像だった。それから、アークエンジェルが介入した戦闘が以前と同じように流れていた。

『私がミーアをラクスに成りすまし皆様の前に姿を現すことになった切欠は連合がプラントに核を撃ったからです。その時のプラントの市民は怒りや混乱していました。

中には殺される前に殺せと思った市民は少なくありませんでした。当時は私の言葉では市民を抑えられるほどの支持はありませんでした。

だからこそ彼女をラクスとして市民を抑えてもらいました。

本物は二年前から行方不明でどうしようもなかったと言ったところではないのですが、

彼女の戦争をやめさせ、平和な世界にしたと言う気持ちは本物です』

当時のプラントの状況を考えたら議長が取った行動は最善だと市民は思っていた。

本物が居なければ代わりを使うしかないと誰もが納得できる状況だと理解できていた。

『彼女にラクスの身代わりをするように命令を出したのは私です。皆様には彼女をミーア・キャンベルとして認めて欲しいのです。私はこの戦争が終わったら宥和政策を実行する事をここに宣言します。』

残りの人生をすべて平和の世界にする為に力を注ぐ事が皆様に対しての贖罪になれる事をここに願いたい』

この後にはまだ二人の話があつたが、アークエンジェルのブリッジでは重い空気が漂っていて、この後の話を聞ける状況時ではなかった。

「なんなんです、あの放送は！！　まるでラクスが一方的に悪いみたいじゃないですか」

キラは怒りのまま口にした。

『仕方ないだろう、実際にお前達が現れた事でジブリールを逃がしたのは事実だ』

バルトフェルドは事実だと言わんばかりにはつきりと言葉にした。

「バルトフェルドさんは議長の肩を持つんですか？」

「キラ君、落ち着いて。彼もそんな風に言ってるつもりはないのよ」

マリューはキラを宥めるように口にする。

『ジブリールがとんでもない事をすれば全て俺達の所為になり、世界を敵にまわすことになるっていいんだよ。俺は』

「ラクスはただ、平和な世界にしたいだけなのに……」

「ジブリールの行方はどうなってるんだ？」

カガリがジブリールの行方を聞く。

『まだわからんが。今だ同盟を組んでいる国に逃げてるのは予想はつくが人一人を探すのはさすがに難しい。本人は負われる自覚があるしな』

「デュランダル議長は本当に宥和政策を推し進めると思つか？」

カガリの質問にキラはハッキリと口を開いた。

「僕は議長を信じられない。平和を願うラクスや僕達を指名手配をする彼を僕は信じる事はできない。

彼等はラクスの言葉を聞こうとしなかった」

『だが、お前でもダブルオーライザーには勝てなかったんだろ？』

「ダブルオーライザー？」

『あの、緑の粒子を出す機体の事だ』

キラ達の疑問を解くように教える。

『エージエントが手に入れた情報だ。

それによるとあの機体は背中の支援機とドッキングする事であの化け物じみた性能を発揮するみたいだ、支援機を作った連中ですらあそこまでの性能があるとは思ってなかったらしい』

モニターではダブルオーガンダムとオーライザーの別々の設計図が映し出されていた。

「ダブルオーガンダム……」

以前のダブルオーと今のダブルオーの映像で、背中のオーライザーのコックピットがあることがわかった。

「背中のコックピットを破壊するか、ドッキングさせなければ勝機が出てきますね」

『しかし、ラクス。あの機体が出る前に潰す事になるとこつちから仕掛けなければならんぞ？』

「ジブリールより危険だと私は思います。だからあの機体の破壊を優先させたほうがいいと思いますわ。じゃないとデュランダル議長をとめられる者がいなくなります。

あの機体を破壊できれば私達がデュランダル議長を止めることも簡単なはずです」

殆んど負けなしたったキラを圧倒した機体は危険だとアークエンジン
のクルー達は以前から思っていた。キラの出世をしっている力
ガリやラクスは特に強く思っていた。

「何か策はあるのかキラ？」

「ドラグーンを予め外して出撃します。大気圏内だとあれは荷物で
すから。それに出力をスラスターや火力に回します」

キラは殺される恐怖を思い出させたダブルオーライザーを無意識に
危険視していた。

フリーダムに乗っていればラクスが望む世界にさせる事も出来ると
信じていたが、

ダブルオーの存在でラクスの願いは愚か、自分が殺されると感じ敵
視している。

「ジブリールの行方がわかれば、ミネルバが出るでしょう。予め先
回りすればいいでしょう」

ラクスの言葉にバルトフェルドは。

『ジブリールはどうするつもりだ？ さっき言ったようにジブリー
ルがとんでもない事をしたら、
全てお前にしわ寄せが来るぞ』

「それでも、あのような機体は人間には無用だとおもいます。ジブ
リールはエージェントに任せますわ」

『ふう。わかったよ。ジブリールの行方を何とかザフトより先に

見つけるから、

お前達はミネルバを先回りして叩いてくれ。場所によってはザフトより先にジブリールを捕まえられるかもしれんし』

「僕は機体の調整を始めます」

キラはそう言つて、MSデッキに向かった。ラクスもキラの後を追うようにブリッジから出つて行つた。

『君達は本当にこれでいいと思つていいのか？』

「ラクスさんが間違つていないのはわかるけど。世論はデュランダル議長側ね。

議長を倒して、デステイニー・プランの事を公表すればラクスが正しかつたと信じてくれるとそ信じているわ」

『そうか・・・（全く、ラクスを神か何かと勘違いしているのか？）』

『

「なんで、いまさらこんな事を聞くの？」

『いや、世間の風当たりがきつくなるから心が折れないか聞いてみただけだ』

「そう」

ミネルバでは議長の放送で話が持ちきりだった。

「アスランはいいのか？　これで世論はラクスを敵として判断したぞ」

ハインはアスランが何も気にしているようじゃなかったが不気味に思えた。

「言いに決まってるだろう。彼女は自分がどれだけの人間を動かせるか知らず、

二年も隠居していた。俺も人の事を言えないが、ラクスが表舞台に出てこなければこんな事にはならなかったはずだ」

アスランは迷い無く口にした。

「ラクスは自分が望む世界にならないと気がすまないんだよ。

ラクスを止めないと彼女はいずれ世界を破壊する。それだけの支持《力》があるんだ。

キラも自分に勝てる人間が居ないと思ってるからフリーダム一機だけで戦闘に介入した。

キラとラクスは世界を変えることも破壊する事もできる。

ラクスが人の意見をちゃんとい聞くなり彼女はプラントにいて、政治を習っているはずだ。

それがいまで」

「まあ、お前が迷っていないのが逆に怖かったから聞いたただけだ」

「すまなかったハイン。気をつかわせたみただけ」

自分が一人で淡々と喋り、それを嫌な顔をせず聞いてくれたハイネに謝った。

「すこし、意固地になっているみたいだな」

「そうみたいだ。ガルナハンの事やアウル達エクステンデットの事を思うとな、

キラ達はそんな事を知ろうとおもせず、好き勝手暴れてるのが無性に腹が立ってるんだろな。俺は」

「まあ、あまり気負うなよ。俺もお前の力になってやるから」

「ありがとう。ハイネ」

「それに、議長が最後に言ってたことは納得しちまったしな」

「そうだな」

議長が最後に言ったことはコーディネーターと言う存在はいずれ自然消滅する事だった。

遺伝子が相性よくなかったら子供が産めないコーディネーターは少しずつだが減少すると説明した。

プラントでは子供が産めなかったら結婚できない。

それは裏返せば、子供を生む為に結婚をしなければならないということになる。

相思相愛で結婚できるケースが少なくなっているプラント。

いずれ若い人達は子供を作らなくてもいいから一緒に居たいと思う人たちが急増するだろうと見解した、

デュランダル議長はコーディネーターはいずれ消えるとハッキリ言
った。

「考えれば、簡単な事なものな、俺達はナチュラルより欠陥だと思
わせる言葉だったな」

「そうだな。好きな人が出来ても結婚できなかったらショックを受
けるのは当たり前か……」

「うひょーーーー！！　これがザフトの新型艦ミネルバかーーーー
！！」

甲板で話していたアスラン達は子供が玩具を見つけたみたいな声
を出している男が見えた。

「誰だアイツは？」

「さあ」

「おーい！！何かこの艦に用があるのか？」

ハイネは大声でミネルバを見て喜んでいる男に話しかけた。普通は
怪しい奴は拘束するが、

堂々と目の前でああも騒いでいるの為、ハイネは大声で確認をした。

「ハイネ……」

「いいだろう。ああも堂々としているからこっちも堂々ときけばいい」

胸を張って言ったハイネに苦笑するアスラン。

「刹那ってパイロットはこの艦にいるのか？」

「刹那！？」「」

「俺はさ、刹那のMSの追加武装を持ってきたんだよ」

「どうする？」「」

「どうって・・・、とりあえず刹那に確認するか」

ハイネ達は刹那に聞いてみたら、知り合いらしく艦に入れることになった。

その後、議長とも知り合いだった。そのことは刹那も驚いていたが。

「俺はロウ・ギユール。ジャンク屋だ。よろしく」

ロウが名乗るとミネルバのパイロット達も名乗った。その後、ロウに武装があるところに案内された。

「それで、追加武装って？」

「議長とコンタクトをとってよ、ザフトが持っていたデータでダブルオーの追加武装を俺が作ったんだ」

ロウは嬉しそうに語る。

「どんな武装だ？」

刹那も少し楽しみにしているのかどんな武装かを聞いた。

「一つはデータ上だけ存在していた武装を作ったぜ。まずはこれだ
GNソード？ブラスターだ。
他のはパーツだ」

「良く作れたな」

刹那はあきれながら聞いた。

「メカに関しては俺は天才だぜ！！」

胸を張るロウに。

「金とか、材料はどうしたんだ？（イアンが居たらなんて言うか。
気が合って酒盛りするか、
ライバル心むき出しになるか。あわせてみたくなったぞ）」

「議長が出してくれたぜ。こっちは珍しい武装を作れるうえに依頼
料として金もくれたからな。
いい事づくめだ」

「GNソード？ブラスターはGNソード？と同じように常に装着す
ればいいか。
他に何か作ったのか？」

刹那は新しい武装を見て他にないのか聞いた。

「これはオーライザーの設計図を見て思いついたんだ」

「何だこれは？」

刹那が見たのはオーライザーだった。ただバインダーの砲門が少しでかいのと、コックピットの下が少し丸くなっている。

「俺なりにGNドライブを作ったぜ。最もそっちのGNドライブと違って有限だけど」

「ぎ、擬似GNドライブを独自で創ったのか？」

刹那は驚いた顔でロウに聞いた。だした。

「ああ、以前GNドライブは質量崩壊で陽電子と光子を発生するって言っただろう。」

だから俺なりに考えて作ったんだ。しっかりと粒子も出さずぜ」

（ロウが向こうの世界にいたら抹殺されるレベルだぞ。それにイアンが聞いたら本当にどう出るんだろう）

「オーライザーが何の為にあるのかわかっているのか？」

オーライザーに擬似GNドライブをつけたのは驚いたが、ツインドライブを完全に同調させる為にオーライザーは作られた為、

ツインドライブが同調しなかったら意味が無い。

「ああ、ドッキングした後は、オーライザーに搭載したGNドライブは停止するから、

ツインドライブの同調には問題はないぜ。

ドッキングした後はツインドライブから補給できるしな。

これならオーライザーも単機でMS並みに活躍できるぜ。ああ、それとザフトが作ったビットも装着できる」

親指を立てて、にっこりと笑う。

直ぐにアウルを呼んで、ドッキングさせた。

オーライザーに搭載した擬似GNドライブはオリジナルと同じ色の粒子を出していた。

出力も機動力もMSと遜色ない動きをしていた為、刹那はおどろいた。

GNソード？ブラスターのビームは威力はGNソード？をはるかに超えていた。

「つーか、ザフトの技術者たちが作ったオーライザーが無駄になったな」

アウルが言っではならない事を口にしたが。

「それなら、俺に出来ないか。あのオーライザーも改造したし」

ロウも技術者達が聞いたらショックを受ける言葉を口にした。

「さすがに、俺の判断だけではOKといえないぞ」

あきれた刹那はデュランダルに連絡を取り、オーライザーの事を話した。

『全く、ナチュラルであるロウがここまでだとは。本当にコーディネーターという存在が意味がなくなってしまうな。君の好きにするといい』

議長はそう言って、通信を切った。

「いそがしそうだな。デュランダルのおっさん」

「だろうな、やる事はたくさんあるだろうし。それより、アウルはどうだ。あのオーライザーは？」

「動かしやすいし、ビームの威力も高い。単機でそれなりに戦えるのは俺にとって好都合だ」

「ネオか？」

刹那はアウルが単機で戦いたい理由には見当はついていて、それでも聞いておきたかった。

「ああ、ネオをスティングの墓の前で土下座させてやるからな」

「殺さないのか？」

「殺したところで、スティングは生き返らないし。ネオにはスティングを殺した罪を背負って生きてもらうよ」

復讐心に取り付かれ他と思っていた刹那だが、アウル言葉を聴聞いて安心した。

二人はロウがいるミネルバのMSデッキに向かった。

「どうだった？」

「お前にやってもいいだよ」

その言葉に、ロウは喜んでいた。刹那達が来るまでにミネルバの整備班と気が合ったのか仲良く話していた。

「ロウ、ひとつ頼みたいんだが」

刹那はロウの腕を見込んである頼みごとをした。

「今のダブルオーライザーを展開する高濃度粒子領域をさらに展開する事は出来るか？」

「とりあえず、ダブルオーガンダムを詳しく調べてみないと分からないぜ」

「なら、調べてくれ。クライン派を止める為の切り札になるかもしれないから」

議長とアスランはラクスよりラクスを支持するクライン派に頭を悩ませていた。

「クライン派を止めるか。いいぜ。試してみるよ」

刹那はダブルオーライザーとトランザムライザーの詳しいデータをロウに見せた。

カナード Side

「キラ・ヤマトはMSに乗っているか……。お前の存在は世界を混乱させる」

俺達は戦いの中で存在してはいけないのに、お前は戦おうとする。

「お前が、自分の存在を軽く見ているなら、俺が止める。お前の存在は世界を更に混乱させる。」

あのジョージ・グレンのように。プレアはそんな世界の為に犠牲になつたわけじゃない。

プレアが望んだ世界は……」

17話 それぞれの思い（後書き）

はい、オーライザー改の誕生です。

それだと格好悪いからオーライザーのままです。

ロウなら仕組みさえわかれば擬似GNドライブが作れるかなと思い作らせました。

新しい？オーライザーの説明

ドッキングしたときは擬似GNドライブは補給機能だけが起動します。

補給が終われば、ドッキングを解除すまで全ての機能は停止のままです。

オリジナルと同じ色は直接オリジナルから補給すからと言う事で同じ色です。匙が搭乗していたオーライザーより戦闘を考慮した為、性能はビームの出力、機動力はフリーダムより上。

単機で活躍するための設定です。

私見ですが、フリーダムクラスのMSはRX-78よりパワーは下なんじゃねえと思いますがどうでしょう」？

GジェネだとSEEDと00は大分優遇されてますし。

少なくとも、SEEDの核分裂炉よりU・Cの核融合炉の出力のほうが上だといわれてますし。

ガンダム無双2のOPを見た時はRX-78がストライクフリーダムと互角なんてありえねえと思いました（Sフリーダムに勝てるわけがないという意味で）。

その後、いろんなSSの書き込みを見たらをみたらSEEDのMSが最弱だという書き込みがちらほらありました。、皆さんはどう思いますか？

誤字、脱字、感想、この表現よりこっちの表現のほうがいいという

指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

感想を返信する時に、自分のコメントを削除しようと思いましたが、間違えて感想を削除しました。削除された方は本当にスイマセンでした。

18話 オープの答え

スウェン Side

ヘブンスベースの戦いから数日がたった。

その間に俺はデュランダルからあるファイルを渡された。
ブルーコスモスが起こした事件を記したファイルだ。

その中には、かつて俺が家族と住んでいた地域でテロがあったと記されてあった。

地球軍である俺はデュランダルが提示する情報は信用できないが、俺が軍に引き取られてからの教育を思い出すと納得してしまう。

洗脳、薬物、銃火器の訓練……。

デュランダルはしつこい位に戦争が終わったときに俺が何をしたいか聞いてきた。

俺だけじゃなく、他の兵士にも聞いていたことは後になってわかったが。

俺は観念して、宇宙飛行士になるのが夢だったと答えてしまった。

たとえ笑われようが、俺は敗残兵だ何時殺されてもおかしくない。

そんな事を考えていると、ザフト兵数名に呼ばれある部屋に向かっ

た。

その部屋にはデュランダルと大柄の男が立っていた。

「コイツですか？」

「ああ、彼は強いうえに星に興味がある、君たちにとっても欲しい人材だろう？」

「そりゃあ、俺の腕はこれだし」

良く見ると大柄の男の左腕が半分なくなっている。それでも笑顔で自分の左腕を動かし笑っている精神には驚いた。

「いよいよ、処刑か？」

俺はそう言つと、デュランダルは

「いや、彼はD・S・S・Dに所属しているエドモンド・デュクロだ」

「エドモンド・デュクロ。元はお前が所属している地球軍の兵士だった」

「アンタはコーディネーターなのか？」

「イヤ、ナチュラルだが、どうしてそんな事を聞くんだ」

「エドモンド・デクロといえば、連合ではそれなりの名が通った指揮官だった、
アンタは二年前に退役したと噂が流れていた、
そのアンタがコーディネーターでも二年かかるD・S・S・Dに入ったのが不思議だと思って」

俺は自分が思った事を口にしたら、エドモンドは笑いながら

「コーディネーターが二年掛かるなら俺は三倍の6年かければいい、そんな気持ちでやって寝る間も惜しんでいたら、合格できたんだよ、才能がなくても好きな事したいなら才能がある奴の何倍も努力すればいいだけの話だ」

「それで、何で俺を呼んだ？」

少し嫉妬していただろう、エドモンドが羨ましく思えたため、直ぐに話をそらした。

もし、ブルーコスモスがテロを起こさず俺が普通に暮らしていたら、彼のように生きられただろうか？

宇宙に興味があった、両親に望遠鏡を買ってもらったときの事を思い出していた。

「話と言うのは——」「議長、此处からは俺が説明する」——「そうか」

「率直に言う、D・S・S・Dに入りたくはないか？」

「兵士である俺にन्द？」

「お前さんは星に興味がある上にMSにものれる、D・S・S・Dは技術は高いが、

殆んどが研究者で技術を奪いに来る連中を相手には無力なんだよ。

俺の腕はこの様だ。お前さんに研究だけではなく護衛も頼みたいんだよ。

傭兵を雇っても何時攻めてくるかわからんし、護衛する人間にはD・S・S・Dは面白みがないからな」

「お…俺は何人も殺した兵士だぞ？」

嬉しい申し出ではあつたが、俺は戸惑っていた。

「それは、上の命令だからだろう？俺もさっき言ったように軍人だつたんだ。

お前さんが気にする必要はないと言っても気休めにもならんか…、

だつたらこれからの世界の為に力を貸してくれ、俺達人類はいずれ外宇宙に進出しなければいけない、その為にお前さんの力を貸してくれ」

「俺は……」

「上を見て進め、横や下を見てたら嫉妬したり脅えたりするから上

をみる、

その向こうにある星を見ていればいい」

エドモンドの言葉に何故か俺の心に響いた、かつて両親に自分の夢を語り、応援してくれると言ってくれたときの自分を思い出した。

「俺も……星を見てみたい……」

自分の声が震えているのが初めて気づいた、今は俺の精一杯の言葉だった。

自分の弱さに今更恥ずかしくなったが、エドモンドは俺に力強く

「それじゃあ、これからよろしくなスウェン。俺の事はエドモンドでいい」

それから、直ぐにD・S・S・Dに向かう準備をした。

俺の荷物は全くなかった為、直ぐにザフトの基地を出る事になった。

俺達はデュランダルに挨拶をする為に、彼のいる部屋に戻った。

「ありがとうございます」

「いや、私はただすべきことをしただけだ、

戦争の被害を受けた人々の生活や職業を整えるのは当たり前前の事だ」

「いつか、アナタに恩を返しに来ます」

両親が死んだ事故の真実や俺の夢を叶えてくれた人。

「そんな事はいいい、君はこれから人類が安心して外宇宙にいけるよう頑張ってくれ」

議長に挨拶を済ませ俺達はシャトルに向かった。

その間にエドモンドはD・S・S・Dのメンバーの事を語ってくれた。

S i d e o u t

シンとハイネが模擬戦をしている中、上層部からジブリールの居場所を突き止めたという情報が入った。

「シン、ハイネ。議長が呼んでる」

アスランは二人に知らせ、三人で議長のところに向かった。

「ジブリールが見つかったって本当か？」

「ああ」

ハイネの質問にアスランが答える。

「いったいどこに隠れてたんだ？」

「おそらくオーブだぞシン」

「！！」

「お前はいいのかアスラン？」

表情に一切の戸惑いのないアスランに少し心配したハイネ。

「ジブリールのような人間を放って置けば不幸になる人たちが増える。アウル達のようにな。」

俺はもう戸惑わない。撃つべき敵を撃つ。それだけだよ。キラもラクスもな」

「・・・・・・」

「キラは知らないだろうな、MSに乗る為に、家族や自分の国を守る為に、どれだけの努力が必要かを。」

俺もMSに乗る為に色んな訓練をした、コーディネーターだから、少し早く乗れた。

キラの存在は軍人達の努力を全否定してるようなものだ」

「確かに、弱くても努力すれば報われると思ってる連中にすれば悪夢だな。科学者達はキラ・ヤマトのようなコーディネーターが存在すると知ったら、考えるまでも無いか」

「だから、キラが表舞台にでるのは危険だ。あいつがこれ以上表舞

台で戦うなら俺は容赦するつもりはない」

アスランは決意な表情をして、デュランダル議長がいる部屋に入った。

「おせえぞ」

その言葉に驚愕したアスラン達だったが、声の主がアウルだと知って納得した。

「すまない、それで、議長、ジブリールの居場所はオーブだと言うのは本当ですか？」

アスランは苦笑しながらアウルに謝り、直ぐに議長にジブリールがオーブにいるのが本当なのか確認した。

「ああ、残念ながらね。これから、ミネルバだけでオーブに言ってもらっ」

デュランダル議長の言葉に少し戸惑ったアスラン達。だがハイネは直ぐに理解した。

「世論の事もあるから、総戦力で向うのは得策じゃないですね。か
とって、少数で行って返り討ちあうのが関の山ですからね。ミネ
ルバの戦力な一国と戦える力がありますし、万が一戦う事になった
ら数が少ないから市民の被害は出さなくてもすむし」

「なるほど、戦力が多いとオーブの市民の被害も馬鹿にならないが
オーブの攻撃の的が少なければ被害が少なくてすみますからね？」

「そういうことだ。シンやアスランには悪いと思っているが、受け
てくれるかね？」

「はい」

二人は同時に返事をした。

「ジブリールを逃がす事だけは避けなくてはなりませんし」

アスランはそう言葉にした。

「ならば、すまないが今すぐに出発してくれ。これ以上の時間を与
えればジブリールは月に逃げるかもしれんし」

その場にいた全員が返事をして、ミネルバにもどった。

「そろそろオーブにつくな」

ハイネがそう言うとアスランは各自の配置を説明した。

「セイバーとインパルスはミネルバの防衛に当たってくれ、当然デユートリオンビームが届く範囲から出ずにだ、レイは二人の援護を頼む。他は臨機応変に対応してくれ」

アスランの指示に全員がうなづいた。その後、直ぐに各自MSに待機した。

『新型のオーライザーの性能はどうだ、アウル?』

『シンか、悪くないぜ。火力なんてブラストインパルス並みにあるぜ』

『マジかよ？ GNフィールドにビットもついてるなんて、ドンだけ高性能だよ？』

『俺も驚いた、それにカラーがいいぜ。俺に合ってるし』

『そっちかよ？』

『まあ、ダブルオーとドッキングした場合は、俺はビットの操作だけだ』

『それでも、俺は助かるぞアウル』

二人の会話に入ってきた刹那にアウルは

『それって嫌味かよ、俺まだお前に一撃も入れてないんだぜ？』

『けど、確実に腕は上がってきてるぞ』

アウルは自覚はないが、実際に刹那も一撃をもらうつところだったらしい。

『さて、話も此処までだ、そろそろオーブの回答が来る』

刹那の言葉に周りが静かになった時に、オーブからの回答が来た。

「オーブ政府を代表して要求に対し回答する。貴官等が引き渡しを要求しているロード・ジブリールなる人物は我が国内には存在しない。」

それにも関わらずこのような武力による恫喝には大変遺憾に思う。よって直ちにミネルバに退かれる事を要求する。」

その言葉に怒りをだしたのはアスランが先立だった。

『馬鹿な答えを・・・、艦長！』

『わかっているわ。MSは直ちに発進させて』

アスランは怒りをあらわにしながら呟いた。

各自MSがミネルバから発進される、ただ、シンはアスランより冷静になってデステイニーを発進させた。

『デステニー、シン・アスカ行きます!!』

番外編 新訳Z 2（前書き）

来週あたりに20話を投稿します。

番外編 新訳Z 2

刹那 Side

いきなり、他所の世界に飛ばされた俺達（シン、アスラン）は、エウーゴを助けたため、

そのお礼にこの世界の事を話してもらった。

その結果、俺達は元の世界に戻る保障が全くない為、エウーゴに入った。

入って直ぐに、アーガマは近くの港で補給を終え出向を始めた。

その途中で、ティターンズのMS部隊が奇襲を仕掛けてきた。

ミサイルで港口を封鎖され、アーガマが出られなくなった為、奇襲を仕掛けた相手にMSで応戦した。

『シン、アスラン、腕前を見せてもらっぞ』

『はい！』

クワトロ大尉と共にMSで発進した。

『刹那は私と共にミサイルの迎撃、アスランとシンはカミーユとMSを落としてくれ』

『『『了解!』』』』

俺はダブルオーライザーのビームでミサイルを落としていった。

『さすがだな。MSもそうだが、射撃の腕もたいしたものだ』

リック・ディアスもミサイル迎撃を始めた。

S i d e o u t

ガンダムMk-?とインパルスは二機のムラサイの相手をしていた。

『あの、青いガンダムはあそこか!』

『落ち着け、ジェルド。先にこいつ等やるぞ!』

『わかっている、あわせろよカクリコン』

ムラサイはそのまま、二機のガンダムに接近した。

『シン、左は俺がやる』

『わかった』

インパルスは右のムラサイに向かった。

「一対一か！ 若いパイロットか？」

ムラサイは近距離でビームを撃つが、インパルスのシールドで防がれる。

インパルスはビームサーベルを抜き、そのままムラサイの腕を切り落とした。

「なんだと！？」

「カクリコン！？ くっそ、あのガンダムもやる」

「どこを見ている！！」

ガンダムMKⅡ？はビームでムラサイの足を打ち落とした。

「くっそー！！」

『ジェリド、撤退するぞ。他のMSも落とされた』

ムラサイはそのまま。後退し撤退をした。

敵がいなくなったことを確認するとインパルスとガンダムMKⅡ？はアーガマに戻った。

敵を迎撃した刹那達は何時でも出られるように待機していた。
待機し始めたらブリッジ通信で、ヘンケン艦長は刹那達の働きを賞

賛していた。

『君達の働きがなければ、我々の被害は甚大であっただろう。艦長として全クルーに代わり感謝の意を表する』

「ありがとうございます」

『シン・アスカは先に休んでくれ。他のものは少ししてから休んでくれ』

ヘンケン艦長の言葉にシンは納得いかなかったのか。

「なぜ、自分だけ休めと命令をだしたんです？ 俺は用なしですか？」

自分だけ休めと言われたため、少し不満になったシンだが。

『ははは、違う違う。君の機体に我々のMSのエンジンを取り付けようと思ってな。』

ジャブロー降下作戦に間に合わせるが、今の敵が来ても君のMSは動かせないからな。
待機するより休んでいたほうがいいだろう？』

「スイマセンでした。生意気な事を言って」

自分の勘違いだとわかると、シンは素直に謝った。

『なに、私も言い方が悪かった』

シンはそのまま休みに行ったら、すぐさま異変が起きた。

『テンプテーションが攻撃を受けてるだど？ 刹那とクワトロ大尉、それとアスランにいかせる。クワトロ大尉は百式とメガバズーカランチャー試運転をしておいてくれ』

「わかりました。刹那、アスランは付いてきてくれ」

「了解」 「了解しました」

刹那とアスランが返事をする、カミーユはテンプテーションの事を聞いた。

「テンプテーションってあのブライド・ノア中佐が乗っているテンプテーションですか？」

カミーユの言葉にクワトロ大尉は僅かに驚き、カミーユに質問をした。

「知っているのか？」

「元ホワイトベースの艦長、ブライト・ノア中佐ですよ」

「よし、カミーユも来い」

その言葉に、クワトロ大尉はカミーユについて来るよう指示をだす。

刹那達はアーガマから発進し、テンプレーションに向かった。

「なんで、民間シャトルが攻撃を受けてるんだ？」

「なんだ！？」

カミーユが不思議に思っているとMAとすれ違う。

「MAに見えたけど」

「たしかに、MAに見えました」

カミーユとアスランがそう言うと、百式はメガバズーカランチャーを撃つ体制をとっていた。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・あれに乗っている男のプレッシャーか？ お前達！！」

MKⅡ？、ダブルオー、セイバーは一斉にビームを撃つが、MAには掠りもしなかった。

「こしゃくな！！」

百式もメガバズーカランチャーを撃つが、それすら避けた。

「逃がすか！！」

セイバーはMAに変形し、MAを追いかけた。

「MAに変形した！」

カミーユとクワトロ大尉はセイバーの変形に驚いた。

アスランはそのまま、最高速度で追いかけて、MAに接近した。

「ほう、このメッサーラに追いつくか。だがしかし」

MAは急停止した、その所為でセイバーは後ろを取られた。

「しまった！！」

セイバーに狙いを定めたMAだったが、アスランはSeedを発現させ、ギリギリでMAの攻撃を避けた。

「ほう、いい腕だ。しかし隙だらけ！！——チィ」

MAテンプレーションが飛行していた方向から、ビームがMAに向けられ撃たれたが、MAのパイロットはそれすら避けた。

「やる！！」

「あのMS、赤くなっている。機動力が桁外れに上がっている。それにこの感覚は？」

トランザムライザーの機動性に少し驚いたMAのパイロットは通信で名前を告げた。

『たいした者だな君達は、私はパプテマス・シロッコ。いずれ戦場

で会っただろっ』

そういつて、この場を離脱した。

『待て!』

『アスラン!! 深追いはするな』

刹那の言葉で冷静になったアスラン。

『すまない、少し熱くなりすぎた。しかし何てパイロットだ』

『お前達の世界のコーディネーターも形無しだな』

『全くだ』

トランザムライザーはトランザムを解いて、テンプレーションが居るほうに戻った。

『アスラン。どうだ、こっちのMS戦闘は?』

『先に攻撃を当てれば問題はないが、パワー勝負をしたら確実に競り負ける。核融合炉搭載MSは俺達のMSだと分が悪すぎる』

アスラン達の世界のMSは殆んどがバッテリーで動いている。その為、この世界のMS相手には分が悪いと判断したため、力比べはしないほうがいいとシンと話し合った。

ビームサーベルやビームライフルは普通に敵を落とせる為、さほど問題はないと思っていたアスランだが。

『これから、あんなパイロットが沢山居るならセイバーとインパルスはヤバイな』

格下相手なら攻撃を酒、一方的に攻撃すればいいが、腕が立つパイロットだと確実に力比べになる。

『インパルスにクワトロ大尉が乗っていたMSの核融合炉エンジンを付け替えるといっていたから、次はセイバーの番だろ』

『わかっているさ。正直言えばそれがなければ俺とシンはこの戦いでは生き残れないしな』

刹那達は百式と合流した。

『すみません、大尉。逃がしました』

アスランはクワトロ大尉に逃がした事を報告した。

『かまわんよ。で、どうだ、この世界での初めての強敵は？』

『正直言つて、今のままでは俺もシンもいずれ死ぬでしょう。機体性能だけではなくパイロットとしての技量も此処では中の下がいいところでしょう』

アスランは素直に自分とシンの技量を報告した。

『そうか、だが君達は若い、まだまだ伸びるんだ。これから力をつ

ければいい。

それに、相手の力を素直に受け止められた君は評価できる』

『そうですか？』

『そうだ、相手と自分の力の差がわかっているなら、戦りようはある。』

それを知っていれば戦場で生き残る確立もぐんと上がる』

テンプテーションの人達が自分達は助かったと安堵していたけど、その中でカミーユの幼馴染のファの両親が殺されたと泣いていた。

理由は、ガンダムMk-?を盗んだカミーユの隣人と言う事らしい。

「何なんだよ。ティターンズってのは、そんな理由で人を殺しているのかよ!!」

「シン……、僕もティターンズのやり方は許せない」

シンがティターンズに対して怒りを感じていた。それを聞いたカミーユも同じ気持ちをしていたが、

異世界の出来事に怒りを感じているシンに好感を持ったようだ。

シンはテンプテーションの救出に向かわなかった代わりに、この世界の出来事を調べていた。

その事でアスランよりティターンズに対しての負の感情が大きい。

ブライド・ノアは助けしてくれた俺を刹那達に言った後と艦長達と共

に作戦室に向った。

シン達は自分のMSの状態を見に行った。

「凄い・・・、パワーが依然と桁違いだな」

「けど、バランスが悪くなりかなりピーキーになっているからな。なんせバッテリーを外さず無理やりねじ込んだようなもだからな」

整備師がシンに伝える。

「マジかよ・・・」

「破壊されたら修理できないぜ。なんせ内側はめちゃくちゃだからな」

そうとう無理したのか、大破などしたら修理できないといわれたが。

「安心しろ、インパルスの中にあるデータを下に新しいインパルス

を作るだと」

そのことを聞いたシンは喜んだ。

「カミィユが設計したMSと同時期につくるみたいだぞ」

「カミィユって、MSの設計も出来たのか？」

シンはカミィユの知識を驚愕した。

「本人は暇つぶし程度って感じで設計したらしいが、完成度が高いからなそのまま技術者たちの下にいったそうだ」

それを聞いたシンは自分も頑張らないという思い出シンは地球降下作戦までにインパルスに慣れるよう訓練をした。

今のインパルスは先程の言ったようにパワーは上がったがバランスが悪くなっている、しかし、シンは持ち前のセンスでそれを克服した。

その事に、クワトロ大尉達も驚いていた。

セイバーも核融合炉を搭載させたがインパルスと同様、バランスが悪くなったがアスランも直ぐに克服した。

番外編 新訳Z 2（後書き）

インパルスとセイバーにはノーコメントお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2459p/>

Seed？ そんなものより純粋種だ！

2011年10月27日19時57分発行